條公等只兵力威を張り人を壓伏するを知て　天恩を下に布くを見に乏し有人不助之成否如何んか歸せむ

廿六日民政局雇岩男助之丞書を米田虎之助に贈り盤城平に着任せし旨を報し且つ十一日二十日仙臺口兩度の戰鬪を慰問す

〔佐田家文書〕

從盤城平謹而奉錄上候次第ニ冷氣ニ罷成殊更遼遠之山野被遊御進擊之處彌增御機嫌克被爲入奉恐悦候隨而助之丞儀も已ニ歸鞍ニ差臨居申候處去ル八日俄ニ鎭將府より被爲召今般奥州官屬之邦域一刻も折合候樣ニとの思召ニ而民政局御取建ニ相成右爲御用江城十一日ニ被差立爲同僚肥前より福島德之助阿州より板坂半之丞外ニ舊政府御普請役三人被差添白川口より棚倉を經一昨夕當盤城表ニ着仕候惣休重任之上殊ニ創業之儀ニ而尚以不容易惣し而三人ニ諸事引受被仰付候へハ誠ニ非常之大任ニ御座候へ之辭表も差出候得共鎭將府殊之外御喝ニ而寸陰も蒼生之塗炭を被爲救度其上官兵次第ニ進擊ニ付而ハ假令一旦分捕等之穀類於有之も里數相隔り運輸之儀等も或ハ不都合ニ至居候半も難計山海之遠より懸而御案勞不一方仍而裁判筋ニ就而過誤失典等ハ聊御搆不被爲在各淮分を盡し相勤候樣ニとの事ニ付御精神を奉感佩充分ニ御受罷越候事ニ御座候扨之着即下宍戸健太より承申候去ル十一日ニハ仙臺口手始之御進擊殊ニ抽各藩美事之御無戰被遊候由死傷之人も貳拾人餘ニ及候由御苦辛之程更ニ如何計歟と奉恐察殊ニ死傷之人ハ疾痛慘怛之至ニ奉存候得共邦家興隆之御基礎と奉存候へハ眞ニ以奉慣悦候尙廿日ニも非常之御激戰と承候へハ御苦心御配慮之程幾重ニも奉恐察候

四條殿ニも御用被仰越候間直樣中村ニも罷越候筈ニ御座候へ共先民政局も當盤城ニ御取建ニ付彼是と多忙ニ罷過申候間何之一兩日內少將殿下ニも拜謁之積ニ御座候間必罷出候而可奉賀と奉存候得共先以幸便乍恐奉申上候恐惶謹言

八月廿六日晚

岩男助之丞
俊　貞花押

虎之助樣
御左右

乍恐奉申上候氣候不折合之砌愈以御寢食ゟ御忘可被遊と奉存候へハ隨分共御自愛御專要ニ乍憚奉萬祈候
紙中不都合ニ亂筆申上候段之乍恐御免可被下樣奉願上候

八月廿七日天皇即位の大禮を行はせ給ふ

〔防長回天史第六編中〕

明治元年後半期ノ大勢〈抄略〉

二十七日(八月)即位ノ大禮ヲ紫宸殿ニ行フ儀式悉ク復古ノ意ニ適ハシメ只唐制ノ禮服ヲ脫ス

八月廿七日長岡護美鎭將府に出頭す土方大一郎曰く近來小賊の頻りに烏合して安動するものは舊幕元執政酒井雅樂頭及ひ其臣志水三九郎星野乾六等の煽動に據るとの疑あり之を詰問せんと護美輕舉して事を誤らは國家膺懲の大典を傷けんとて之を止む

〔子爵長岡家文書〕

〈松竹梅文庫護美手張抄略〉

八月二十七日午時頃迄冷雨夫より晴に赴く寒風颯々

○早起時に增田來り而云勝房州昨夜與大久保談話一事は合して一事は不合と松月院に屯集せる兵は勝より退散をすゝむ

○出席

○土方大一郎云小賊の頻りに烏合して事を謀り妄動をなす必す根據あらむ姫路先城主雅樂頭は其幕元老執政なり而今東京府にあり竊にきく本藩と議不合隔絕せり本藩より同心之徒は皆脫し來りて與に巢鴨と云ふ邸に住す此侯は無事之人

苟且なる可けれと是をたてものにして臣下且幕臣等事を設くるならむ用人志水三九郎星野乾六儒者諸葛次郎助尤事を倡ふときく請ふ之を詰問せむ余云ふ不然夫　皇政維新之始天下人々拭目之折柄刑律は膺懲之大典にして事を誤る可らす先つ因而興るゆゑんを探り其害ある目的に中り得て忽ち之を正さは過失あること無し萬一無事の徒を縛し有罪之者を捕へ不得ば失態此上無る可し其上彼碌々たれとも一諸侯なり萬一過失ありては　朝廷之大裁たゝす故に不同心なりと云ふ土方同心す大村益次郎に書をやり其旨を申送る

○昨夜松月院に屯集の兵あり且市ヶ谷月桂寺に烏合せる兵あるを以て督府より令ありて薩州備前阿波本堂内藏助之兵隊進撃之處賊徒已に退散せりときく

○土方大一郎昌平橋神田邊町方屋敷向取締無之萬一賊徒衝き來らは何を以て防かん乞ふ警衛を置かん此邊堀多し舟を浮へて石垣を乗らは危きの至りなり余云尤然り乍去劔戟を建て幔幕を張り虚飾ありては眞之番兵にあらすして且彼より預しめ知らん關門之兵は威を張る可けれと巡邏見締之兵は竊にせすんは謀の拙きものと云ふ可し土方同心す大村益次郎に其趣にて尺素をやると云ふ

○薩藩府付願出候旗下の面々手を空してあり郭内明き屋しき番兵に備へ置る

九月朔日

○松月院に屯集せる兵は酒井閑亭鼓動せるよし且皆又還家東都にあるよしなりといふ

八月廿七日舊幕臣山岡鐵太郎德川氏徙封につき移轉の費途に究し恤救の典あらむことを情願す長岡護美亦同情して之を斡旋し翌日其許を得たり

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手張抄略）

同二十七日

○縣勇記云ふ山岡鐵太郎より演舌之趣に差寄り此般亀之助徒封に付家臣も引越可申處如何にも會計の目算無之付而者本所淺草にある所之藏米即今窮を救ふの爲に被下度又諸藩に金穀借用致し度此義御許容之上致し不申候而者御疑惑も可被爲在間前以て願上げ申候且清水料被下度との事なりと則勇記吾を一室に呼ひ猶盡力せぬやとすゝむ余云ふ雅より同心夫れ德川氏家名被立下候上者正敷一藩之諸侯なり屹度立行候樣御世話有てこそ　皇威も輝き可申徒封匆忙之際眞誠に可憐の情實なり則ち條公に上言す云々明日決す可き旨答らる阿州大久保も同意すと云ふ亦條公に上言す

○大久保を一室に呼て云ふ昨夜與勝談話如何大久保云ふ清水料十萬石は七十萬石の外なりさすれは猶條理により考定す可しと余亦考定すへきを以て答ふ

同二十八日五鼓初て起く空曇る冷氣甚く鳩聲頻なり

○德川亀之助へ淺草邊藏米被下に決するの事

○德川亀之助へ清水料十萬石御預け被仰付候事但し當分扶助行屆候樣

○諸藩へ借金被免候事

○同く伊豆の國下田を除く之外可被下歟之旨大久保上言之處阿州侯云彼地は江川太郎左衛門松下嘉兵衛等大義を辨し一國鎮定之盡力是務居候處此般亀之助へ下賜候ては無益に屬す可くと則ち評議やむ余思ふ如何んか

○田安家一橋家に千竈つゝ旗下召抱候樣御沙汰之事

八月廿七日長岡護美東京に天文臺を設置し天下へ頒曆を行はれたしとの旨を發議す

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手張抄略）

○東京府頒曆之義是迄天文方之令をうけて市中四五軒にて是を鬻き八州東國農業時を失せす而今市人等乞之余云差かゝりたる急務是をゆるす可し來年よりは天下一般之頒曆被行度天文臺之義は宇内之發明を集而大成し屹度御取起し無之

而者日新文明之域に至りかたし且御人選等追々御取調へ有之度旨付紙用ひをく

八月廿七日長岡護美先きに仙臺へ遣したる僧某等か目的とせし仙臺人志茂又左衛門が佐竹藩より斬梟せられしを聞き近侍堀田愼之允をして僧某を追躡し之を説かしめ且つ書を米田虎之助等に與へ仙臺藩に歸順を勸むるには形勢を熟察して事を愼重にすへしとの旨を諭す

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手張抄略）

同廿七日

○仙臺え行かんとする僧の目的にて兼而知る人之よしなる志茂又左衛門と云ふ人は先達而出羽の佐竹より斬梟せしよしさすれは仙臺に行くとて詮なかる可し且仙臺に而全く輪王寺宮を取建てたるは名義を失するに至れり此旨出先に報せすむは大ひなる過誤出來す可しと即刻近臣堀田愼之允を水戸街道に差立て追ひ付て事情を説かしむ于時第八字

同二十九日晴天芙蓉峰晴て見ゆ絶頂より九合目に至る雪如銀

○堀田愼之允歸報す土浦に而三使に追ひ付仙情を申し候處僧も力を落し候よし愈謹慎を加へ可申旨返答なり千住邊押入強盜多く昨夜も四五人白刃小銃を携へ或る家に入り金銀を掠せしと云

〔佐田家文書〕

至急ニ申入候堀田愼之允ニ託シ日誌一冊差出し申候右之趣ニ候得者僧之目的ニナル人者佐竹より梟首し且仙臺ニ而輪王寺宮取建ニ相成りたるよしに付得斗其許之集議ニかけられ且形勢等見すゑられ度右迄申入候不具

廿七日　左京亮

虎之助殿

金左衛門殿

外役々披見之事

八月廿七日征東軍患者療養に關し令達あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

已來諸藩平病人之内手重分ハ大病院に可屆出病院頭取見分之上重病之輩ハ入院保養被　仰付候段參謀衆被達候事

八月廿七日　御使番

微兵隊　筑後藩　大洲藩

肥後藩　館林藩　長官中

追而觸留より當局へ返却之事

八月廿七日薩藩伊地知正治會津攻撃の狀況を大久保一藏に報知す

〔一新錄探索報告、佐田家記錄〕

兼而者奥羽平定之上會津征伐ニ取付候方可然と存居候處諸方手合之人數遲滯相遶茂仕候哉追々時候茂押移居候得者ミすノ〳〵雪中彼ガ持久之奸計ニ陷候之案中之事故當月廿日二本松出立廿一日ハボナリ峠口より左右中三手ニ分れて會津口に攻掛候處其日中三ケ所之砲臺を破り會津領へ一里程進廿二日猪苗代攻取其夜四番隊其外ニ而戸ノ口十六橋と云要地に押渡り廿三日會津に攻入廿四日迄賊徒必死防戰候故城下不殘燒拂廿五日肥前尾紀州州之人數聖至堂口より會軍ニ取懸要地を見立城内を眼下ニ見下して書夜攻撃之次第故今分ニ而之上杉之加勢茂不相見四方之賊徒之不來何方に敵逃散候樣子乍併越後口今市口にえいまた官軍通路開不申付而者近日中吉左右可申上候得共先不取敢如斯御座候頓首敬白

八月廿七日　伊地知正知

大久保一藏樣　侍史

追而戰爭形勢之大意之後日委敷可申上候以上

八月廿八日毎年聖誕日を以て天長節と稱し衆庶と慶福を共にし給ふへき旨を布達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（八月廿八日忍藩佐藤江塲之介より我藩外六藩へ廻達）

九月二十二日ハ聖上御誕辰相當ニ付毎年此辰を以て群臣ニ酺宴。賜ひ天長節御執行相成天下之刑戮被差停候偏ニ衆庶と御慶福を共ニ被遊候思食ニ候間於庶民一同御嘉節を奉祝候樣被仰出候事

八月

八月廿八日車駕東行の期を布達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（八月廿八日千種少將渡忍藩佐藤江塲之介より廻達四通の内）

東京行幸九月中旬御出輦被　仰出候事

八月

〔一新錄皇令〕

東京　行幸供奉

廣幡内大臣
飛鳥井前大納言
三條西大納言
清閑寺中納言
堤右京大夫

行政官

交野左京大夫
堀川新三位
高野少將
高辻小納言
富小路前中務大輔
長谷美濃權介
石山右兵衛權佐
西洞院大夫
冷泉大夫
東園大夫
裏松中務權少輔
橋本大夫
三室戸大夫
戸田備後守
石野大夫

内侍所

白川三位
倉橋大藏卿

植松少將
藤波伊勢權守
中山儀同
宇和島宰相
木戸準一郎
大木民平
五辻彈正大弼
秋月右京亮
田中五位
戸田大和守
池邊五位

一ト通御用相濟次第歸京
御先御道見分
御先御道見分

八月某日輔弼正親町三條實愛德大寺實則車駕東行中諸政務を委任せらるる旨達せらる

〔一新錄皇令〕

今般　御東幸之節岩倉右兵衛督供奉被仰付候然ル處三條右大臣ニも未東京ニ在職相成候付　御留守中當官ニ而諸務御委任被　仰出候付而ハ輔相候處へ出仕可致旨被　仰付候事

但德大寺大納言にも同樣被　仰付候事

正親町三條前大納言
德大寺大納言

右同文

八月廿八日毛利敬親島津忠義に命し車駕東行中機務に參せしめらる

〔一新錄皇令〕

御東行御留守中機務商議之節時トシテ大政ニ參シ候樣被　仰出候事　長門宰相　薩摩少將

同文

〔防長回天史第六編中〕

（明治元年後半ノ毛利氏の内）

二十八日朝廷特ニ公（毛利敬親）ニ天皇東行中機務商議ノ節時トシテ大政ニ參スベキヲ命ス

八月廿八日山内容堂加藤泰秋池田慶德等に東京行幸の供奉を命せられ尋て薩長肥前の諸藩に京都警衛を命し筑前藩に大坂警衛を命せらる

〔一新錄皇令〕

東京　行幸供奉被　仰付御用筋有之候間海路先着候樣　土佐中納言（山内容堂）

御沙汰候事　土佐少將

東京　行幸前驅被　仰付候事

（本紙書）御東幸供奉先驅被　仰付候處所勞ニ付無餘儀次第被

聞食依而願之通同姓兵之助へ被　仰付候事　加藤遠江守

右同文　備前侍從

東京　行幸供奉被　仰付候事　池田丹波守

東京　行幸供奉被　仰付候間宗家兵隊引卒後驅可相勤

樣　御沙汰候事　因幡中將

東京　行幸後驅被　仰付候事　加藤出雲守

御東幸供奉輔相附被　仰付候事　平野內藏介

御東幸ニ付女房旅中取締被　仰付候事　薩摩少將

今般　御東幸被爲遊候ニ付京都御警衛被仰付候就而之御留守中諸取締向別而至重之事ニ付緩急之節ゑ不及申平常取締

方精々嚴重可取計旨被　仰出候事　長門宰相

右同文

但長門守儀先般歸國御暇願之通暫御許容候處不遠上京ニ付而ハ其方儀兼而所勞之趣も有之候事ニ付長門守京着之上

歸國可爲勝手候事

今般　御東幸被爲遊候ニ付而ハ御留守中京師諸取締向別而至重之事ニ付其方人數を以警衛被　仰付候條緩急之節ハ不

及申平常取締方精々嚴重可取計旨被　仰出候事　肥前少將

今般御東幸被遊候付大坂表警衛被　仰付候就而之海陸要衝之地　御留守中諸取締向別而至重之事ニ付緩急之節ゑ不及

申平常取締方精々嚴重可取計旨被　仰出候事　筑前宰相

但先般長州兵隊北越被差向候節其藩所持之軍艦至急ニ御用被　仰付候就而ゑ其方上京之儀暫御猶豫被　仰出候趣も

有之候得共此度早々上京候様　御沙汰候事

長門宰相

其藩兵一大隊　御東幸供奉被仰付候事

但二中隊　御泊所一驛前一中隊ハ一驛後麗下一中隊御備警衛被　仰付候事

〔防長回天史第六編中〕

明治元年後半ノ大勢（抄略）

二十八日（八月）島津忠義毛利敬親ニ主上東幸中京都ニ在リテ機務商議ノ節ハ時トシテ大政ニ參與スヘキヲ命シ又山内豐景ニ東幸供奉ヲ命シ海路先發セシム（豐景病アルヲ以テ九月二日山内豐積ヲシテ代ラシム）明日東幸ヲ九月中旬ト布告シ木戸準一郎加藤泰秋（遠江守）池田慶徳池田茂政及ヒ長藩兵一大隊（内一中隊ハ特ニ餌宿所ノ警衛ヲ命セラル）ニ供奉ヲ命シ二十九日薩長肥前彦根ノ四藩ニ京都警衛ヲ命シ福岡藩黑田齊溥ニ大坂警衛ヲ命ス

八月廿八日本藩京都留守役居は元海軍御用掛森尾龍彦の後任として大田黑亥和太を推薦す

〔慶應四年王政日新録〕

森尾龍彦儀海軍御用掛被仰付候處當人宿痾且老母病氣難見放容體に付右御用掛被　免被下候様尤折角被　仰付候儀ニ付龍彦同様之者選擧仕差出可申旨當六月奉願候處願之趣無餘儀筋ニ付龍彦儀右御用懸被免候段御達有之候依之跡人躰之儀大田黑亥和太と申者未熟ニ之候得共此節相撰國許差立昨廿七日着京仕候右者御差圖次第差出候様可仕候此段不取敢御屆申上候以上

八月廿八日

細川越中守内
山又助

辨事
御役所

八月廿八日本藩京都留守居役は奥州原竈に於ける我藩兵戰闘の概況を軍務官に申告す

〔慶應四年王政日新録〕

東京表に出張仕候兵隊之内奥州表に出張被　仰付候付總帥米田虎之助初進軍仕候段ハ最前御屆仕候通御座候然處本月十一日於奥州相馬餌海手原竈因州兵隊一同相進ミ仙臺勢と砲戰之處當手兵隊死傷茂不少委細之儀は取調候上追而可申遣段出先之者より申越候此段不取敢御屆申上候尤於東京御總督府ニ茂右之趣御屆仕候由御座候以上

八月廿八日

軍務官
御役所

細川越中守内
山又助

八月廿八日仙臺藩老臣氏家兵庫側目付堀省治今泉の我藩本陣に來たり重ねて降伏を乞ふ津田山三郎等之に應接し條理を以て之を論し返りて降伏の實効を立てしむ

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

（仙臺謝罪降伏之略抄出、八月廿三日の條の續き）

同廿八日若年寄氏家兵庫側目付堀省治兩人つるし濱まて參り氏家道以を以申入候には陣所に參り候儀未内輪居り合兼候情實も有之自由ゟ間敷事なから大巡邏之處を以御惣帥始今少々踏出被下候へは其途中に而御行逢申處にいたし度との儀に付津田云成程無據情實も可有之候へ共此節　天朝より出兵之御沙汰を蒙り出張向に而私之御面談渉り候而は

天朝に奉對恐入候譯も有之何分此方より罷出候筋合に無之御頼ミによつて御取次申而已に候へは此儀乍心外及御斷申候何卒當所迄御出張被下度段申達候處同人も其理に服し御尤千萬也ト申頓而兩人を連來り此方よりは諸役相揃中村藩同席にて今泉陣所におゐて談判有之候處矢張り大同小異に而謝罪歎願の外他事無之候且先方より如何之事を致候はゝ謝罪之譯に相成可申哉萬端御教諭可被下御差圖に隨ひ可申ト申出候間罪を謝するにもヶ條巨多可有之候へ共即今之急務は先封境守禦之兵を解次而會討之命を被奉なから却而會を助け奥羽各藩會盟せられし事に初發より關係仕候者兩三輩之首を斬以而舊幕府脱兵は元來上天威を犯シ奉り下主人慶喜恭順之意に戻り主家を脱走せし暴逆無道之兵なれは盡放逐有之先ッ此三ヶ條實効相立申度段申向候へは御尤之御儀早速其通施行仕度候得共奸黨勢ヒ猶盛に而正黨誠微々たれは急には中々難出來暫時休兵被下候はゝ其際には如何樣共内輪手を付ケ可申と云津田答實効事實相立不申迄之處休兵と申儀は何分難取扱其子細は各藩之兵隊眼前に賊と對陣日々戰を挑候央内輪瓦藩迄貴藩の情實承知いたし候迄に而休兵之取扱は如何にも六ヶ敷當所之戰爭は戰爭にして一刻も實効之筋に御盡力有之度先一藩丈ケ之聞取にいたし置實効さへ相立におゐては屹度御取次可申段吳々申含寸刻も右之條々御施行有之度其上は如何樣共御周旋可申上ト申候へは皆々大に同意に而尚此上は一門並家老をも可差出と申殘し罷歸候猶近日模樣有之筈に候事

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

八月廿八日

仙臺ノ醫師氏家今泉ニ來リ云宇津井兵庫（氏家イ）大臣ニテ知行八千石ト云ト申者釣師村迄來リ居テ御奉行役津田山三郎ニ面談ヲ乞ノトサレトモ今日差支アリ仍テ明日今泉ニテ出會スヘシト約束ヲ成シタリトナリ（以下略）

八月廿九日

夕刻原釜ヨリ今泉ニ御出張氏家同意約ノ如ク宇津井兵庫（氏家イ）ヲ伴ヒ來ル仍テ是保君（米田虎之助）津田山三郎御目附大島五郎八斥候馬淵次郎八馬淵恒助相馬藩隊長一名列席ニテ三ヶ條談判アリ

八月廿八日本藩尾藤金左衛門奥村軍記淺井新九郎等中村の我藩出張本營に至り長岡護美の使命を傳ふ

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月廿八日

一尾藤金左衛門御用有之早打ニ而今日爰許奥州中村着いたし候事（長岡護美より米田虎之助へ與ふる八月廿日付の書は本日記中今日達したるものと思はる）（のところに全文を記載しあるを見れは蓋し今日尾藤より米田に傳

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

八月廿九日

夕方尾藤金左衛門殿奥村軍記淺井新九郎中山左次右衛門牧平左衛門志方司馬助早川助作早駕ニテ江戸ヨリ來着御面會アリテ議論激烈ナリシト云奥村ハ御組御番頭ニシテ組ハ江戸ニ殘リ其身一人來ルナリ

〔淺井鼎泉記錄〕

（八月廿三日の條のつゞき）

然處鼎泉は果して水戸城下にて一同に追付き申候得とも二十餘挺の駕籠を連らねて參り候時ハ此處より相馬までに數日も懸り申候ニ付他の御使者四人（尾藤、中山、志方、奥村）と鼎泉ハ一同より先に進發し殘り十數名は後より駕籠人夫の用意出來次第發程の事に協議一決し鼎泉等五人は此處より一同に先つて發程致し候事と相成候奥州南街道ハ諸藩の往來頻繁にて人夫時に不足なりし故なり鼎泉等か相馬近く參りし時會津落城の由聞ゆ斯くて鼎泉等ハ相馬に着するや否や直に米田方の營所に至り御國許より御慰勞の旨及諸隊へ御藥等賜ハり候旨等儀式上の御使者の口上ハ夫々相濟候得とも御國議の趣に至りては一人として申出もの無之遂に誰よりか概略陳述はしたものゝ其詞甚明瞭ならさりしに付米田方憤然

として此許御先手原當戰爭の實況より死傷者の實數等に至るまて委しく申述へられ而して後仙臺藩よりは既に達藤某外一人を使として降伏の儀を當御先手に申込ミありたれは當時ハ四條卿總督府にて親しく裁斷中なり不遠何とか御處置可有之然るゟ貴下等は今更何を云々するやと申され候に付一同呆然として云ふ所を知らす只々互に面を見合はするのミにて有之候此席は此迄にて相濟一同は其後一兩日滯在の處諸隊長等茂追々到着致候得とも別に御用もなけれハとて追々と江戸に向て罷歸り申候さて鼎泉のみ折角の事に戰爭の實況を見て罷歸り度存し後に居殘り居候中に仙臺の御處置も附き官軍の諸隊追々仙臺に乘り込まんとする用意最中即ち九月九日を以て相馬を辭し江戸表に向ひ歸途に就き申候

八月廿九日先帝の崩御日を正當の忌日に改定せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（八月廿九日忍藩靈谷平内より我藩外六藩公用人へ廻達）

先帝御忌日是迄御發喪日を以て十二月廿九日と被爲定置候處今般御制度復古之折柄第一御追孝之思召ニ而古禮ニ被爲基以來　崩御　御正忌之通り十二月廿五日ニ被爲定候旨　被仰出候事

但正當御忌日及毎月御忌ニ御精進等之末弊ハ被廢候事

行政官

八月

八月廿九日我藩及ひ人吉柳河佐伯諸藩の所管せし兩豐日向三國の内數郡の地を日田縣に合併せらるしめ且つ日向國富高縣を廢して日田縣に合併せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

御用之儀候間唯今早々非藏人口へ出張可有之候也

八月廿九日

細川越中守殿

公用人中

辨事役所

一右ニ付鵜殿罷出候處山本少將樣より左之御書御渡ニ相成候事

別紙豐後國四郡之中六十九ヶ村高貳萬貳千三百七拾八石餘昨卯年其藩へ御預被　仰付置候處今度日田縣ニ支配被仰付候間早々右縣ニ可引渡旨　御沙汰候事

八月

細川越中守

（別紙）

豐後國直入郡拾二ヶ村　高二千九百八十九石餘

同國國東郡十ヶ村並新田三ヶ處　高四千八百五石餘

同國大分郡十一ヶ村　高三千二百四十石餘

同國速水郡三十六ヶ村　高壹萬千三百四十四石餘

右之通り

行政官

〔一新錄皇令〕

毛利伊勢守黃來御預之御領所豐後國海部郡拾ヶ村高貳千百四拾三石右藩ニ追而何分之御沙汰被　仰出候迄其縣ニ而租稅等可請取旨被　仰出候事

八月

日田縣

行政官

明治元年

相良遠江守舊來之御預御領所日向國臼杵郡八拾四ヶ村高五百九拾石餘右藩に追而何分之御沙汰被　仰出候迄租税等可請取旨　御沙汰候事　　日田縣

八月　　行政官

別紙豐後國四郡之中六拾九ヶ村高貳萬貳千三百七拾八石餘昨卯年細川越中守に御預被　仰付置候處今度其縣に支配被　仰付候間又々可請取旨　御沙汰候事　　日田縣

八月　　行政官

（別紙は我藩への令達に添附せられしものと同しきを以之を略す）

今般日向國富高縣其縣へ合并可致支配旨　被仰付候事　　日田縣

八月　　行政官

豐前國宇佐郡五拾九ヶ村高貳萬貳千百九石餘昨卯年有馬中務大輔に御預被　仰付置候處今般其縣に支配被　仰付候間早々可請取旨　御沙汰候事　　日田縣

八月　　行政官

八月廿九日上總大多喜藩主大河内正質謹慎を免せられたる旨を達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（八月廿九日山本千種兩少將渡忍藩濃谷平内より廻達書三通の内）

於大總督府謹慎被申付候處今度被免候事　　大河内豐前（元松平氏）

八月　　行政官

八月廿九日五辻安仲等東京行幸の宿賦として京都を發す

〔京都并江戸返達御用狀抄〕

右者今度東京　御出輦ニ付御宿賦として先月廿九日京都發足（以下略）　　五辻彈正大弼様　戸田大和守様　驛遞司御役所　内山又助

九月二日

八月廿九日官軍若松城を攻む城兵決死能く防戰し官軍頗る難める色あり

〔一新錄探索報告〕

九月三日之夜於二本松岩男助之承に陸軍參謀渡邊清左衛門ゟ談話之次第同七日於平驛民政局助之承ゟ承申候趣越後口官軍都合三十何藩合兵押詰居申候處會勢防禦嚴重關門未破候三春二本松口之方茂道途大木を倒懸有之或ハ大石を運ひ出し通行茂拒絶防禦手堅有之候得共會人此方ハ天險を恃防禦行屆兼候ヶ所有之人數茂幾廿人計出張居候間薩長人數之内ゟ不圖一ッ之間路を探出し最苦辛八月十七八日各藩兵隊共無難會地に繰込申候との趣ニ御座候地名ゑボナル峠と申候由各藩ハ薩州長州土州因州備前大垣柳川等ニ御座候肥前黑羽根等ゑ勢至堂まて押詰此口茂未破申候事ニ御座

同月廿日ゟ五ニ攻撃相始り廿二三日枝城猪鼻足代を抜取申候此砌官軍大ニ飢渇馬肉を喰餓を凌申候夫ゟ若松に進軍仕候處街道筋村落寺院城下迄之處自燒有之官兵莫を求る手段も無之是等之事茂困申候由ニ御座候枝城ゟ若松迄之里程六七里ゟ申候事ニ御座候若松城を一里計離ゟ官軍滞陣仕二十日後ハ晝夜戰爭無間斷是ゟ進候得之渠ゟ迎撃仕退候得ハ追撃仕就中廿九日決戰ニ相成其日一日官軍之死傷薩七八十人各藩ニ而之三百人茂御座候會人五六十人死傷御座候渠之死者懐中ニ貯居候物ハ一紙迄ニ而年號月日戰死會藩何某齢何十何歳法名何々院何々居士ゟ記し居死者之内ニ之婦人茂數輩相加居申候薩長人茂感申候との趣白川ニ而茂會之婦人戰死仕候由渠ゟハ夜討朝駈ケ等茂仕官兵之隊長等ニ而已目を注キ炮發仕候官軍毎度戰不利一二倍茂死傷御座候との趣惣躰若松之平城ニ而攻撃之手段六ケ敷候上却下一圓自燒仕居是より火攻策茂無之屏裏手ハ土俵を積立有之彈丸ニ而中々摧キ申候儀難出來今暫く居城之期相見不申官兵必多物尸を積候迄ニ候間相馬口之兵隊を分チ應援仕候樣ニ取計度由清左衛門ゟ助之丞に噂仕候趣ニ御座候　（中略）

右會津之時情渡邊手元に之朔日二日迄之報告之由同人儀四日ゟ之彼地に趣候由ニ御座候

（外向御用懸）　鎌田貞之丈

九月

八月晦日我藩東京三番町歩兵保官の任を罷免せらる

〔一新錄皇令〕

八月晦日鎮將府より御呼出ニ而御渡之御書付

三番町歩兵被預置候處被免候事

但淺田舍人守永吉十郎に可引渡候事

八月

八月晦日本藩大田黒亥和太に徴士軍務官判事試補攝泉防禦參謀を命せらる

肥後藩

一

〔慶應四年王政日新錄〕

（八月晦日歸事役所より召喚につき公用人同道出頭の處勘解由小路右中辯より達せらる）

太田黒亥和太

徴士軍務官判事試補被　仰付候事

八月

右壹通

太田黒亥和太

當官を以攝泉防禦參謀被　仰付候事

八月

八月某日本藩世子附役小橋恒藏老臣溝口藏人の書を携へて京都より歸態す仍て老臣等凝議し一門長岡休焉先つ上京し藩主詔邦亦上京して我藩朝旨遵奉の誠意を貫徹せしむへしと決す

〔一新錄自筆狀〕

慶應四年八月十六日發京之小橋恒藏同廿三日之夜着ニ付佐貳役執筆之心覺書左之通

但御上京御評決之趣也

小橋恒藏京地ゟ歸着ゝたし前月十四日藏人殿御同伴岩倉卿に參殿若殿樣御登京御猶豫之儀御申達候處御病氣ならハ不及是非御猶豫之儀者同卿ゟ御申立可被成候間別段御手數ニ不及尤御病氣之御容體之折々御使ヲ以被仰遣候樣との趣ニ而相濟申候然ニ如斯輙く御聞通ニ付而ハ此末如何成かへそ茂出來候半との懸念ニ候由

一東北國御所置之事京地之形勢ニ而者中々突然と建白可相成見込ニ無之猶豫ゝたし被居候由最前中山源次右衛門被差越世子公御登御猶豫之御唱者人氣沸騰此節者御病氣又下津方之申立之御船差支候抔前後齟齬ゝたし都合惡敷就而者御國

議之御誠意貫通不致候而者往々御國家之御運甚以懸念之勢ニ相見候間休焉殿御驅登其筋之御都合御盡力可有之然ニ變動以來太守様ニゑ未御一度茂御登京不被爲在殊ニ先月御即位茂被仰出候處ニ而ゑ御拜賀被是此節ゑ是非御出京不被爲在候而ゑ何分御誠意之御實跡難相立候ニ付無御延寛御登京被爲在休焉殿御輔翼を以御國情之實直貫徹いたし候ハ、朝廷世上之疑惑も可致氷解其大旨ニ而候事

八月某日在京都本藩吏員佐藤平之助西田八左衛門等金札發行の趣旨及ひ商法會所開設のことを報告す

〔慶應三年探索書扣〕

今般金札御造立ハ天下公行產物大ニ融通之御旨趣ニ而元ゟ　朝廷之爲ニ設ニあらゑ當時皇國疲弊を極メ且外國交易彼我貧富を異ニシ其勢自ラ彼ニ致サレ益困弊を重疊當春已來會計凡百餘萬金市井よゞ調達ゝたし下方實以不融通ニ立到既ニ今日を凌兼候勢ニ相運居天下之融通一日も相駐りテハ萬民不可立之苦ヲ請候故一株之楮幣ヲ施行シ京師浪華並兵庫大津商法等御手附し所迄商法會所此則先ッ歩入所之類ニ而已後益手廣會計之土臺ニ相成候よし委細ハ筆頭ニ難盡ヲ建今日之融通ヲ扶ク融通漸ク盛ふる時ハ各國閉塞之患ナク諸產物も繁植盛生ニ至るべし故ニ仮ニ金札ヲ製シ十三年ヲ限トシ下ノ產物ヲ動カスハ渾テ天下ノ諸品益繁生融通倍盛ニナリテ必ス金銀モ多ナル道理ナリ因而今三千萬兩之金札ヲ造立年々一割宛會計官ニテ燒捨ル時ハ十三ケ年ニシテ全消滅シ自正金ノ融通トナルナリ

一金札御造立一條付而者初發於太政官物議頻ニ差起其末衆議ヲ盡し被決候付太政官ノ私ニ出ルコトニ無之會計官中出納用度譯遞營繕租稅貨幣商法之七局を設ケ以テ大ニ天下ヲ會計スルナリ凡天下ノ物一物として天子ニ私スル能ハス下民私スルヿ能ハス故ニ天子ト雖自ラ財用ヲ專ニスルヿヲ得ス天子ノ府庫別ニ金銀ノ貯有ニ非ス依而今般製造之金札ハ一枚モ官庫ニ蓄積無之悉ク御掛屋御藏元ト云類ナリ京ニテハ三家ト唱候三井三郎助鳥田八郎左衛門小野善助ニ御引渡ニ相成亦年々會計官ニ相納金銀ハ此亦悉御懸屋ニ御引渡ニ相成ヨシ會計官ハ天子ノ爲ニ出納アルモ萬民ノ爲ニ出入スルモ同樣之仕形也亦御買上之品モ此品ハ何方ヨリ彼品ハ某商と究アル譯も無之諸品皆價ニヨリテ御買上ニ相成リ年來之用達皆廢セラル如此御仕置ニ相成候故局々集錢等之煩も自無之事ニナレリ當今大政御入用並月給等ハ總テ御掛屋ヨリ一割ノ利付ニメ御借受ニ相成追而其分ハ關東滅知ノ內ヲ以償立用ニナル尤年々返札ノ法ハ外ニ出ル金札ト同樣之事ナリ

一今般京師ヲ初兵庫伊丹堺等調達金被仰付向々ハ年々一割之利金給ル亦調達金差出候者夫丈金札拜借願出候得ハ六朱之利付ニテ御貸渡ニナル依而右調達之面々ハ出入ノ金利四朱ノ違目年々取込候故則西洋各國ノ國債ト唱ヲ變ル迄ニテ聊其旨趣異ルヿナシ

一諸侯拜借之金札ハ諸產物等取起シ之ヲ用テ國ヲ富スノ基礎ヲ建ルヲ要トス政府臨時之入費ニ用ヘカラス誤テ臨時ノ費用ニ用ル時ハ富國ノ基本立サル而已ナラス却テ一割宛ノ返金產出ス處ナクシテ其害救ヘカラサルニ到ルヘシ因テ會計官ノ主意諸侯ノ拜借ヲ强ルニアラス金札融通ノ仕法立テ國產ノ扱口屹ト見込相立候上ナラテハ御貸下ケ無之此會計官ニ於テ大ニ注意ノ處ナリ

一御國ハ官札融通是迄十分被行來土地抔ニ付此節金札御拜借無之而宜敷亦御借用ニ相成候而も迚も年限中利金ヲ產出スルヿ六ケ敷サレハ其分ハ御國之衰微ニ付萬々拜借ハ無之方可然其上京攝之間漸々折合ニ至一統手廣金札融通ゝたし候節ハ大坂御拂米を初諸產物代も金札ニ而入込候者自然之勢ニ付追而御國許自他之出入ハ其分ニ而事濟候間返々も御拜借ハ不被爲在方と横井小楠唱有之候

一商法會所掟左之通

一今度商法會所御取建相成候付而ハ諸問屋之向ハ勿論總而商買手廣ニさせらゑ度候條心得違有之間敷事

一實値段取極仲ケ間定法を唱候類御取調之上御聞屆可被成候得共盡力を以定法ゟ下値ニ賣買ゝたし候儀ハ不苦候事

一諸商賣ニ付其品爲引替元手金拜借被仰付候尤限月利足相定候事

但商業勵方之外雜費之拜借ハ被禁其役々ゟ急度可取調候事

一諸仲間内ゟ貳人宛人撰いたし肝煎ゝ唱名前差出可申候尤御模様ニより上よゝ被仰付候者も有之候事

一諸株仲々間取調之上人數増減勝手たるへき事

一是迄仕來り冥加金上納等之儀ハ御廢止被成御取調之上税法御定可被仰付候事

辰五月　　商法會所

右之通御座候事

右者會計官之様子三岡四位横井小楠並山田五次郎ゟ聞取候大意ニ而御座候尤枝葉之儀者筆頭ニも難盡候間追々言上可仕ゝ奉存候以上

辰八月　　佐藤平之助　西田八左衛門　矢澤敬之助　野田大藏

八月某日輪王寺宮白石を去りて仙臺なる仙岳院に入らせらる

〔一新錄探索報告〕

（九月赤尾九八郎中山閏五郎聞取書の一節）

一輪王寺宮様從白石城仙臺城下仙岳院ニ御移ニ相成居候事

（赤尾九八郎後の内務儀十郎　中山閏五郎後名政說は八月十九日東京にて探索の爲め奥州表へ出張を命せられたるものなり）

〔井上馨信編彰義隊附輪王寺宮殿下〕

（六月七日の續き）

夫れ（會津）より宮には米澤、白石を經て、仙臺に至り、東叡山末寺仙岳院へ成らせられ、數十日御滯留の後、再び白、に移らる、然るに奥羽の幕軍は、官兵の爲に打ち破られ、各地よりの敗報引きも切らざる有様にて、勢ひ日に蹙る爰に四條總督には駒ヶ峰を本陣とし、岩沼驛に於て、仙臺、白石の連絡を絶たん軍略なりと風說ありければ、八月下旬、早々に白石を出立して、復た仙臺、仙岳院へ歸らる、此の時には兩執當、自證院等を始め、僧侶十餘名、御家來鈴木安藝、廉生將監等を首とし、佐兵衛に至る迄是亦十餘名御附添ひ申したるを以て、別段不自由もなかりし、爾來只管、天下靜謐の御祈願をのみ遊されたるは、恐れ多きことなりき（以下十月某日に續く）

八月某日長崎に於て始めて新聞崎陽雜報を發行するものあり

〔明治三年ヨリ探索書控〕

（辰九月廿日附長崎留守居嘉悦市之進より在藩奉行衆中宛書面の追啓）

追啓格別之事件ハ無御座候得共當港日誌壹冊差出申候以上

（表紙）

（朱印）長崎府印

崎陽雜報　第一號

致遠閣發兌

日本紙製小冊子
縦七寸四歩
横五寸
紙數表紙共九葉
活字ニテ字ノ大サ今ノ二號ト三號トノ中間位
横十行縦二十一字詰

崎陽雜報題言

夫レ新聞紙ノ起原タルヤ法蘭西國ニテハ彼ノ紀元千七百年間卽チ我　朝寛永ノ頃レノウ、ナル者新報雜話ヲ集メテ「ガセツト、ド、フランス」ヲ著ワシ英國ニテハ寛文三年ノ頃ロセルレストランジ氏ノ著ワシタル「ゼネラール、インフホルメーシュン」ヲ濫觴トセリ夫ヨリ文明ノ敎化行ワル、ニ從ガヒ日ニ行ワレ月ニ盛ンニ此節英國ロンドン府ニアル所ノ新聞局百六十所國中其餘ノ諸府二百三十二所アイルランド百十七所スコツトランド九十四所是等ノ新聞局一度ニ七千萬枚ヲ印出スト云フ是ミナ諸州ノ事情ヲ知テ其見識ヲヒロメ新出ノ發明ヲ採テ其裨益ヲ多クス時トシテハ新聞局ノ一根筆一張紙ハルカニ千萬ノ兵力ニ勝リ又時トシテハ遠人ノ安否ヲ知リ近事ノ播傳ヲ廣メ事蹟ノ實否ヲ辨明シテ覽者ノ疑團ヲ氷解セシムル「アルガタメナリ我國ニ於テハ御開港後文久二年來舶ノ外國人「ヂヤツパン、タイムス」ト名ヅケハジメテ長崎ニ於テ刊行シ續テ横濱ニ移リ爾後文敎次第ニ章明ナルニ從ガヒ日ニ盛ンニ行ワレ今年ニ至テ御國人ノ著ワセル新聞紙其數十七局ニ及ベリ然ルニ其中公ヤケノ許シヲ得ズシテミダリニ印行セシ分ハ停止セラレシト云フ我局此節當　府君ノ鉤旨ニ依リ新聞ヲ得ル毎ニツトメテ事蹟ノ確實ヲ撰ビ舊ヲ去リ新ヲキソヒ其載スル所ハ或ハ西洋ノ新聞紙ヨリ譯述シ或ハ新版有益ノ洋藉ニ採リ我國内ノ新聞ノ如キハ曹ク四方ノ確報ニ據リ諸所往來ノ文書ヲ集ム看官庶ワクバ一覽シテ其裨益ヲ知リタマヘ

八月　　新聞局主敬白

九月朔日品海脫出の舊幕船艦攝海へ廻航すとの風聞あり徵兵二大隊を大坂に派遣せらる

〔一新錄自筆狀〕

（九月二日附在京都溝口藏人より藩政府宛書面の追書）

猶々德川家船艦之内品。沖脫航攝海に乘廻候由相聞昨日岸和田方無驗之火船二艘見來注進有之たる風便も有之徵兵之内二大隊昨日繰出し有之下坂ゝたし軍務官繁雜之樣子も承り申候（以下略）

九月朔日勝安房長岡護美の德川氏扶助として清水領下賜願に斡旋せしことを謝す

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手帳抄略）

九月朔日ドンタクなり快晴

○增田貞右衛門に面話す云ふ勝安房より報し來る昨日西城より清水領被下旨則德川氏へ預け置候樣と之御申渡し而小生盡力之末誠に大慶なりと云ひ贈れりと余亦欣然たり貞右衛門も追々中に立周旋之末喜悅なりと云ふ

○且云ふ舊幕脫走之軍艦内實は阿蘭陀米利堅拂郎西よりも勸たるよしにて餘程暴行すへく且能働き奥羽之勢燄を增し官軍之氣燄を鈍し可申と

航海者長する人多く兵隊三千人計りのよし尤上陸せば官軍勝ち多からむ船軍さならは官船皆粉の如くならむ

○皇政之御仁恤は此般清水料くらひ仁而宜敷多くしても惡しく少くしても惡しゝと如何んとなれは清水料たけあれは卽今飢渴に苦しむ之徒無く府下之人心先つ鎭定せむ乍然眞に德川氏之爲を思ひ奥羽邊にて事を起せしもの等は從來の奮激決而減し申さす能戰ふへく軍艦又奮勇成功をなさむ德川氏に於て是迄の耻辱を雪き皇國之形勢亦變あらむ德川氏の臣安房守の論には確論なりと云ふ可きか

九月二日國忌日に關し重ねて布告せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣、慶應四年王政日新錄〕

（九月二日辯事より内山又助へ渡されたる書付）

先帝御忌日是迄御發喪日を以て十二月廿九日迄被爲定置候處今般御制度復古之折柄第一　御追孝之　思食ニて古禮ニ被爲基以來　崩御御正忌之通り十二月廿五日ニ被爲定一段恭敬至重ニ　御祭典可被爲遊旨被　仰出候事

但過日被　仰出候分ハ御取消之事

九月

行政官

九月二日金銀貨贋造取締に關し嚴達せらる

〔京都幷江戸返達御用狀扣、慶應四年王政日新錄〕

（九月二日樺事役所より渡されたる書付二通の一）

近年於萬幕府屢金銀吹替融通致し候以來實金銀間々有之實ニ萬民之迷或不一形候當今太政第一新政體一途ニ基キ候折柄右樣之所業有之候而者不謂事ニ付於府縣夫嚴重吟味被仰付候條各藩之儀者其主人より取糺可致候自然手掛り者有之節ハ速ニ刑法官ニ可申出萬一其領内不取締有之他ゟ洩聞候節者其主人之落度たるべく候此段屹度可相心得旨相達候事

九月　　行政官

九月二日宇都宮藩縣勇記東京府中商稅過重にして下民怨言甚しく舊幕の弊政にも增して人心を失ふへしとの意を三條實美に切言す

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手帳抄略）

九月二日快晴美蓉近山一點の雲なし

○出席先つ三條公へ出つ于時縣勇記御談話中なり勇記に大伴の事を云ひ侍坐す縣勇記三條公に上言す近來會計官より取調府中金運上莫大爲之金高にてたとへは幕政之時一萬兩出すほどの家に五萬兩申付られ候樣にて下民の怨言甚しく三條公の事をも誹謗いたし候事にて御一新の初尤不可然事と奉存候畢竟人心を得ると得さるとに天下の興廢は有之候得者何とそ速に御取止め有之度其上臣等在職罷在候得者人々來而云ふにたゑす且東國生れの私ゆゑ私には各所より來りて怨言を申し候間　天朝之爲甚奉懸念候其上金運上に付ては下民窮迫の餘官吏に賄賂を贈り官吏不廉之徒忽ち時を得たりと山の如く貪り以之外之事に成行幕の弊害よりも猶更草創之初甚敷事に立至り可申歟と奉存候乍去内外御入費且御軍務筋　御親臨等にて御入費は極差迫り候に付市中用心の圍ひ米にても五十萬兩がた御借り被爲在來年にても御返濟被爲在候はゝ宜敷と奉存候此般金差出し候族等に者追而御扶持候はゝ永世不朽之上より見候得者誠に無益に歸し可申第一人心を失ひ候事に付御考へ被爲在度旨金言なりけれは三條公も御當惑乍去窮迫之事に付猶考ふ可しと御返答なり

九月二日長岡護美奥羽諸藩の臣民に對し寛廣仁恕の處置あらむことを献言す

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手帳抄略）

同二日

○春來霖雨打續き水害苗蟄干戈無止時付而者民者王之赤子と云ふ御仁意を以て奥羽之諸藩不可赦之罪をも御赦し被爲在外夷朶顏之患ひを被救度と申上献白書を條公に差出す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記、一新錄自筆狀〕

春來霖雨打續諸州洪水之災ニ罹り民屋蕩流田業荒廢いたし秋ニ入愈多雨氣候茂不順卽今天下疲弊を極候上飢饉之患眼前ニ差迫此末如何樣之變事出來仕候茂難測實ニ擧朝憂勤之御時節と奉存候然ルに東征之大兵奥羽迄御押詰ニ相成候儀畢竟彼等王命を抗し候處より不得止御討伐之儀ニ者候得共專ラ生民之塗炭を被爲救候御主意を奉體認篤と勘考仕候得

者數月之戰爭東西諸藩之臣民死傷若干ニ及財用内ニ竭キ民力外ニ勞レ候上偏北之地既ニ霜雪之候ニ差臨兵士之艱苦不一方尚此上死傷相增候樣ニも有之候而者乍恐御仁慈之御趣意ニ於而如何可有御座哉殊更比來外夷朶頤之折柄藩屏之諸侯益疲弊ニ苦ミ材勇之將士膏血地ニ塗しゑ候ハヽ皇國之元氣を損し終ニ黠虜之術中ニ墮候半と實以痛哭之至御座候就而者奥羽諸藩之臣民も矢張邦内之赤子ニ御座候得者廣大之　聖恩を以不可赦之罪を茂被遊御宥候樣御座候ハヽ如何ニ狂妄之者と雖感化來格可仕者當然之儀と奉存候仰願クハ御一新之砌一刻も御仁恤之御趣意相貫四海萬民王化ニ服し候樣有御座度切迫之時髀越中守懸念之餘態と急使を以申付越候趣茂御座候間不顧憚奉言上候以上

九月　　長岡左京亮

〔一新錄自筆狀〕

（九月五日付田中八郎兵衛江戸發自筆狀の内抄略）

御建白之儀者去ル二日御持參藩將府ニ御差上ニ相成候處大ニ御受も宜爲有之由云々

九月二日舊幕士川村惠十郎長岡護美に面晤し薩藩窃に横濱の地を典物として外國より五十萬金を借用せし旨を云ふ護美俱に之を探索せむことを約す

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手帳抄略）

同二日

○川村惠十郎來り面會す

○川村云慶喜駿州へ立越し候後愈以壯健なりと

○川村話昔時落涙數行

○川村云今日に至り德川氏之事は臣下の私なと愁ふる事に候得共藩屏之御任尤可恐は横濱を質地に薩州より置きたるなり如何むとなれは今日之事ならは是を朝に歸して如何んとか償はむ萬一不成ときは薩に入り英とむすはゝ天下の兵は進擊することもなるましよこはまは外國の手にあるなり且つ國體を失して人心又瓦崩せむと甚しき隱謀なりと云ふ余云ふ余か輩本より恐る急に探索せん子も亦探索せよ川村許諾す秘事なり且云奥羽即今干戈打續き八州饑饉等にて外國の交易利なし彼等云ふ今日のまゝにしては交易利あらす我等是を分ち取らむと左すれは政府を立て人民の職業を全ふせしめむと云ふよし

○全體八州よりも產物奥羽より多く出て來るよしなり

○抑本與英此談判ありて金五十萬ドルの代りよこはまを質にをかむと英領諸し而各國に謀る各國不同意なり遂に各國に而分け持ちにして各國より五十萬ドルを出すに決せしよしなれといかゝやしる可らさるなり

○川村は兎角我に依賴すと云ふ

同三日晴れ雲むら〳〵芙蓉朝不見

○堀田古庄廣岡をよこはまにやると達す

○古庄養拙に逢ふ云ふ横濱之事件小しく聞及びし筋も有之可成丈吟味し試み可申茂幕より横須賀を質に置くことありしよし今薩尊又よこはまを質にをくこと固よりある可し石敬塘の如き種類なり且開陽丸にも拂郎察より乘りくみ居候よし

九月二日清岡岱作當時の政務に統一なく命令區々に出て諸事混淆し百弊隨て生せんことを憂ひ之を長岡護美に訴へて辭職の意を漏す護美亦之に同し規律の一定なきに怏々たる旨を答ふ

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫薄美手帳抄略）

同二日

○清岡岱作云ふ今日鎮將府は勿論、東京府、外國官、會計局等各令を出し各指揮を恣し敢て事の一すちに運ふ事なし一事を舉而いへは舊幕其他歸順之兵隊なと各府より番衛等を申付け或は兵隊に召加へ總督府の令あるに又鎮將府之命あり如何にして方向を定めん歟長防二國の中より長藩の兵を募るすら猶兵隊に弊ありときく舊幕の權を恣にせんとせし頃歩兵を猥りに募りて京攝に上せし皆弊あり是を以て見るに一箇の主宰たる所なくして莫大之弊あらは何を以て除かんや又一事を云へは諸侯の事を上に達し上より承る或は督府へ出て或は鎮將府へ出て如何にも一定せす今日の儘に押移りなは百事紛紜諸事混淆不可救賞罰を明にせむとする刑法官の是を監察するなし大體規律の嚴なるなし我只碌々在職不本意なれは我か任しある當坐の事を仕舞ひ辭職せむと云ふ余本同論常に憂ふ官吏皆各自の功のみを貪り規律の之を一定するなし我亦快々たりと云我亦猶勘考す可しと云

九月二日蜂須賀茂韶大久保一藏江藤新平は阿州の旅邸に勝安芳大久保一翁山岡鐵太郎を招き德川家に清水領十万石並に駿遠參の内七十万石を賜ふへき旨を告く

〔海舟日誌〕

（九月二日の條）

大久保氏より四時阿州の旅邸より小拙一翁鉄太郎御内談之筋有可罷出旨文通阿州侯邸に而侯并大久保氏江東三人小拙願立の内二ヶ條所謂清水十一萬石并一州近傍にて七拾萬石奥州爲替地御渡可有之御内決有之右にて府下の士移住速に可致且暇遣候者等如何の手段にて撫育いたし候哉試度旨也依而見込み蓋增且關東の風習等陳述然る上は遠江一ヶ國三河之内にて七拾萬石御渡可有之旨御沙汰有之事

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫薄美手帳抄略）

九月五日

○增田（貞右衛門）云、於雲州邸阿州侯大久保江藤列座勝安房山岡鐵太郎と談話終に駿遠參三國被下置に決したるよし（雲州邸は此時阿州の陣營たりしこと薄美手帳に明記あり）

九月二日耶蘇教士フルベッキ長崎を發して大坂へ往く是比耶蘇教諸國に傳播の狀あり

〔慶應三年探索書扣〕

九月報知略

一筑後國今村と申處二三年已前ゟ長崎浦上ニ通路致兼而天主教信仰致候處六月以來浦上之教師代之者二三人ッヽ不打絶立入唯今ニ而之一村ニ及候由慥ニ承候

一浦上邪徒百十四人御預ケ之後七月下旬殘之邪徒天主堂教師と申談し四五人商人之躰ニテ他行いたし候此ハ御預之所ニ邪徒之跡を慕ひ行候歟又ハ諸國に弘教之爲ニ行候歟何分天主堂ゟ多分之金子爲持候而遣候由

一九月二日耶蘇教士フルベーキ長崎出帆ニ而大坂に往キ申候此ハ大謀有之候由

（此書は八月十四日肥前五島の基督教徒、浦上の天主堂に詣つる條に掲げたるものゝ續きなるべし、此書の續きは十月朔日の條に掲くなり、唯寶寺良嚴が本願寺に報知せしもの）

九月三日長岡護美准議定職を以て鎮將府に勤務し本職の軍務副知事は曠職の恐あるに依り住江甚兵衛をして辭意を三條實美に致さしむ

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫薄美手帳抄略）

同三日（九月）

○住江を三條公に差出し云私事當官御用向は勿論と被仰付置候處鎭將府へ出席准議定相勤候樣被仰付候得は日々鎭將府へ罷出候事にて全く當官は虛職にて御座候間御免被下度且鎭撫之義は下總常陸被仰付候事に付江戸府の鎭撫は無之候歟奉伺候尤議定職に取候て之鎭撫は勿論其心得にて罷在候段申上候處猶考ふへしとの御返答なり

同四日快晴

○我性近日內外の多端に倦み且は公事の目的迅速に運はさるを以て頻りに江湖之歸思を御す

九月三日本藩主詔邦一門長岡休焉に上京を命す尋て休焉は目附澤村脩藏と共に十日を以て熊本を發す

〔御國往來狀扣〕

右者用意濟次第早々出京被仰付旨昨日御直ニ被爲在御沙汰候此段爲御存申達候以上

九月四日　　長岡休焉殿

御中老中

御家老中

兩京充

〔仝書〕

右者御用有之長岡休焉殿一同出京被仰付旨及達今日爰許被差立候此段爲可申達如是御座候以上

九月十日　　澤村脩藏

溝口藏人殿　　木村男吏

〔一新錄自筆狀〕

（九月四日附藩政府より京都東京の老臣へ通牒の一節）

御卽位茂先月廿七日被仰出候段相分然上之前文之通變動後いまた天機御窺度不被爲在候付御大禮之御歡旁一刻茂御上京と斷然昨日被仰出專御用意被爲在候事ニ御座候休焉殿にも不日ニ出立御先ニ着京有之候而萬事御輔翼被申上候筈ニ候

九月三日米田虎之助は中山源次右衛門志方司馬助が東京へ返るに託し仙臺謝罪に關する交渉の始末を田中八郎兵衛に通報す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月十七日

仙臺謝罪降伏之略

去ル三日中山志方ニ相渡東京へ差遣候書取（九月三日中山志方中村を發し東京へ返る）

一八月十四日仙臺百之臣鷲尾右源太より彦右衛門長右衛門と申兩人之農夫ニ中村藩多々部藤藏列三人名當之書翰を持せ此人々ニ面談仕度去なから兩軍對營中なれは萬一途中ゑして本意を失ひ候事有之候而ハ甚遺憾ニ候間前以其段伺出候何卒右三人に面會仕候儀取計呉候樣申入候段當地御役所に先手より報告有之候間先兩人を厚待遇し置不取敢參謀府へ懸合候處右鷲尾を招キ中村藩一同申出之趣聞取候樣御達ニ相成候間則十五日百姓兩人之內壹人を留壹人を遣り故障無之候間早々罷出候樣申向置十六日參り候約束之處不圖戰爭相起り引續キ廿日之戰爭も有之爲是延引いたし居候內廿三日前キ之百姓再今泉村に參り遲延之譯を申陳且今日は鷲尾之外ニ本藩之臣氏家同以ト申者都合兩人つるしが濱迄參り居候付兩人共罷出候て不苦哉此段も猶御伺申上ト申出候間先ツ今日ハ鷲尾のミ被參候樣返答いたし候處暫クして同所

に來り津田山三郎に對談有之候共ひとゝなり鎮靜ゝして凡六十殆キ年齡ニ而頗誠實之樣子ニ御座候然處中村藩に御面會被願候段過日雅藩陣所に御申入ニ相成候間其段早速總督府へ奉伺候處雅藩ニも中村藩一同御面會可申との事ニ御座候間一ト通り御話し承り候而不苦候ハヽ何卒承り度段先此方より挨拶仕候處いや元來中村藩に而會と申儀ニ限り不申候へ共何レへ罷出候而宜キ哉相分不申幸同藩多々部藤藏へハ一二面之交り有之拙者勤王之素意ハ承知仕候事故差寄此方に便り雅藩謝罪之儀願入候筈之處使之者不計細川公之御陣營ニ參候とハ實ニ願ふてもなき幸ニ而只此上ハ偏ニ御周旋之程御依賴申上候元來拙者儀屢爭諫いたし候末近年禁錮され居頃日漸被免候者ゝ而不肖之身を以是迄罷出候儀ハ無辜之蒼生塗炭之苦ミ主家之安危旦夕ニ迫候を何分座視するゝ不忍不及なから相救度命を度外ニ差置罷越候儀御洞察被下呉々も御周旋奉願候津田問尊藩ニハ一旦討會之命を被奉居其末今日ニ立至候ニ者定而御深意も可有御座承り度段申聞候處其返答ハ別紙聞取書之通りニ御座候兎ニシ角ニいたし今日之事は只々奉恐入候次第幾重ニも謝罪仕候之外他事無之候全體拙者儀ハ主人內命を受罷出候事ニ候へ共何分本藩ニ而奸魁但木土佐ハ既ニ被廢候へ共猶其黨要路ニ當り正黨至而微々なれハ何分其儀出來兼煩悶遺ル方なく其處する所を不知只々焦思仕居候右之通之情實故御元より御差圖さへ有之候へハ如何樣共思召次第ニ相成可申仰願ハ一封之書翰ゝ而も被贈下候ハヽ甚幸之至ニ候津田云御內情御尤ニハ候へ共即今日々官軍ニ抗戰有之內書翰を送るなとゝ申儀は出來兼申候尤謝罪實効を被爲立候ハヽ於　朝廷寛大之御處置有之儀ハ必定ニ而遠クハ德川氏近クハ相馬氏を以見るへし如是一旦天怒ニ觸レ候者も反正歸順仕候へ者亦隨而寛典ニ被處候間此儀者少しも御疑惑なく謝罪之筋相立候樣御盡力有之度候尤實効相立ニおゐてハ屹と御取次可申と申向候處兩人共大ニ歡ひ大臣を可差出ト申殘し罷歸申候同廿八日若年寄氏家兵庫側目付堀省治兩人つるし濱まて參り氏家道以を以申入候ニ者陣所に參り候儀未內輪居り合兼候情實も有之自由ヶ間敷事なから大巡邏之處を以御惣師始今少々踏出被下候へハ其途中ニ而御行逢申處ニいたし度との儀ニ付津田云成程無據情實も可有之候へ共此節　天朝より出兵之御沙汰を蒙り出張向ニ而私之御面談渉り候而ハ　天朝ニ奉對恐入候譯も有之何分此方より罷出候筋合ニ無之御賴ミに

よつて御取次申而已ニ候へハ此儀乍心外及御斷申候何卒當所迄御出張被下度段申達候處同人も其理ニ服し御尤千萬也ト申頓而兩人を連來り此方よりハ諸役相揃中村藩同席ニて今泉陣所ニおゐて談判有之候處矢張り大同小異ニ而謝罪歎願之外他事無之候且先方より如何之事を致候ハヽ謝罪之譯ニ相成可申哉萬端御教諭可被下御差圖ニ隨ひ可申ト申出候間罪を謝ゝるゝもヶ條下多可有之候へ共即今之急務ハ先甘境守禦之兵を解次而會討之命を被奉なから却而會を助け奥羽各藩會盟せらゝし事ニ初發より關係仕候者兩三輩之首を斬次而舊幕府脫兵者元來上天威を犯シ奉り下主人慶喜恭順之意ニ戻り主家を脫走せし暴逆無道之兵なゝは盡放逐有之先ッ此三ヶ條實効相立申度段申向候へ者御尤之御儀早速其通施行仕度候得共奸黨勢ヒ猶盛ニ而正黨誠微々なゝハ急ニ者中々難出來暫時休兵被下候ハヽ其際ニ者如何樣共內輪手を付ヶ可申と云津田答實効事實相立不申迄之處休兵と申儀者何分難取扱其子細者各藩之兵隊眼前ニ賊と對陣日々戰を挑候央內輪幣藩迄貴藩の情實承知いたし候迄ニ而休兵之取扱者如何ニも六ヶ敷當所之戰爭ハ戰爭ゝして一刻も實効之筋ニ御盡力有之度先一藩丈ヶ之聞取ニいたし置實効さへ相立ニおゐてハ屹度御取次可申段呉々申含寸刻も右之條々御施行有之度其上ハ如何樣共御周旋可申上ト申候へハ皆々大ニ同意ニ而尙此上ハ一門並家老をも可差出ト申殘し罷歸候猶近日模樣有之筈ニ候事

別紙

仙臺藩奥羽之諸藩と會盟し官軍ニ抵抗せし固(カマヘ)ハ會藩三浦某ナル者僞筆ニ而長州勢良周藏より薩州大山格之助に兩人共奥羽鎭撫使總督之參謀なり送ル之書翰ニ擬し使之者途中ニおゐて必仙臺人に被捕候樣詐術を仙藩にも三浦が謀ニ前以與設一使人ニ右之書簡を持せ差遣之道果而仙藩より見付出及拔見之處其文面今度仙臺藩討會之命を奉し出兵いたすニ付國內究而空虛なるへし一舉して五拾餘郡を拔積り同藩を僞ゝ之密策を示越したり仙臺人是を見大ニ憤怒し忽勢良周藏を招キ及詰問候間同人も意外之事件ニ付種々無實之陳述いたすといへとも一圓不聞入折柄三浦某も通り懸り之體ニ而其場へ立寄巧言を厚而實事ニ申成し不分眞僞終ニ及殺害ける其後右僞書を國內へ布告し官軍如是殘暴ニ而奥羽之諸藩飛鳥盡而犬鷄盡

られんより寧兩國合從して一旦朝敵之名を負とも官軍に抵抗し中間之雲霧を拂ニ不如と一般雷同せし由仙藩亘之臣鷲尾右源太直話之事

九月四日長岡護美書を奥州出張中の米田虎之助尾藤金左衛門に與へ東京其他の概況を垂示す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記、佐田家文書〕

急飛脚差立申入候寒冷相催候處愈勇剛在陣之旨致大賀候扨者官軍時々戰爭近日者いつも勝利之旨當手之手都合宜敷致大慶候就者長陣ニ相成一統も嘸々苦勞可致實ニ察入申候如方今彼より時々襲來ニ而者誠ニ兵士も疲レ可申相考候間爲救援軍記組且大砲隊の二隊水野手一手差立申候條明後日品川出帆候條安心頼入候若松も烈敷戰ヒニ相成り廿三日より廿七日迄書夜連戰最早落城歟之旨申來り米澤ハ全ク降伏會人ヲ縛シ先日來會ノ手ハ全ク離レタル由付而者仙臺も上野宮ヲ差出し降伏可致勢も有之よしに相聞エ候間西浦列之盡力筋も仙臺ニのみ成り可申候間御評議可有之歟然處今日ニ至り會ト引分レ全ク恐入候段申出候米澤ナドハ筋も何も無キ樣ニ而一笑之事ニ御座候只今迄ハ會ニ引入られ事情ヲ誤りタルト申出候よし甚敷事ニ御座候此節援兵參着之上者彼レ暴ナル所業有之候而も大キニカヲ得候事ト安心いたし候江戸府は德川氏七十萬石も被下清水料も被下旗下之御扶助等拙者見込之通り被仰出誠ニ平定いたし候勝安房ナドも追々禮ヲ申候事ニ御座候安心可被致候清水手も二三日中より凌雲丸ニ而下シ候事ニ候差寄申入候事も無之尤一大事件有之候得とも兼紙ニ伸へ不申候早々如此候也

九月四日　左京亮

尾藤金左衛門殿

米田虎之助殿

尙々此書狀役々へも見せられ度候已上

今日如此時世ニ立至り候處ニ而者何卒西浦列ハ得斗評議ニ而可然此節者會ノ方ハ立離レ度存候實ニ仙臺も不日瓦解ナル可ク米澤ナドハ信義も無キ國ニ而削地之論も邸内ニ起り候向も有之候已上

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手帳抄略）

九月三日

○奥州に出兵をなさむとす

○鹿子木來り云ふ勝より上言のよし

下野の市川に賊兵浮浪之徒等潛伏蜂起のよし只今なをさりに差をかれは由々敷大事ならむと則ち出兵せよと肥後其他にも命せらるゝよし

○田中林來る小笠原も來る云ふ江戸府各所の請持場を被免其兵を以て野州の蜂起を鎭撫せむ明日鳥田を督府にやる可しと議す

同四日快晴

○水野傳佐田彦之丞に面會

奥羽出兵のことを云ふ水野云海上は風波の候なれはたとひ本船はよくとも端舟にて上陸いかゞ有る可き歟と余云ふ船將國友（式右衛門）の見込に任す可し

○長谷川來り面語す云ふ昨日市川と云ひしは下總ならむ

○萬里丸に出船の事を云ふ

○清水數馬一隊を國に歸らしむ

凌雲丸出船をもよふす

○大炮隊長永嶺雲七平野宣太郎に面會し出張の事を云ふ

○連句の艱苦可憐之至に付奥州出兵之面々へ酒樽煙草是を贈る
○奥雪將雪兵士衣食いかむ則ち衣とわらじかけとををくり且食をも心配するなり
○中村邊漸く病人手負のみ魚鳥の肉を喫ふと云ふ
○海上風なきときも磯邊の浪高くあるゝよし堀田海岸歸途七十間計りの所を過るに籃輿三度をかぶりしと云ふ想像するに節季秋に至り曾而四月の壬もあり即今海伯怒り巨浪如雪山なる可し臣をもふに陸行にしくはなし且過日脫するところの軍艦もあり萬一不虞の變あらば如何ともす可らずと云ふ

九月四日在東京本藩重臣田中八郎兵衛書を米田虎之助等に贈り長岡護美の献言に依り徳川氏に清水領十万石並に米二万俵を給せらるゝこと及ひ我藩兵後屬隊の奥州出征のこと等を通報す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

以手紙啓上仕候御平安例之奥州御出兵向に早打ゝ而歩御小姓兩人差立候付如是御座候已上

九月四日　　田中八郎兵衛

米田虎之助殿
尾藤金左衛門殿

以別紙得貴慮申候奥村軍記組水野傳已下出張之儀府下物騷之聞へ有之候付而ハ　朝廷よりも御沙汰之筋有之旁ニ而暫滞府被　仰付置候通ニ御座候處莫幕旗下困窮之面々御扶助等之儀付而者左京亮様追々御献言等ニ而御盡力之末差寄清水料拾萬石並米貳萬俵右御扶助之爲德川家に被渡下旨御布告ゝも相成候處より自然ト府下ハ鎮定之委ニ相見且從朝廷茂其地に出兵之儀御沙汰有之候付今日水野傳奥村組脇永嶺平野兩師役共被召出右之譯を以早々出張被仰付鎮撫筋之儀者過日金左衛門様御初に委曲被仰含置候趣を以彌盡力いたし候様御沙汰ニ相成孰茂來ル七日萬里丸乘組ゝ而發向之筈御座候就而ハ奥村茂御地ニ相滞居候哉否不定ニ付今日歩御小姓兩人態と陸地より早打ゝ而差立書夜心を付途中行逢次第直ニ御地に引返之儀茂申向候事ニ御座候會津之方茂猪苗代勢至堂等之要地を被拔取最早若松も落城ゝ及たる哉之由且米澤之方ハ參謀抔より說得ゝ而降伏之運ニ相成居候哉之趣報知も有之如此　皇威相立候處ニ而ハ機ニ投し仙臺之方ニ茂御手を被着候様も可有之歟何様御國議之御趣意徹底いたし候様御盡力之程奉祈候偖別紙御建白書寫進覽仕候右者一昨二日御持參ニ而頭將府に御指上之處大ニ御請宜有之候由至極之御都合ニ而從　朝廷茂御鎮定筋ニ御手を可被爲着哉之處官軍小勢ニ而萬一彼より被破候様之儀も有之候而者御鎮撫之運ニ茂差障候儀ニ付前文之通出兵被仰付候事ニ御座候他者後鴻ニ讓要用迄匆々申上縮候以上（本文別紙御建白とあるは前九月二日に掲けしものなり）

九月四日　　田中八郎兵衛

米田虎之助殿
尾藤金左衛門殿

（江戸發軍ヨリ凱旋マテ日記に據れは蓋し此書と兩篇揭載せる長岡護美の書とは九月十二日に奥州中村なる米田の陣營に到達しせものなり）

九月四日津輕承烈（後承昭）書を長岡護美に贈り奥羽の戰況を報し且つ援兵と汽船とを差遣せられんことを請ふ

〔神庫文書十五番辰印二十七番〕

津輕公ヨリ護美公へ

一筋呈上仕候冷氣之砌御座候處先以愈御清穆ニ被爲涉奉欣抃候其後天下之形勢追々變遷致通路相塞り久々寸楮も呈上不仕如何御淩被成候哉委敷伺度奉存候扨九條殿仙藩に爲鎮撫御下向後無間會莊追討被仰付弊藩ニ而も秋領に出兵仕候處仙藩ニ於て奥羽廿八藩會議之上謝罪之取運ニ相成一ト先解兵仕候澤殿ニも新庄表より秋藩に御轉陣九條殿醍醐殿ニ

之南藩に暫御轉陣夫より秋藩城下ニ而御三卿御彌又々會莊再討被仰出仙米も追討被仰出候於弊藩も同盟ニ相與し候哉ニも御疑念有之於京地近衛殿ニも本庶之間柄浮當家之浮沈を御案事被遊　朝廷向被是厚御周旋被下置且又平馬を以御與書ニ而懇々被仰越家中一同に直樣布告仕候猶又貴君ニも厚御配慮被下候旨平馬より承り何共御懇情之程忝奉存候必竟御盡力より當家之大悅奉厚謝候扨今度江戸表迄征討之廉ニ而御出張嘸々御心痛之程山々御察申上候扨又秋藩にも追々官軍到着於庄境戰爭相始り候後追々庄兵進擊東庄ハ既ニ落城ニ相成亀田ハ右之勢ひを見庄兵に隨從いたし官兵之爲ニ砲火せられ八月中頃ニ相成秋領迄侵入院内口にハ仙兵山形上ノ山等之軍勢共ニ力を合せ所々砲火神宮寺迄進入川を隔陣を張り候最早久保田迄ハ壹里余一方ハ貳三里位押寄危急ニ相成困り入候秋藩之兵ハ論ニ及へ弱兵ニ而器械も不足多分ハ聲を擧逃去候迄ニて必死之覺悟薄き樣ニ被思申候弊藩ニても援兵差廻候處戰爭ニ而討死手負等廿人計も有之候兎角昔々數官軍も多勢着不仕久保田表ハ危急ニ相迫り共後少しと官軍挾打致仙庄之兵貳百人余も討死有之候由秋藩と當家計り勤王ニ而愈秋地危急滅亡ニ至り候時ハ右落人弊藩に逃奔り可申且南藩も同盟ニ方向相定既ニ弊境近き秋領に進擊大舘も遂ニ放火致秋地之者所々に散亂弊藩にも七八拾人程參り就而之境外に嚴重相固メ候て官軍五六百人程綴子と申處迄參り戰爭ニ而右機會ニ乘し南境十二所迄押出し候手順ニ御座候扨御承知之通り舊怨之國柄ニ而一日干戈を相交候而之存亡無測此度醍醐殿當地に御轉陣ニ而南討被仰出參謀肥前藩前山精一郎と篤と軍議を盡し罷在候王命を受候て舊怨を報し餘義之上下一同奮勵罷在候得共勝算之見居無之輕舉仕候て万々一被より一歩も馬蹄を入候而之先祖以來艱苦仕候詮も無之最早十日十五日位ニ而雪降寒氣嚴敷相成候へハ戰爭も六ケ敷義と其節ニ至り官軍引揚且御三卿御歸京ニ茂万々一相成候てハ弊藩之不都合命日夕ニ迫り援兵等も無之右之切迫幾重ニも御汲察奉願候就而之情態も貫徹不仕如何ニも難默止相成候間何卒不取背早速貴君之御人數之内より貳小隊位も御廻し被下度猶御都合宜ハ蒸氣船壹艘暫拜借仕度奉庶幾候右貳小隊蒸氣船之處も思召を以御廻し被下置候へハ家中之氣受も格別宜士氣振張仕候義と大悅罷在候尤明春ニ相成愈討入之期ニ至候節ハ御國許より御人數御廻し之義模樣ニ寄奉願候貴君ニも段々御盡力御教誡被下上ハ各藩同盟之譴責等之更ニ不論斷然勤王之素心ニ愈確定仕り皇國之御爲幾重ニも盡力可仕候間御安慮被下度奉冀候猶此上とも御垂憐被下度奉願候奥羽之事情之使者に申含候間篤と御聞上被成下候樣奉存候書之不盡言繁忙亂毫御推覽可被下候早々頓首

九月四日

左京亮樣　越中守

机下呈上

一、仲日增寒冷相募候間折角時下御自愛專要奉存候吳々も弊藩危急差迫候間幾重ニも御深察之上尊慮を以出張御人數之内より貳小隊御廻し奉願候不備

九月四日我藩老臣尾藤金左衛門中村城下を發して東京へ返る此日賊軍逆襲せんとする勢あり官軍各守備を嚴にす

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

九月四日

尾藤大夫（金左衛門）ハ今日江戸ニ返ラル

因州藩兵隊舊幕府ノ歩兵ヲ引卒シテ昨日中村城下ニ着セリト云

賊軍ノ砲臺味方砲臺ト近キ處ニ來リ築ク仍テ各藩持場一層警備ヲ嚴ニス

九月四日本藩草野豹藏學校御用掛を命せらる

〔慶應四年〕王政日新錄〕

〔九月四日非祓人口に於て山本少將より内山又助吉田武八郎へ渡されたる書付〕

共方家來草野豹藏儀學校御用有之御屋被　仰付候間出仕可申付事　肥後中將

九月　行政官　草野豹藏

御屋を以學校御用掛被　仰付候事　行政官

九月

九月五日來八日改元式擧行の旨を告示せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

九月五日

辨事御役所ゟ御呼出ニ付松尾出方之處御書付五通御渡ニ相成則寫左之通

但千種少將殿御渡之事

來八日辰刻改元式被爲行候ニ付參賀可致事但御當日相除九日ヨリ十二日迄之內參賀重輕服者御神事後參賀可致尤總而不及献物候事　行政官

九月

九月五日阿野公誠鍋島直大參與を命せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（九月五日千種少將ゟ渡書付五通の內）

阿野中納言

右參與被　仰出候事　肥前少將

九月　行政官

九月五日諸國御料所百姓町人へ舊幕府より苗字帶刀及ひ諸役免許を與へたる者府縣にて調査申告すへき旨重ねて督促せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（九月五日千種少將渡書付五通の內）

諸國御料所百姓町人共舊幕府ゟ苗字帶刀及諸役免許並扶持方等遣し置候者共其府縣ニ而取調へ其由緒　御吟味之上御沙汰之品も可有之旨兼而御布令有之候處今以等閑ニ打過候向も有之趣ニ候間猶又其最寄ニ而早々取調へ可致旨御沙汰候事

但府縣へ右之通被　仰出候間御料御領之藩ニ於而も同樣可心得候事　行政官

九月

九月五日長岡護美は近侍堀田愼之允安藤源之助に米澤藩宮崎誠一郎を伴ひ奥州に到り宮島を米澤へ送還して該藩の反正歸順を慫慂せしむへき旨を命す

〔江戸京都來狀扣〕（從慶應二丙寅年正月至明治三年）

（九月九日江戸詰田中八郎兵衛より家老中老宛の書一節）

右者探索御用ニ付横濱表ニ被差越旨被　仰付置候處被遊御免奥州白河表ニ被差越旨　堀田愼之允

右者御用ニ付右同所ニ被差越旨
右之通去ル五日及達候

〔子爵長岡家文書〕
（松竹梅文庫謄美手帳抄略）

同四日

○堀田忠之允來り云ふ今日舊幕人に逢ふ是は亀之助留守居のよしにて才子風のよし勝の手先なり前島（來助）とか云同人宅にて米澤人宮島某（誠一郎）に逢ふ同人は曾而古庄等と仙臺より同船し來りたるよしにて其砌江戸にをいて宮島與榎本談しあり開陽丸を奥州の松しまに廻し奥羽の藩に仙米庄會南津棚等を定め夫より艦を各所に運動し九州の糧道をも絶む艦には榎本のりて横行せむ宮島は上京暗に建白せむと宮島上京し一書を土州前太守容堂に出す又其手を以て小松帯刀後藤象次郎木戸準一郎にも出す然るに兵事紛紜として辨せす其中京地出立爰に來り便船もなく在留罷在ると堀田等云ふ米は已に降れり今日に至り云ひ甲斐なき事なり汝早く錦の印を片肩につけ白日東京を横行せよとなじり試む宮島はさして不驚さよをの國議ならは臣輩東海の浪をふまむと云ひしよしなり此人事を爲すの器はあると考ふと云ふ

○松崎云ふ米人宮島誠一郎今藩邸に來り小子に面會し歎願せんと云ふよし如何むせは是可ならむや余云此般宮島か京都にて歎願せしは餘理正して確乎たり而今本國は降伏のよしにて宮島と相反せり等閑に面會し猥に是をとりても國情と反せは盡力何の益あらむ因而計るに藩士二人を白川方角探索に出し竊に此人を連て暗に彼地に入れなは國情正しときは必す督府且藩士へ歎願あらむ國情利勢になかれあらは彼亦再ひ來らじ其上確たる正義を以て正義を立て　皇國五洲に卓越の大勢を更張せは其事必す果して成らむ同心なりと云ひ直に宮島に面會す可しと云

同五日　空霽り冷氣
一人ふかし

○松崎來る云ふ昨夕與宮島話せしに其人沈着なり京都に而の上言を示し且末家の臣と云ふを以て容堂公に上書せしよし且藩幕と佯り穂波卿と同船し八月下旬京を出て本月第一横濱に著せりと此節過日三春よりの來狀を拜披すれは國情の違ひも雖計と落涙せぬはかり云ふ大國越後とあるは米澤にては才子なりしかし自身發米之みぎりは引入居たりし杉山とあるは杉原に可有之是も同樣引入居たり早く國にゆき臣子の安心をなしたしと云ふ（編者曰、三春よりの來狀とあるは八月廿九日掲載せる三春在陣磯谷小右衛門よりの戰況報告書なり）

○堀田安藤に白川行を命す二木松にも至らむか

○讀宮島の上言せし書三冊

○會津の事風評に三十日ッモゴリなりに至る未た落城せすと

○堀田來り云ふ明日より奥州へ出立せむ宮島は從僕にして連れ越ん庶事は出先に委任す可しと云ふ

九月五日在東京本藩重臣田中八郎兵衛は長岡護美の獻言等によりて舊幕旗下に扶助せられたること及ひ番頭奥村軍記水野傳等に兵を率ゐて奥州へ出張すへく命したるよしを在京都並に在藩の老臣に通報す

〔一新錄自筆狀〕

以別紙得貴慮申候奥村軍記組水野傳以下奥州出張被仰付置候得共府下物騒之唱有之候ニ付而者朝廷ゟ茂御沙汰之筋有之旁ニ而暫滞府被仰付置候處舊幕旗下困窮之面々御扶助等之儀ニ付而左京亮樣追々御獻言等ニ而御盡力之末差寄清水領拾萬石並米貳萬俵急場之御扶助として德川家ニ被渡下夫等之處ゟ府下者謹定之姿ニ相成且從朝廷茂奥州出兵之儀猶御沙汰茂有之候ニ付昨日水野傳奥村組脇並永嶺雲七平野宣太郎一同被召出早々出張被仰付頭撫筋之儀者最前御決議之通り彌以致盡力候樣との儀も御沙汰ニ相成孰も茂明後七日ゟ陸行等ニ而發向萬里丸茂不日出帆之筈ニ御座候偖會津之

方茂猪苗代勢至堂等之要地を被拔取最早若松茂爲及落城哉之由且米澤之方者參謀等を說得ニ因而降伏之渾ひニ相成居候哉之報知茂有之如是皇威茂相立候處ニ付而者機ニ投し御取置之筋茂有之度仙臺中內之模樣如何其後報知を相待居候事ニ御座候將又御建白之儀者早川助作ニ持せ被差下候通ニ而去ル二日御持參鎭將府ニ御差上ニ相成候處大ニ御受も宜爲有之由何樣至極之御都合ニ而從朝廷茂寬太之御所置ニ可被爲出哉之處官軍小勢ニ而萬一彼より被破候樣之儀も有之候而ハ御鎭定之御運ニ茂差障彼是一大事之場合ニ付前文之通出兵被仰付候事ニ御座候他者讓后遞右之段迄匆々申上縮候以上

九月五日

溝口藏人殿　京

長岡帶刀殿　御始寫略ス

御奉行ニ而御家老之處也（在江戸）

田中八郎兵衛

九月六日本藩兵を東京より奧州へ出征せしむることを大物將府に申告す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

總督府ニ

當藩兵隊奧州表出張被仰付候付惣帥米田虎之助始者先達而出張仕右一手之人數相殘候分四百七拾貳人先日出張仕居筈之處府下物騷之聞ニ而暫致滯府居此節出張之御沙汰ニ付二百人明七日御當地發足仕二百七拾二人者明後八日發足兩日共陸行ニ而罷越候筈御座候且手船萬里丸之儀者炮器玉藥等積入是又明七日奧州表ニ出船仕筈ニ御座候此段御屆申上候樣左京亮申付候以上

九月六日

長岡左京亮內

會計局ニ

島田次兵衛

當藩兵隊奧州表ニ出張被仰付候殘分四百七拾二人之內明七日二百人御當地發足仕明後八日二百七拾貳人發足仕陸行ニ而中村迄罷越候筈御座候依之休泊並御賄之儀宜被成御沙汰可被下候此段申上候以上

長岡左京亮內

島田次兵衛

九月六日

會計局

九月六日我藩兵奧州出征の旅費を支給せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

一金千六拾貳兩貳歩

右肥後藩人數四百七拾貳人奧州中村迄道中十二日歷一人ニ付三朱ヅヽ之割ニ而同藩人ニ下渡被申付候事（翌七日に至り變更せしを以て旅費の件は航海を終りたる上申告するも差支なきや否やの伺書を提出せり）（陸行を航海に）

九月六日

下參謀印

會計局

九月六日在京都本藩老臣溝口藏人は小篠熊雄等を返して在藩同志者を說得せしむる件及ひ己もまた岩倉具視の內旨ありて明日より歸藩すへしとの意を藩政府へ通報す

〔一新錄白筆狀〕

以手紙申達候小篠熊雄坂本七太郎兩人引返早打ニ而今日爰元差立候其大意ゑ右之一列着京以來段々出合京地之時躰追々面視ニおよひ稍活眼開ケ候趣ニ相聞現實之樣子一刻茂遂言上其表同意之輩ニ茂篤ゑ申談得心之歩を附度との內願茂有之由ニ候間可然との見込を以差立候條委細之儀ゑ右兩人よゑ御聞取可被下候

一先便組得御意置候通野生儀去ル三日早朝より岩倉殿ニ參殿致御面謁相伺候條件至密之御用筋ニ付直ゑ言上仕候ため明

日中之急ニ而當邸出立西歸之筈ニ候尤右之段報告として關東之明日荒尾素兵衛森武兵衛兩人差立置候事候右ニ付近日到府面上萬々可得御意候間疎漏略錄ハたし候以上

九月六日　（在京）溝口藏人

長岡帶刀殿（外家老中老名前略す）

猶々今日茂御暇乞旁岩倉卿ニ參殿ハたし諸事相仕舞明晩夜舟之心組ニ在候事ニ御座候以上

九月七日脫走不逞の處分に關する令達あり

〔京都江戸返達御用狀扣〕

（九月七日鎭將府辨事より我藩外廿一藩公務人宛廻達）

先般以來德川旗下其外諸藩脫籍之徒官軍ニ抗衡致戰爭候者不少候處伏罪之上者被處寬典候然處下情兎角悖慢今以脫走屯集等いたし候段重々不屆之至ニ候此上者御仁恤之道茂被爲絕候付向後脫走屯集之輩於有之者士官張本者不及申夫卒至迄總而可被處嚴科旨御沙汰候事

右之通今般御治定ニ相成候條爲心得申達候事

九月

九月七日我藩奧州出征軍の進路變更の旨を大總督府に申告す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

總督府ニ

當藩兵隊奧州表ニ出張被　仰付候殘分四百七拾二人今明兩日ニ御當地發足仕陸行ニ而中村迄罷越候筈之段昨日御屆申上置候處最早海路茂各別煩敷趣ニ茂相聞不申就而者奧州出兵之儀一日も早く差越不申而者難相濟御座候間前條之人數手船萬里丸ニ今明日ニ乘組直奧州表ニ出航仕筈御座候此段御屆申上候樣左京亮申付候以上

長岡左京亮内　島田次兵衛

九月七日

九月七日本藩原寇の役に負傷せし我藩兵高野修五郎死亡したる旨を總督府に申告す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

總督府ニ

先月十一日奧州表原寇戰爭之節當藩横田治部右衛門隊高野修五郎儀深手負候處其後相果候段同所出張之者より申越候此段御屆申上候以上（江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記ニ高野修五郎ハ八月廿八日死亡とあり）

長岡左京亮内　島田次兵衛

九月七日

九月七日我藩大砲隊長永嶺雲七平野宣太郎兵を率ゐて奧州へ向ひ東京を發す

〔江戸京都來狀扣〕（從慶應二丙寅年正月至明治三年）

（九月九日仕出江戸詰田中八郎兵衛より書信の一節）

右者奧州出張被仰付置候處府下物騷ニ付而暫滯府被仰付置候處御扶助筋等茂被仰付同七日發許罷立候（以下九月九日の條に續く）

永嶺雲七
平野宣太郎
右門弟共

仰出漸々鎭靜ニ赴候付萬里丸乘組被

九月七日奥州今泉の我藩陣營に於て津田山三郎淺井新九郎は仙臺藩使者鷲尾右源太氏家同意と其謝罪に關し交渉す宇和島藩使者市村藤三郎等周旋の爲め鷲尾等と俱に仙臺に赴く

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

九月六日　夕八半時分氏家同意鷲尾右源太濱手砲臺前ヨリ今泉ニ來ル明日談判アルベシ

同　七　日　右二人今日津田山三郎淺井新九郎面會談判アり氏家鷲尾歸りニ宇和島藩士(市村藤三郎等)兩人同伴セルヲ見ル

〔一新錄探索報告〕

(九月八日奥州出張國局御物書北野角太郎ト廻の一節)

一仙臺謝罪之儀一昨日猶又鷲尾右源太氏家道以兩人今泉ニ罷出先日約諾之實効之儀内輪無據子細有急ニ被行兼候ニ付猶十一日迄止戰之儀願出候由此節ハ前以惣督府より仙臺之使者參り候ハヽ中出候樣御達ニ相成居候付御屆ニ相成候處御使番より應對之筈ニ候得共此節之本使ニ而無之候ニ付見合ニ相成於督府茂成丈穩ニ取扱有之模樣ニ而都合能相運可申と愚考仕候併賊者不相替人數繰出居始末斥候等出シ我藩持場を茂追々窺候由ニ付先手之面々並諸藩共最早進擊いたし度氣色ニ相成居申候條就中當中村藩ハ是迄勝手ニ被引廻私怨茂有之歟追々進擊を促し申候

一仙臺ハ領内ニ攻入ラレ居候儀大ニ氣懸りと相見先月廿日之節茂大舉ニ而領内ハ打拂關門ハ取返ス之積ニ而爲有之由今以其意氣込者十分ニ相見申候依而正議派と過激派と相分居候儀之顯ニ御座候

付紙　本紙兩人罷歸候節鷲周旋宇和島藩より兩三人同道罷越申候

〔討仙偏誠佐田家文書〕

鷲尾右源太今泉ニ來る事

並宇和島侯の使者仙臺に入る事

(前略)

然るハ伊達藤五郎伊達將監を始其外同志之者共伏罪歎願之事ニ周旋もと雖も舊幕脱走純義隊(象義隊)を退るの事ニ至てハ迎も無事ニハ行わるまじ武威を以て彼等を制せんとせハ我兵力足らも兵力足らもしてハ制するの道ふく今四五日を經ハ秋田の出兵と三春の出兵と引上來らん夫迄官軍進ミ來らもんハ事成り安しと雖も官軍却而吾を遲疑もと云て憤怒發し進ミ來らハ事甚タ難し故ニ一ト先ツ今泉ニ至り内情を哀訴せハ强て進ミ來る事ハよをにらじと氏家道意鷲尾右源太二人を今泉ニ至らしむ同七日氏家鷲尾我肥の營ニ來りて云ひけるハ偏土卑陋之人民昏愚暗昧ニして誠ニ諭しかたく日數を經て漸く實効を立罪ニ伏もるの道ニ運ひたり然と雖も其事實ニ至てハ又速ニ成し難し今公等の海量を以て來ル十一日迄軍を爰ニ止メらるて後仙臺ニ入給ハヽ力を盡し期限を違へも其驗を奏すゐし僕等ゐ歎願何卒憐を垂るて給へと云へハ虎之助どの答へらるけるハ官軍の進と進まさるとハ我に在て汝にゐらも速ニ其驗を奏せよと云て氏家等を差歸さる此時伊豫宇和島侯の使者仙臺ニ入らんと中村藩まて來りけるとも仙臺の激心烈敵を以て未た入ること叉得ざりけるが幸ニ氏家鷲尾ゐ歸りける丁そ能き便宜ふりと相伴ふて仙臺差て入りゑけり扨此宇和島侯ハ伊達家の緣ゐりて仙臺の暴動を敷せらるて速ニ伏罪すべき事を勸めんと其臣某を以て千里の遠を厭るす來らしむるをの也是ニよつて氏家鷲尾彼使者を相伴ひ仙臺侯父子ニ見へ伊達將監伊達藤五郎等と屢會談ゐるとふり

是又仙臺の密事ニして論談洩るす大意を爰ニ記もるのミ

九月八日卽位の大禮を擧けさせられたるを以て明治と改元し一世一元の制を定めらる

〔一新錄皇令〕

詔體太乙而登位膺景命以改元洵聖代之典型而萬世之標準也朕雖否德幸賴祖宗之靈祇承鴻緒躬親萬機之政乃改元欲與海内億兆更始一新其改慶應四年爲明治元年自今已後革易舊例一世一元以爲永式主者施行

明治元年九月八日

明　治　元　年

〔慶應四年王政日新錄〕

九月八日辨事御役所御呼出ニ付内山罷出候處千種少將殿を以て左之御書付壹通（中略）御渡ニ相成候事

今般　御卽位御大禮被爲濟先例之通被爲改年號候就而ハ是迄吉凶之象兆ニ隨ヒ屢改號有之候得共自今　御一代一號ニ被定候依之改慶應四年可爲明治元年旨被　仰出候事

九月　行政官

九月八日大赦令を發布せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

九月八日辨事御役所ゟ御呼出ニ付内山罷出候處左之御書付壹通柳原前大納言殿ゟ御渡ニ相成候事

今般　御卽位被爲濟改元被　仰出候ニ付而ハ天下之罪人當九月八日迄犯事逆罪故殺并犯狀難差免者ヲ除之外總而赦一等被赦候事

但犯狀難差免者ハ府藩縣ヨリ口書ヲ以テ刑法官ニ可伺出事

九月　行政官

九月八日宮門及ひ諸口警衛の規則を發布し諸藩兵を配して守備を嚴にせしめらる

〔慶應四年王政日新錄〕

九月八日軍務官ゟ御呼出ニ付河邊鉄之助罷出候處左之御書付壹通西村亮吉を以御渡ニ相成候事

諸御門并諸關門警衛之規則

一宮門御警衛兵員

一小隊尤一晝夜半隊宛常詰之事

但晝夜二人宛二タ時替ニシテ回番之事

一九門并七口關門警衛兵員

二小隊尤一晝夜一小隊宛常詰之事

但一晝夜ヲ四分ニシテ一分隊宛回番之事

一七口之外間道之關門警衛兵員

一小隊之事

但詰番之儀者宮門之規則同樣可相心得候事

一諸御門諸關門之内警衛之藩々ハ固メ人數之外異變之節ハ相應之援兵操出相成候樣用意可致置事

右之通今般諸御門其外警衛之規則被爲立候間心得違無之樣可致旨申達候事

九月　軍務官

九月八日本藩奥州出征從軍機局吏北野角太郎仙臺及ひ會津の狀況を在東京の同僚に報告す

〔一新錄探索報告〕

慶應四年九月八日發奥州出張之機局御物書北野角太郎下廻同十二日東京着同廿五日着（抄略）

一當所（前略）（奥州今泉）ゟ近日ゟ大分居り付市中茂ばら〳〵罷歸團子あん燒躰之物ゟ賣歩行申候併最早朝ハ霜餘程相見是より先々押詰候得ゟ時候寒氣ニ赴土地も寒地ニ付衣類代等茂被渡下候得とも衣裳等ゟ容易ニ此元ニ而ゟ整不申はした切さへ手ニ入兼申候仙臺ニ茂參り候ハヽ同所ゟ城下も廣キ樣子ニ付少しハ可宜と相樂居申候　（中略此間の文は九月七日最後の條に出つ）

一會津落城ゟ間違之由其子細ハ二丸迄攻入候ニ付最早我物と思攻取候趣ニ注進有之候得共本丸にゟ三千計相籠り居城を枕ニスル之覺悟ハ勿論と相見未拔ケ不申由依之探索として一兩日已前より林源助濱武憤助被差越居申候

一津川口と敵中所ニ而先日會と薩と取合候よし之處會茂望之敵を受候故敵百人計ニ而槍を提ケ鉄炮持無シ手拳ニ而胸を叩キ爰打テ〳〵と呼り駈込候由依而薩藩茂大ニ突立られ百人計之内七人相殘其内應援有之漸ク防キ留候由勿論會之百人ハ死スル迄ハ進候事ニ付一人も不殘討死いたし候由烈敷合戰ニ而嗚しを聞候而之意氣凛々と罷成申候一統見物ゑたかつたと申候事ニ御座候(中略)

右之外格別相變候新聞も無御座書外ハ后便ニ讓り閑筆仕候頓首

九月八日　　角太郎

源藏様

九月八日我藩奥羽追討平潟口總督府の命によりて隨時出兵し得る兵員數調書を提出す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月八日

各藩何時ニも出張出兵可相成人數取調今日中必御差出可被成候事

九月八日　　御使番

肥後藩長官中

御奉行より取調差出候事

但貳百三拾人兵隊並役人共

九月九日本藩番頭奥村軍記等兵を率ゐて東京を發し奥州へ向ふ

〔江戸京都來狀扣〕(從慶應二丙寅年正月至明治三年)

(九月九日發田中八郎兵衛書狀の一節)

奥村軍記
水野組傳共
曾我浅之助共
小笠原庄左衛門
佐藤仙右衛門
大木七右衛門

右同斷萬里丸乘組被仰付今日爰許罷立候

右之趣爲可相達如是御座候以上

九月九日　　田中八郎兵衛

(京都)溝口藏人殿
(熊本)長岡帶刀殿
(外六名略す)

尚々奥村軍記儀奥州御出兵向に被差越置候處彼地より早打ニ而明朝歸着本文一同出張いゑし候事ニ御座候以上

九月九日長岡護美の使者牧平左衛門奥州中村なる我藩本陣にて使命を傳達し將士慰勞の酒肴を與ふ

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月九日

蕃座
遠境出張着即下より連戰苦勞之段別而太儀彌以可抽忠勤旨
餌物頭死
遠境出張着即下より連戰辛勞之段別而太儀彌以右同斷
平士
遠方出張着即下より連戰之段太儀彌以右同斷

右之通從左京亮様御使者牧平左衛門を以御意並御酒肴被下置候事

但御酒肴者此元ニ而取調會計局より買整候也　左之通配當いたし候事

一御酒四斗　宛
一御肴料拾兩

本陣手
大河原手

本行之通荒増之見直を以取計候
尤人數格別之多少ハ無之候也

中村手　横田手　御役所一手　政府會計御物書等　御目附　御横目共　御使番

本陣付物見　歩御使番　御醫師　渇之

右之外大病院に罷越居候面々に者酒肴料として金子ニ而五百宛被下置候事

九月十日我藩中村の本陣を原竈に轉す此日官軍進みて旗卷嶺の賊を破る

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月十日

一本陣原竈村に轉營之事（是迄中村城に在りたる本陣を移ししなり）

今曉初野口小野口兩道より旗卷邊賊追擊候條持場嚴重守衛可有之候事

九月十日　肥後藩長官　御中　　參謀

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

九月十日

夜明ヨリ西方ナル山手旗卷嶺聖リロナル賊擊エ因州長州筑林ノ各藩ニ令シテ進擊セラル各豪場ヲ固守ス朝五時過山上黑烟揚ケ味方炮烟進テ家老山ノ麓ニ到ル

（中略）

夕七時分伊達藤五郎家來二人今泉ニ來ル

九月十一日磐城平藩主安藤信勇奥羽諸藩の同盟に與して遂に平城の陷滅せしを悔い書を長岡護美に致して救解を依頼す

〔子爵長岡家文書〕

一筆啓上仕候秋冷之節御座候得共益御機嫌克被成御座恐悦奉存候扨此度在所表落城仕候段奉對　朝廷深奉恐入候次第奉存候兼々勤王一途ニ相心得天兵御討臨之節は鎮靜開城可仕筈之處元より小藩大國之際ニ挾り不得止事情より右次第ニも陥り殆社稷廢滅今日ニ至り殘念至極奉存候就而は太政官に歎願仕候而已ならす出府之上其鎮將府に茂歎願仕度奉存候得共夏以來病氣罷在不能其儀候ニ付乍遺憾歎願筋之儀委細重役之者に申遺置候得共微力ニ而迚茂行屆兼可申と甚痛心仕候間何卒御舊緣之廉被思召深御憐察被成下平城復領相成候樣御盡力之程伏而奉希候委曲情實雖盡申上候ニ付御繁務中奉恐縮候得共可相成儀ニ御座候ハヽ矢代多門と申者御呼寄御尋之上幾重ニも復古相成候樣奉懇願候右之段奉申上度如此御座候恐惶謹言

九月十一日　　安藤對馬守　信勇（判）

細左京亮樣

尚以時下折角御厭被成候樣奉存候以上

（安藤信勇は磐城平城主にて正月より病を護して江戸大塚の邸に在り奥羽鎮撫使の下向後諸藩同盟して薩長の兵を拒く時に磐城平藩亦之に與す仙臺米澤二藩兵來援して西軍を拒き六月十六日より七月九日に至るまで屢々交戰し勝敗未た決せさりしが同十三日西軍の來攻するや仙米二藩兵遂次道去り僅に牙城を保ちて夜に入る夜半藩の君臣城守の策盡きたるを覺り再擧回復の事を期し相携へて城を去り火を放ち殿舍資仗を焚く藩老公は相馬の封内より伊達氏の邑岩沼に避け藩士皆之に隨ふ云々、平城戊辰私記に據る）

九月十一日仙臺藩老臣石母田但馬等謝罪實行個條書草案を携へて今泉の我藩陣營に至る津田山三郎等之と談判し且つ總督府參謀に内見せしめ其書に添削を加へ歎願書と共に進達すへく諭示して仙臺へ返らしむ

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月十七日

仙臺謝罪降伏之略

此書取廿日之御飛脚ニ東京へ差遣

仙臺藩降伏之端緒ハ前書取之通ニ候處去ル十一日氏家道以同道にて老職石母田但馬今泉陣營に罷出候付津田山三郎應對いたし候處謝罪之實効如何仕候はゝ相立可申哉追而謝罪狀可差出候へ共先封境之兵を解尚其他之稜々草稿を以伺出候付參謀に内見いたさせ候少々添削有之候間引直させ歎願書一同差出候樣申含差返し候處翌十二日罷歸り云々（以下九月十五日に續く）

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

九月十一日

仙臺ニ行キシ（夫七日氏家に同行せしもの）宇和島藩士兩人仙臺人一名今泉ニ來り津田馬淵列應接アリ

右談判ノ都合次第賊壘打拂ノ筈ニ付山砲一門中村城下ヨリ取寄セ臺場ニ据エ付ケ都合貳門トナル

九月十二日

仙臺家老石母田但馬鶯尾同伴シテ今泉ニ來ル宇和島藩士兩名ト仙臺人一名又來ル

右面々御應接ニ付津田馬淵列席セシナラン

九月十二日驛遞規則を布達せらる

（九月十二日辨事よりの召により志垣傳内出頭の節柳原前大納言より渡されたる書付）

驛遞規則

一驛遞之法則者總而驛遞司ニて確定シ府藩縣共法則ヲ守リ遠近諸道一般ニ取締可申事

一驛郷組替之儀ハ驛遞司ニ於テ取調其驛支配之府藩縣ニ達府藩縣ニ於テ請書調印等可申付事

一驛々附屬村々内他支配入雜居候共其驛支配之府藩縣ニ而一手ニ取扱可申事

一驛郷之者ハ訴訟並願之儀ハ其驛支配之府藩縣ニ於而可致處置萬一見込難付節ハ其支配より添簡を以驛遞ノ司ニ可申立事

一驛郷之儀ニ付驛遞司ニ呼立候節ハ其者支配之府藩縣に相掛り呼立可申萬一至急之儀ニて直ニ呼立候節ハ其旨支配に前後ニ相達可申事

一驛之廢置道替等ヲ初往來ニ關係致候事件ハ總而驛遞司に相達取計可申事

附出火出水并道中而異變有之往來ニ差支候節ハ驛々傳馬所取締役より逐一驛遞司に可屆出事

九月　　行政官

九月十二日郷役並に人馬出役等につき心得方を諭達せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

（九月十二日辨事局にて柳原大納言より渡之書付二通の内）

助郷者天下之公課ニ候處私設等を以種々申立候村邑も在之右者奉對天朝恐入候次第ニ候然處領主支配添書相認爲致歎願候向も有之心得違之事ニ候尤雜濟之村々ハ甲乙御取調之上減役除免等可被仰付旨御布告も在之候得共即今一同ニ申立候而ハ御組替之妨礙ニ茂相成自然御法制相立兼諸道一般之雜濟ニ立至り候儀大小緩急之次第深ク相辨假令領分支配

之内難渋之村邑有之候共追而御取調相成候迄他村並之郷役相勤候樣於府藩縣相應之手當致置眼前諸道之難渋相救御用辨致候樣一同承知供々盡力可有之事

助郷組替相濟候分追々宿方支配之府藩縣に御委任可相成候間支配迄に不拘人馬觸當次第に差出シ都而其宿之指揮ヲ受候樣可致郷方支配府藩縣に於而も得其意配下に常々爲申聞不都合無之樣可致候事

九月　　行政官

九月十二日我藩幷に筑前久留米柳河中津の五藩に對し賑恤準備として買收せらるへき米穀を東京へ輸途すへく命せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

今夕六藩公議人御呼出に付志垣傳内罷出候處正親町三條前大納言殿西四辻少將殿を以別紙御書付二通御渡相成於其藩茂兩人數出兵中入費茂不少趣に相聞候共得今度御東幸之御趣意を奉體認選クテ茂來月十日迄之内被　仰付之米穀東京府に相達候樣取計可申旨被　仰渡候に付來月十日迄と申候而之纔之日數に御座候處時雨之時候に差向和船に而之運漕何分丈夫之見込付兼申候間　朝廷に差出置候蒸氣船御下渡奉願候歟外に相應之御船御手當不被　仰付候而之甚無心元心配仕候段申上候處至極尤之申出に候得共蒸氣船之當時奥羽北越等之御軍用に悉被　召仕居迚茂其御手當被　仰付候儀之出來被兼候間何分六藩申合可然盡力いたし候樣乍併右御用向に付極無據譯柄茂候ハヽ少茂無斟酌申出候樣被　仰付候付委細奉畏重役共に相達可申旨一ト通御請申上置候代料之儀者十月中双場平均を以十一月に至被渉下と之儀茂被仰聞候間此段相達申候以上

九月十二日　　内山又助

薮作右衛門殿

今般蒼生御綏撫之爲メ　御東幸被爲遊候に付而者賑恤之備として御廻米被設置度　思食を以別紙之通石數御買上被仰付候間六藩申合速に東京に船路運輸可致候事

但代料之儀者到着之上彼地一ヶ月平均相場を以御下渡に相成候間此段可相心得事

九月　　細川越中守

（別紙）

米貳萬石	肥後藩	同七千石	久留米藩
同壹萬五千石	筑前藩	同五千石	柳川藩
同壹萬石	肥前藩	同五千石	中津藩

右之通　　行政官

九月十二日奥羽追討平潟口總督府より賊兵死屍を屠るへからさる旨を達せらる

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

晴夕刻ゟ夜半迄雨九月十二日

討取候所之賊死體之腹を屠り肉を刻ミ殘酷之振舞或ハ有之趣に相聞以之外之事に候雖賊同しく皇國之赤子右等粗暴之所置無之樣兵隊末々迄可申渡旨御汰沙候事

九月十三日　　各藩江參謀

九月十三日東京行幸來廿日御發輦の旨告示せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

九月十三日

一今夕非藏人口に御呼出ニ付内山方被罷出候處千種中將殿（少カマ、）左之御書付一通（中略）御渡ニ相成候事

東京　行幸御出輦來二十日　御治定之事

九月　行政官

九月十三日東北出征の兵士に防寒の爲め毛布を賜ふ

〔防長回天史第六編中〕

（明治元年後半ノ大勢の内）

十三日東北征討ノ諸兵ノ冬季ニ入ラハ寒苦ニ惱マンコトヲ憐レミ各毛布一著ツヽヲ賜フ行政官達書ニ曰ク

九月十四日達書

東北征討之諸軍勇進長驅已ニ賊巢ニ逼リ捷報日々至リ叡感不斜候然ル處邊陬之地追々寒天ニ赴キ風雪之慘苦ニ可至哉ト深ク被爲痛聖念候ニ付格別ヲ以聊爲防寒毛布一著宛賜之候事

九月　行政官

（我藩兵は十月七日奥州仙臺の陣中にて此の恩賜品を拜受したり）

九月十三日岩倉具視書を長岡護美に致して時事に關する注意を陳す

〔子爵長岡家文書〕

雲翰拜承時下九重御無事奉同賀候臺下御清穆御動止欣慰不斜陳品海碇泊艦脱航之處未タ針路着岸之居處も不詳夫々手當向配置候間御安意可被下候乍然元來尾大之患と而今更詮方無之後患無間斷心頭ニ懸申候就而は堅艦買入之儀御地ニ而も諸賢見込も有之由一段之好工夫折角成就所祈ニ候　御出輦期限も彌來二十日御決ニ而被仰出候左樣御承知可被下候此盛舉事を誤候而は臣等之罪天地容る處無之夜白痛心之至ニ候書外拜時萬縷申殘候也

九月十三日　長岡左京亮　具視　殿

九月十三日先きに東京府下郭内外に於ける諸侯の邸宅に制限を定められたるに對し我藩龍之口濱町白金の三邸を下賜せられんことを請願す尋て其許可を得たり

〔京都幷江戸返達御用狀扣〕

今度大藩共郭内ニ而屋敷一ヶ所宛郭外者拾萬石以上二ヶ所宛改而被下置旨右ニ付若差支等有之候向ハ共旨可申立由御達之趣奉畏候然處當藩龍口屋敷之儀者至而之手狹ニ而差支候付以前者於所々屋敷致所持居候内龍口最寄木挽丁八丁堀ニ而茂兩所有之候得共いつゝ茂小屋敷ニて都合不宜候付右二ヶ所幷共外共相除於濱町川筋一ヶ所龍口添屋敷と相唱致所持來候處此度御達之趣ニ而者濱町邊も郭内ニ相成候付差上候譯ニ茂可有御座候處差寄此節左京亮致出府候付而者龍口屋敷手狹ニ而納り兼候間既戸田丹波守樣御屋敷借用致住居左候而茂相納り不申候付濱町幷白金屋敷ニ茂家來共引分差置候間何分差上候埒ニ至兼申候依之濱町屋敷之儀茂矢張是迄之通龍口添屋敷として此儘被下置候樣奉願候尤郭外ニ而者前條白金屋敷一ヶ所致所持候得共場末ニて不辨利之ヶ所ニ御座候間何卒願之通被仰付被下候樣幾重ニ茂奉冀候此段宜被成御沙汰可被下候以上

九月十三日　肥後中將内　島田次兵衛　肥後中將

（十月六日以付札指令）

龍之口居屋敷濱町添屋敷幷白金下屋敷願之通下賜候旨御沙汰候事

九月十三日舊幕臣杉本鈔次郎等我藩士某に從ひ脱走軍艦引返說諭の爲め出張せんとす此夜勝安房我藩邸に來たり長岡護美に對し德川慶喜宥免のことを談す

〔海舟日誌〕

九月十三日

杉本鈔次郎肥後藩に陪し開陽え可爲使旨談路費五拾兩遣す山田清五郎同道の積

此夜肥後侯え參上寡君御宥免の事に付延事あり其他天下の大勢を論す小拙駿行は暫く見合萬事盡力すへく左無く候ては同侯盡力も難被致旨也

九月十四日去る十二日命せられたる東京廻漕米につき心得の件を達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（九月十三日辨事局より明日公議人に出頭を命せられたるを以て聖十四日松尾彤助非藏人口へ出頭の處千種少將より渡されたる書付）

肥後藩

一大阪府兵庫縣にハ夫々御達相成候事

一東京着之上鎭將府へ可屆出事

尤鎭將府へハ兼而御用達有之候事

右之通相達候事

九月十三日　辨事

御用米廻船之儀ニ付心得方之件々

一御船印之儀ハ未タ御規則御定無之ニ付御用と相記し候

幟可相用事

一御印鑑之儀ハ會計官に可願出事

九月十四日東京に殘留し居たる我藩兵の奥州へ向ひ出發せし旨を軍務官に申報す

〔慶應四年王政日新錄〕

當藩兵隊奥州表出張被仰付候付惣帥米田虎之助始東京府出張仕候段之最前御屆仕置候通ニ而右一手之人數相殘候分も直樣繰出可申處府下物騷之聞ニ而暫相濃居候内猶出張之御沙汰ニ付右人數四百七拾二人去七日八日兩日ニ同所發足手船萬里丸に乘組奥州表に出張仕候由ニ御座候此段御屆申上候樣左京亮申付越候以上

九月十四日

長岡左京亮内

軍務官

前條松宰信濃申聞之通

内山又助

太守樣御名内ハ御役所と認加へ候得へ共左京亮樣ニハ副知事御勤中ニ付軍務官と直當不苦と之儀も申聞候事

九月十四日夜本藩士某と共に開陽艦へ使すへき舊幕臣山田清五郎官兵に捕縛せらる

〔海舟日誌〕

九月十五日

山田清五郎肥後侯の御談に付杉本と共に奥州え可差遣今朝同邸え可參旨達候所昨夜官兵に被取押旨同人父來り告之即刻肥後侯邸え差遣淺井新九郎より轉（順カヤ）末可話旨相示す

九月十五日神祇官知事鷹司輔熙を免し近衛忠熙を其後任とせらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（九月十五日辨官事ゟ池田鵜巖に渡の書付二通の内）

神祇官知事被　免候事

鷹司前右大臣

同官知事被　仰出候事　　近衛新前左大臣

九月　　行政官

九月十五日伊達慶邦の一門伊達將監家老遠藤文七郎石母田但馬等慶邦の嘆願書及ひ實効條項書を携へ我藩陣處に來たりて總督府に傳達を請ふ總督府は其嘆願を納れて命令書を發し且つ提出せし實効條項書に附箋して之を指示す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月十七日

仙臺謝罪降伏之略

（此書取廿日之御飛脚に東京へ差遣の一節）（九月十一日の續き）

同十五日一門伊達將監並家老遠藤文七郎石母田一同罷越歎願書並稜書共差出候付取次總督府に相達候處御達並御差圖等別紙之通に而一々御請申上候へ共十七日御先鋒御繰込丈は内諭調兼候事情有之三日之御猶豫願出候間其分御聞屆に相成諸藩に之御達是又別紙之通ニ候云々

（中略）

臣慶邦恐懼頓首血泣奉嘆願候今般會津御征討之砌名分順逆ヲ誤り於出先家來共抗官軍奉惱　宸襟候段恐懼至極臣子之名分茂不相立先非悔悟今更何共可奉申上樣モ無御座候次第臣乍不肖モ素ヨリ奉抗敵　朝廷候存意ハ毛頭無御座候得共全遠境隔絶之僻土ニ罷在春來天下之事情形勢モ一々承知不仕恐多クモ厚　叡慮之旨モ具ニ不奉伺遂ニ右樣之事件ニ立到り畢竟臣兼而指揮不行屆ヨリ所致ニテ如何ニモ重々奉恐入候次第ニ付此上ハ本城ニ罷在候モ甚奉恐入候間速ニ城外ニ退居謹慎恭順罷在即出張之隊長參謀臣者嚴敷謹慎申付奉仰　朝裁國藩誓天地勤王之外他志無御座候就而者同盟之列藩ニモ早速降伏謝罪爲仕候樣說得盡力罷在候間悔悟謝罪之藩々一同御寛典之御所置被成下候樣冒萬死偏ニ奉嘆願候誠恐誠惶謹言

九月　　藤原慶邦印判

覺

一日光宮樣仙臺城下ニ被爲入仙岳院ニ被遊御滯留候處何樣成上可然哉之事

御付紙

速に御軍門ニ可奉送候事

一舊幕臣共領内ニ立越居候分嚴ニ申談領内爲引拂可申哉若又勝手を以國内ニ住居仕度望候者ハ暴動等無之樣屹度取締差置候事苦カル間敷哉之事

御付紙

共藩ニ留置器械等取上屹度取締追而之御達可相待候事

但器械等難取上場合有之候へは其段可申出速ニ出兵御處置有之候間兼而其心得可在之事

一是迄國事を誤候謀臣とも堅禁錮申付置候處何樣處置仕可然哉之事

御付紙

堅禁錮申付置御達可相待事

一世良修藏殿を暗殺仕候もの其節脫走仕候家來共在之當時共取糾中ニ而罷在候處猶又屹度取糾召捕申上候樣可仕候事

御付紙

不容易大罪のもの速ニ致探索召捕可申出候返滯ニ及候へハ屹度御達も可在之候事

一滅亡之諸大名領内ニ立越居候分御座候處右者御陣門ニ爲罷出謝罪爲申上候樣取計可然哉之事

御付紙

早々御軍門ニ可申出眞ニ悔悟謝罪之上ハ寛大之御達も可有之候事

右ゝ條之通奉伺候様申付越如是ニ御座候　御沙汰奉待候以上

辰九月　　仙臺家臣　石母田但馬　遠藤文七郎

仙臺藩ニ

慶邦降伏謝罪之歎願書御落手ニ相成候上ハ速ニ慶邦父子亘城迄罷出降伏之禮を可盡事

但降伏之上は寛大之御達も可有之候付家中之者共心得違無之様可致候事

一來ル十七日進軍亘城迄御先鋒御繰込ニ相成候間兵隊(彈藥等ヵ)阿武隈川以北ニ早々可引取且市民動搖無之様可申觸候事

一御先鋒亘城ニ着陣之上指揮可致候條器械。等岩沼城ニ取集可置候事

右可相達旨　御沙汰候事

九月　　參謀　仙臺藩ニ

徳川脫走之家來其藩を依頼罷在候由相聞候條其儘留置人員可申出候眞ニ悔悟謝罪之上ハ寛大之御處置も可在之候條動搖不致候様可取締旨御達在之候事

但器械ハ取上可申出候事

九月　　參謀

〔一新錄探索報告〕

〔赤尾九八郎、中山閏五郎報告書抄略〕

慶應四年九月聞取書

一仙臺之事

九月十五日家老二本松郭外迄罷越謝罪申出候事

但實迹之儀ゝ脫走徒致說得可申自然不聞入候ハヽ以兵力打取可申申出候事

右參謀渡邊應接

一是迄專執權之家老幽閉致候事

坂英力　但木土佐(榎賊)　古内右近　眞田喜平太力

一仙臺より薦幕軍艦乘組江本初其外脫走ノ徒說得いたし候處賊返答ニハ土臺今日御施行之趣致承知し候事ニ而今日改而朝廷之御仁恕ニ付伏罪と申儀も出來兼乍併尊藩より御周旋ニ依而之如何様ともいたし可申申出候事

但右之通候處賊共內輪ニ而申事ニハ官軍之事表分ハ左様候得共實以左様無之私江戸ニ進軍之時分到而寛大之御所置も可有之趣ニ而開城恭順ニ罷在候處今日之通ニ而再官軍之術ニ不陷様申候事

一棚倉藩三雲理兵衛去ル十五日ニ仙臺出立此日舊幕說走士方歳藏仙ノ赤隊引卒し大砲を三發轟し福島之方ニ赴途中田沼ト云所ニ而仙之世子行逢世子路を避て通ニ相成其後重臣二人引留ニ參居候事

一故幕脫徒松平太郎江本其外白石合集之大鳥抔寒風澤之港ニ集り居專仙臺より說得ニ及候事

一赤隊呼返城下ニ戻居候事

一輪王寺宮様從白石城仙臺城下仙岳院ニ御移ニ相成居候事(以下九月廿二日の條につゝく)

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

九月十五日

明治元年

夕八時比仙臺一門家老伊達將監家老石母田但馬同遠藤文七郎目附役櫻井某并鶴尾醫師貳人今泉ニ來リ御談判（米田虎之助）アリ夜ニ入テ返ル

同十六日

今日モ伊達將監列今泉ニ來ル參謀業及津田列ト應接アリ

九月十五日本藩政府は戰士慰勞の使者を發すること增兵派遣のこと及ひ藩主上京のことを在東京並に奥州出征の老臣に報す

〔一新錄自筆狀〕

鬼塚嘉太郎片山小源次被差返候ニ付申達候先月十一日於奥州原瀧　此方樣御人數仙臺人數と戰爭死傷茂不少報知之模樣ニ而之大分之苦戰と相見候處敵徒裏崩ニ而卽日盛返し爲有之由虎之助殿ニも前後萬般之御辛勞深體察仕候其後彌進擊之運ひニ有之候由此末益無遺算恩威被並行平夷ニ屬候樣奉祈候奥村軍記以下茂一旦堺發之御都合ニ候處小笠原一學初着府ニ付猶御評議之筋有之暫御見合之處右戰爭ニ付而直樣出張之御沙汰ニ被及候由彼是御配慮致深察候戰死之面々ニも　思召を以御香奠等被下置軍士一銃之　御慰勞ニも此節中村新太郎を被差遣候事ニ御座候將又最前被仰越置候兵隊三百計御注文之方ハ御番頭一隊御鐵炮頭二隊別手組一隊出發被　仰付候筈ニ相決候間成丈急ニ繰出可申候

君上御上京之御供方茂昨今被　仰付御同席ニ而之藪圖書昨日御中老被　仰付直ニ御供を茂被　仰付候尤御船之儀之成丈諸藩之火船御借受其儀整兼候得之異船御雇之筈ニ而長崎ニ御人被差越置候右之段御報旁申達候以上

九月十五日

連名

平野九郎右衛門
木村男夷則吏
有吉市左衛門
有吉將監

尾藤殿　江戸也
田中殿
米田殿　奥州出張也

九月某日本藩林玄助濱武新助奥羽を偵察して該地の事情を報告す

〔一新錄探索報告〕

奥羽雜誌　會津の嶮

若松ゝ北緯三十七度十五分東經凡百三十九度二十分之地ゝして會津郡の東南ニあり此地四郡ニ彌り四圍重山中間嶮平田野開け居民多し東ハ二本松に境し北ゝ米澤に隣り二本松か二道あり下の方ボナリト云山其高。らすと雖嚴石多く草木繁茂其嶮函嶺ニ越たり上の方を中山峠と云其嶮ボナリニ劣るとも木石を道路ニ横。或ハ橋を引顛難所也北方米澤街道檜原峠の嶮あり人馬通行難し西ノ方ゝ津川八十里越門見川の難所あり東南ニ方りて今市口小屋峠の嶮勢至堂の嶮ありとも ニ難路ふり四方の嶮可概知

ボナリ峠及中山峠戰爭之略

八月廿日二本松屯集之長薩土大垣大村佐土原等之官軍二ツニ兵を分チ中山ニ向ふの虛勢を張り中山峠を隔つる二里餘横川熱海と云所ニ於て正午か第二字迄相戰ひボナリに出るが爲ニ青木場迄退き其夜高玉ニ泊し翌廿一日ボナリ街道石筵ニて合兵同廿二日同所進發正面か進しニ敵要地ニ炮臺を築き數ケ所か發炮容易ニ不破其際ニ薩兵木を攀ち岩ニ上り卒然敵の横面を擊つ其火彼ゟ炮藥ニ轉し忽チ破裂し狼狽敗潰も卽其嶮を奪ひ走るを追豬苗代迄長驅し野陣を張て其夜を明せり其日中山口守拒之敵兵より若城に密使を遣り官兵を挾擊せんとも其使誤て官營に投せしゟハ直ニ中山の敵を押翌廿三日未明十六橋の嶮を取るより此橋ハ豬苗代の湖水より越後に流出もる水深ニ架したる石橋也此橋をひけハ官軍ゝ利なく彼ニ利ゟり敵其橋を墜さんとゝて既二三を取るりさると官軍迅速ニ追擊し遂ニ其橋を渡りコワシミヅニ而相

戰ふ此處より城下迄一里半計りにて死骸道路に累々たり此の如く潰兵を追撃して直に城に迫り外郭を抜き本丸に押寄せしに敵之大門を開き態と官兵を入れ銃炮を一時に發し又南門方兵を出して官軍之横面を撃官軍遂に苦戰に渡り死傷不少就中士藩最多し先其日一旦城下に兵を纒り

勢至堂口進入之略

勢至堂口守禦之敵兵同月廿三日敗報を得主を危み大に狼狽し險を棄て城内に通歸を元來同所に之前列之兵間道方進み紀尾二藩之兵本道より進しに敵兵早落云之後に而拒兵一人もなし道路に棄置たる器械等を拾ひ同廿五日無恙若城下に來着せり敵遁歸の節夫卒恐愕し散亂して運送するものなし悉盡て炮器彈藥等盡く水中に投せり其中二百五十筒を沈しを最多しと云

今市口戰爭之略

中津今治人吉の三藩半を殘して日光社を衛り半ハ肥前の兵隊と共に今市驛より進入せしに敵兵小屋峠に而防禦一戰有官軍にも死傷不少其他所々に於て戰爭ありしと格別なる戰爭もなく遂に九月五日若松城下に來着せり尤中津今治人吉三藩之途中に而輜重を奪る肥前之兵之其患なし

越後口戰爭之概略

越後口之只見川を隔て八月十七日方官兵拒ミ官軍攻撃之策を爲せ之敵隨而防禦の計を施し如何に攻れとも不破依て若城圍攻之官軍より分隊し窃に敵之後に廻り途中番兵を殺し遂に後に出て不意を撃しかハ瞬間散亂其河を泝り米澤に向て遁逃せり

彦根柳川之兵九月四日二本松を發し中山峠の通路をひらき其後兵粮彈藥等總而此道より運送し人馬亦往復ス

八月廿三日官軍一旦退て城外北東の門を圍み胸壁を築き無間斷發炮し城兵も又決死の防禦を爲し隙を見てハ城外に突出し十か七八を不損ハ不退如此激戰晝夜不絶中に茂八月廿九日城兵大凡四小隊突出して必死の血戰官軍遂に其半を斃せしが餘ハ城中に遁歸官軍又死傷多し其后猶戰爭不止九月五日城中方再ひ襲來り一激戰にて此戰爭を加え八月廿三日廿九日之三戰最烈し固より城中を擧て決死の兵なれハ敢而挫折せす力を盡して防禦せり官軍方城中を的とし晝夜無別發砲をもともいかなる備をなせるや容易に轉火せす又能消し一時に拔け難ありしさを共寡兵なれハ如何せん城兵次第に おとろへ今之城外にも不出城内頗疲勞の休也固より當今諸道の官軍盡く來着し六千に餘る大兵に而城兵之僅八百人殊に連日の癇兵又城中切迫の實跡もにをハ不日にして必落城もへしと參謀及諸藩士語をり

城中の兵大凡二千人精兵八百人餘春來之傷者五六百人并付屬之看客等也

私共當月十二日若城を發し候處其迄之越後口之參謀不來申右參着之上惣參謀衆議を盡し大擧して城攻有之筈候必近き中に落着之報告可有之候城中ハ君臣一同節に死もるの覺悟と相見辰錦を揮キ從容たる京況云々

九月九日初更官軍之篝火より誤て人家につき折節西風烈く大に漫延し翌日正午漸く鎮火も城下半を燒盡したり此大火の爲に市中動搖甚し此時彼若出て官軍に迫らハ恐くハ官兵不利ならんかと然るに此日薩の營大町通に敵二小隊襲來し彼の斥候固の嚴なるを見て城兵を誘出もの策とおもひしかと大に愕き忽チ城中に引揚たり之疲勞之一徴なり尤大砲隊之火中に有之不絶發丸し銃隊之整列其場を不去と也

城内敵情

長岡之老臣山本帶刀之平生有名の人なりしかと會より日光口の固を被命二百五十人計引卒通行之途中宇都宮の兵にあひしに双方敵なるを知らす宇都宮藩問何をの藩なるや長岡の藩なりと答ふ依而初て敵なるを知り遽に發し三十七人を殺し十三人を捕へ九月九日城に於而其房を斬首せり其房の中に若城方送りし書翰有全く不意を撃を遂に城下迄迫を本城も甚危急もし諸口共に破を四面より敵を受る時之迚も永保かたからん何卒其表の守りを益嚴重に賴入と恐怖を含たる文面なり

是迄文武館に而頻に彈藥製造せしかと此所も燈官軍より放ちし火丸城内の彈藥庫に中り二ヶ所破裂し又城東に洋製の火

藥庫ありしゝ是又肥州藩是を取をり

一城中尚貯金有

一兵糧者乏し玄米を炊て食ふ

一彈藥の用意も殆盡たり

右之條件虜者白狀せり

城中より射出せし大丸肥前本營之前ニ落たるを極もるニ麁ニして不可用品なり

一若松市中ニ金銀の兩座有領内ゟ金を穿江戸より職人を雇ひ貨幣を製したりし其實跡有

一夫官軍の廟算ゑ米仙庄始奥羽藩々を定ゑ會をして孤立ならしめ所謂枝葉を殺ひて本を枯もの策略なりしゝ未彼ノ三藩等不定内早寒來り積雪ニ殆きたり西兵舊風土ニ馴をも然るニ夫の酷寒ニ逢ハ之ゝ爲ニ病を發し甚しきニ至てハ兵士凍て戟を取る不能と云ふ恐をもゝり此く徒の日月を費ハ之の禍ゑ罹る事眼前也されハ事遷延もる而已ならす却而害を釀さんゝ或春を待て戰如きことニ至らハ我ニ利なく彼ニ利あるハ必せり看々其術策ニ陷も遺憾なれハ縱令死傷多とも直ニ會を衝き之たゑ定らハ奥羽平定せん本を絶てハ枝葉隨て枯るゝの壯略ニ勇斷し二本松市集の官兵千六百人の内千人を殺し余六百を以城を拔くと一同決議し白石にゑ不向直ニ二本松より會地を望進發せり然ルニ會亦我枝葉を殺くの策を知り全國の力を北越其他領外のことゑ用ひ我國境を堅守するニ暇あらさりしニ官軍其情實探得て爲もといふニゝゝら も只速ニ成を欲もる處より決意して討入しニ前記の如く不意を擊を手配盡く相違し且彼が所恃の嚴寒いまた不來る前ニ本城ニ迫らを遂ニ難救の勢ニ至りしと云ふ其實跡諸道とも均壁未全備築ゐき地茂築不能或ハ番兵等少なりし等種々ゝりしよゝ參謀等語をり

米澤降伏之略

元來米澤ゑ士氣も振ひ其數も亦多し此藩の擧動ニ依而奥羽の藩々方向を定むる程の勢もゝりと然ルニ今般奥羽會盟の長となりしが土州藩澤本盛也親戚の情を以說得ニ行又高鍋藩ノ臣山公出所坂本潔岩村虎雄兩人とも米藩謝罪の周旋をゝさんが爲ゑ疾より二本松に來り居しが其機會ゝく默止居しニ幸好機會到來此兩人も行き三人ニ而篤と天下の情實及太政官の運ひを明し順逆を諭せし處米藩大ニ悔悟是迄官軍ニ抗せしハ全く藩鄕天下の事情ニ暗く不圖大罪を犯し奉る段實ニ恐惶ニ不絕開城面縛ハ勿論今日之事ゑ只謝罪の外他事無とて一國擧て斷然降伏に決定し九月二日世子自越後惣督ゝ出て降を乞ひ大國筑後市川宮内の兩老九月七日松岡寺と云二本松の寺院ニ而參謀に謝罪申出次て謝罪狀を出したり然るニ米藩一箇の論あり其論ハ元來王師ニ抗せし時奥羽諸藩と會盟せり依て其同盟の藩々茂說得し己を而已ならも盡く降伏の一藩悔悟の上ゑ他の藩々をも說き是迄奉犯大罪の萬分の一なりとも奉償寸刻茂早く兩國平定之上奉安　宸襟下蒼生を救ひ又反正歸順の輩ゑ隨而相應寬恕ニ處らをたしとなり固より官軍よりハ其願許も不許茂なかりしニ其言を不食米藩より直ニ庄内ニ使者を遣りしニ順逆を諭せし處同藩ゟ原田某といふものを遣り其禮ニ答云よふ勿論教諭ニ任せいかゑも謝罪いたもゐく又謝罪ゑいたさむ如何樣御所置有之哉米藩大ニ笑夫君臣之間ニ臣君ゑ罪を犯し其罪を謝もるニさきを期もへき哉と答庄内藩大ニ悟り誓て庄内國中謝罪ニ一定致させんと云ふて歸をり其他藩々に人を遣り說得せしニ一々同心し山形天童最上新庄棚倉等之藩々九月十一日山形ニ會合し降伏謝罪の評議をなし其席ニ米藩を乞ふて加らしむ且桑名小笠原の二侯是又謝罪を二本松の官軍に申出せしニ一旦仙臺に引取其上ニて申出ゐしと參謀ゟ答

福島

一君侯板倉甲斐守ハ官軍二本松を拔し節自ら城を守米澤に遁を善惡とも委子たり

二本松

一七月廿八日城西本宮の戰ニ破を翌廿九日再ひ阿武隈川久住の渡の戰ニ破を凡二時計の間ニ忽落城せり尤君侯ゑ戰之前日既米澤に遁逃せり此二藩ハ初より米ニ同腹ニ而共ニ頻りニ降伏を乞ひ甲斐守ハ九月十三日二本松の軍門ニ降左京大夫ハ二本松の寺院ニ謹慎せり

一初福島に之桑名唐津の君侯各百名餘の近臣を引卒し庄内の兵四小隊仙兵五百人山形等の兵多少並荷駕脱走兵纏り居二本松の官軍と峙立居しか米澤より說得せし後山形等の兵初ニ退き庄内之ニ次其他盡く引揚け脱走兵にも米より說ひて炮器を渡さしめ當時米澤一大隊二本松四小隊福島二小隊監察隊三小隊二本松より行き備前薄田兵右衛門之を監して彼の三藩を役し專ら周旋せしむ尤三藩ハ砲器取揚等なく惣而寛恕を以て處らるゝ趣也

津輕

一津輕南部ゑ初發より同腹ニ而一旦同盟ゑ加はゑとも勤　王之意更ニ絶さりしニ佐竹大敗の時其危急を見て南部忽ち反復し仙庄等の連合兵を援て久保田を襲へり然るニ久保田ハ薩長肥前の官軍ゑゑとも多くハ公卿を衛り其爲ニ戰ひを專ニもること不能殊ニ本藩の兵寡弱ゑゑハ本城殆危かりし其時庄内より津輕に使を遣り共ニ久保田を擊んと促せりされ共一圓不應其使九人迄殺し其首級を九條殿下に献し斷然勤　王を唱り且た庄内にゑ西鄕吉之助五百人を卒ひ海軍ゑ直ニ中服を襲越後路の官軍半を分ち一ハ若城ニ向ひ一ハ其道より直ニ庄内を衝き米藩降伏の後なゑハ彼ニ嚮導をさせ三方挾擊の略なりしか卽今降伏の勢ゑれハ恐くハ其策無用ならんかされとも米藩よりも庄内最難し縱令降伏せもとも國中必二ツニゑゑん然らハ事容易ニ定らんかと云り夫の討庄の兵果用か不用か難圖

久保田

一此藩一旦ゑ甚危かりしか其中奥羽の事情變化し盡く兵隊を引揚しかハ本陣も遂ニ全かりしよし

盛岡

一此藩のみいまた降伏せもされとも何分隔絶の地なれハ事自ら後るゝならん必近日中ニ仙臺に賴りて謝罪致ならんと參謀等語レり

一越後守槃の會兵米澤に逃ゑしハ固より此藩降伏の後なれハ拒て入ゑもを若城にも歸路絶ゑ更ニ行ゑき所なく進退實ニ究り米藩に降伏を乞り米人より降伏ハ脱劔炮器も渡し致もやと云へハ彼一々其言の如くも彼又云實ハ自身共降る而已ゑらも若城に行主人にも說き衆ニも諭し諸共降伏いたし度しと米人より說得ニハ兵隊ハいらも依而隊中ハ盡く兵器を渡し隊長一人を許して城中ニ入しめと米澤より一大隊の兵を出し岩村清十郎監察之ニ隨ひ夫の隊長をつゑて九月十三日若城下に行刻限を定め置評議せしめ若し其期滿る時ハ惣軍攻擊し米藩も官軍の後ニ隨ひ實効を立んと然ゑとも十二日若松發せしことなゑハ其後の事ハ不得知十二八九ハ君臣節ニ死し一城灰燼とならん

一長岡も二本松に降伏を乞ふ更共越後總督に申出ゑしと如是奥羽各藩一時ニ歸順せし上ハ益公明正大を以處し今一層の寛恕を增し賞罰共宜を得彌仁政施さは自ら二國平定疑なからんかと或語レり

九月

林　玄助
滝　武新助

九月十六日本藩宮川小源太書を家鄕の父に贈りて京地の事情を報告す

〔男爵安場家文書〕

今日官脚急飛被差立候ニ付一筆奉啓上候御揃御安泰被遊御座奉恐賀候隨而先生彌御壯健次私共無異相勤居申候間御心被成下候樣奉願上候然者上林手代便より申上候通　朝廷御運ヒ殊更ニ相變候儀ハ無御座追々奉申上候通次第々々ニ今日之勢と相成當月十三日ニ御發表

御東幸日限來二十日被　仰出候寅ノ半刻無遲々參朝可有之候也

九月十三日

右之通御達ニ相成其後日々之御運ヒ諸藩共殊之外打變候人心ニ相成申候

（本朱書）江戸よりゑ參與大久保市藏三條公より御含も有之樣子ニ而十一日ニ京着いたし東京人心次第ニ居り合次第ニ御運ヒ宜ク由ニ而一刻も早々御親臨被爲在度事情ニ而參り彼是符合いたし其上東京も金札振り出し之儀三條公も最早御合點ニ而其思召ニ相成申候此節ゑ東京會計判事長谷川二右衛門より都合宜ク候由ニ而申遣ニ相成申候當局よりゑ此節

百万兩余金子御持越ニ相成候分夫々相整申候其上金札東京ニ而御振出ニ相成申候是も余程之直數ニ而御座候最早會計之方ハ大槩見留メ付申候

一先生愈以御全快之方ニ相成先度申上候後日々御出浮昨十五日御出勤相成申候處岩倉卿を初參與小松初一統御出勤不怪歟ヒ之様子ニ而脇より三岡ハまらぬ面ニ而大ニ嬉しく事ニ而爲有之と下り後噂いたし候

參與小松（本集書）を初別段手厚いたし決而無理之出勤無之様殊之外一統先生を與程重し候様子ニ而爲在之と三岡噂御座候昨日立烏帽子緋タ、レ拜領今日ハ御着用ニ相成候而午ノ刻參朝之御達有之御出勤ニ相成申候

且又一昨日小橋常藏不斗出勤懸ケ途中ニ而行合昨日上京太守様御上京被遊候御都合ニ相運ヒ尤御永詰ニ相成候得ハ若殿様御引變り之事情ニ而罷登只今岩倉家に參り候と噂いたし候誠ニ至極之御運ヒ恐悦々々昨日之打寄御神酒共上ケ申候此上ニ望ミ候得ハ御出輦前ニ御登京被遊候得ハ猶御都合宜クと矢ケ上之御都合を奉祈候情態ニ相成申候ゟし誠ニ々々好キ御都合ニ而御座候左候得之先生も御出勤ニ相成申候間事情等之一々御聽ニ奉達候心得ニ居申候乍恐若殿様御不例茂如何被爲在候哉と夫のミ打寄御氣遣イ奉申上候牧崎も近々出京之様子恐悦々々殿方ニ而も御出京を奉願候

一私儀も先度申上候此節　御東幸御供之儀既ニ被仰付候筈之處私些ト存念も御座候而段々相談いたし相殘り申度咄合相整申候間相殘り申方ニ相成申候　御出輦後者大坂大津方其外所々ニ出懸現實ノ事を習業いたし候存念ニ御座候去ル十三日ニ之御用御座候猶一統段上り被仰付難有仕合奉存候就而之若黨抔召抱衣服等相拵當時却而難濟ものニ相成申候御辭令左之通

會計官營繕司判事申付候事

辰九月

右之通万里小路様御渡ニ相成申候難有仕合奉存候此段奉御吹聽候（月給十兩ヲ、相增申候）惣躰司判事ハ三十兩ニ而御座候處銀一笑可被下候

宮　川　小　源　太

不遠七十五兩ヲ、ニ相成候由ニ御座候左候得ハ大分寛りと御座候御注文無御遠慮被仰越候様奉願候

一會津先度申上候ニ之先月廿九日迄落城と申上候得共廿七日迄三ノ丸迄攻付候由ニ而廿九日ニ之會城下三里程手前より眞黑ニ火ノ手上り候を見受候由報告有之最早落城と申事ニ而御座候間彌以落城之儀ハ今明日ニ報告可有之と日々相待申候官軍ハ八ケ上ニ重り會援兵ハ一人も無之早しゟ遲シ彌落城ニハ無相違事ニ奉存候

一此節御親臨御供之儀悉ク申上度奉存候得共當局日々操り出最早同役兩人ニ相成申候間彼是間繕も出來兼申候荒增因州公御跡御供立（餌出輦之聖日）秋月右京亮御供加藤能登守同様共他段々御座候得共無寸暇調出來兼惣御人數寸斗相分不申候諸藩より兵も與程操出しニ相成申候只今役間ニ而相認何分出來先此段迄奉申上度如斯御座候以上

九月十六日

宮　川　小　源　太

御父上様

尊下

尙々時下御自愛第一奉祈上候安場ニ之江口より一ト通仕出候筈候様今朝咄合いたし出勤仕大方仕出爲申と奉存候安場家初いつ方ニも宜ク奉願候

一極内々申上候米國政府日本六人彼ノ方海軍所に召出候而宜ク有之候間日本政府より命を受候様有之度由米國より及懸合申候尤米國ニ之日本書生多人數參り候内別段人物六人引受候由人名も米より申越候第一横井兄弟薩より參り居候兩人越より八木八十八也勝先生之嫡子ハ大政官より御申付候筈ニ御座候都合六人大政官より被仰付候筈ニ相成申候昨日御決議之由其内御國に御問合之上無相違處ニ而被仰付ものと相考申候是ハ極々内々也安場迄ニ而外ニ之御洩し不被遊様奉願上候又三之都合次第ニ世話いたし申候間決而々々急キ不申候様御申聞可被下候何も大隙なしニ而御母様御初御無禮奉申上候又々以上

又々再見出來兼申候以上

明治元年

九月十七日神祇官を野宮家より元學習院へ移轉せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

九月十七日

一辨事ゟ御呼出ニ付内山方被罷出候處左之御書付一通立花宮内を以御渡ニ相成候事

神祇官是迄野宮家ヲ被用候處今十七日ヨリ元學習院へ被引移候仍爲心得相達候事

九月　　行政官

御使番

九月十七日奥羽追討平潟口總督府は仙臺の藩情を尋問する爲め伊達左京を中村城に召喚す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

別紙四通早々回達留ゟ當局へ返却可有之候事

九月十七日

長州藩　肥後藩

筑前藩　筑後藩

長官中

慶邦先非悔悟御軍門降伏歎願書御落手ニ相成御先鋒御繰込ニ可相成之處其藩激徒不知方向尚猖獗相企候趣ニ相聞以之外之事ニ候依之御尋之儀も有之候間左京儀早々輕隊中村城ニ罷出逐一國情及言上候樣可相達旨　御沙汰候事

但御先鋒ハ廿日中村御發軍亙楯迄御繰込ニ相成候儀者同十六日御達之通ニ有之候條此段可相心得事

九月

（編者曰、本書但書に先鋒ハ廿日中村城御發軍云々同十六日御達之通ニ有之とあれとも原書日記の内には何等記載なし然るに一新錄皇令に廿日亘迄御進軍云々の達あり尤も日付は九月十七日とありて此の十六日御達とあると一日の差あれとも事實は此の達文ならんかと思はるゝ故に左に付記す）

〔一新錄皇令〕

一　藝州藩　不殘

筑後藩　不殘

筑前藩　不殘

因州藩　不殘

伊州藩　不殘

大洲藩　不殘

長州藩　二中隊

館林藩　不殘

肥後藩　一中隊

右來ル廿日曉六字城外大手前ニ相揃整列七字發陣亙迄御進軍相成候段御達有之候事

但廿日坂本泊陣之事

一　伊州藩　殘人數

相馬藩　百人

右旗卷

相馬藩　五拾人

右椎木

相馬藩　五拾人

右天明

御親兵

右黑木　肥後藩　一小隊

相馬藩　百人

右原藪　長州藩　一小隊

右西山

九月十七日仙臺藩既に降ると雖も德川脱走徒輩の擧動測るへからさるを以て各守備を嚴にすへき旨の達あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱施マテ日記、一新錄皇令〕

（九月十七日總督府參謀使番より我藩外三藩長官へ廻達書付四通の内）

伊達慶邦先非悔悟御陣門降伏謝罪之歎願書差出候處御落手ニ相成候條可被得其意候仙臺藩者雖致歸降德川脱走之者未タ彼藩處置中ニ付何時暴動茂難計候間無忘各藩持口可有嚴戒旨御達有之候事

九月十七日　　參謀

九月十七日奥羽追討平潟口總督府は來廿日より先鋒仙臺城に進入すへきを以て各藩兵隊粗暴の行爲あるへからさる旨を戒飭す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記、一新錄皇令〕

（九月十七日總督府使番より我藩外三藩長官へ廻達四通の内）

仙藩降伏致候ニ付來ル廿日より御先鋒御繰込ニ相成候ニ付各藩兵隊軍列嚴肅ニ繰込可申且新タニ降伏之國情市民之狐疑茂難計ニ付各軍嚴重ニ取構粗暴之振舞無之　御仁風ヲ感戴いたし候樣末々迄可心懸旨　御達有之候事

九月十七日　　參謀

九月十七日本藩當九月分の軍資金を上納す

〔京都并江戸返達御用狀扣、時勢雜錄〕

陸軍御局ニ

先般被仰出候軍資金當九月上納分越中守領知高之割を以左之通相納申候尤末家細川若狭守細川豐前守儀者宗家領知内分之儀ニ付別段上納不仕右之内ニ孕居申候然處領内土藏床地並永荒地等之高辻者除之上納可仕處右石高爰許ニ分兼候付國許ニ申遣相分候上當五月並此節分共差引上納可仕段先度上納之節申上置候處今以相分不申候付此節迄ハ無滅方相納申候

一領知高五拾四萬石　　此節上納分

此軍資金壹萬六千貳百兩　　高三万五千石

右三分之一　　細川若狭守分

五千四百兩

内

三百五拾兩

三百兩　高三万石
右之通御座候以上　細川豐前守分
九月十七日　細川越中守内　内山又助

九月十八日僧侶の復飾取締に關し布達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（今十八日辨事より兩度御呼出ニ付松尾罷出候處石山三位殿ゟ神佛混淆御書付壹通云々御渡相成候事）

神佛混淆不致樣先達而御布令有之候へ共破佛之御趣意ニハ決而無之處僧分ニ於而妄ニ復飾之儀願出候者往々有之不謂事ニ候若も他ニ技藝有之國家ニ益する儀ニ而還俗致度事ニ候得之其能御取調之上御聞屆も可有之候得共佛門ニ而斎髪致し候儀ハ不相成候間心得違無之樣御沙汰候事

九月　行政官

九月十八日鎮將府は東京行幸の道筋を定め之を大總督府に通達す

〔一新錄皇令〕

東京ニ　行幸　御道筋

品川宿ゟ大通新橋京橋南傳馬町三丁目左ニ疊町五郎兵衛町鍛治橋御門馬場先御門西城大手御門

右之通御治定相成候條爲御心得御達申入候也

九月十八日　鎮將府

大總督府　辨事

下參謀御中

九月十八日本藩奉行淺井新九郎は勝安房の委囑を受け蟠龍艦の清水港寄泊及ひ脫走者歸府等不取締の旨を大總督府へ陳辯す

〔海舟日誌〕

九月十七日

駿府より來翰蟠龍艦說得の所十一日朝出帆咸臨は帆柱折れ去る不能乘組も承伏と云蟠龍え遣はせし我か書翰不達諸官困衰して是を止むる不能是のみならす百事皆是れに類す我輩盡力なす時は側より壞るまた如何せむ大抵駿地の諸官小成に安し舊弊に馴れて身を致す者なし

十八日

肥後淺井新九郎を以て蟠龍之轉末並脫走の者潛に歸府甚不行屆段申延　下略す）

九月十八日奥羽追討平潟口總督府は仙臺城へ進軍する部署を定めて令達す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記、一新錄皇令〕

明後廿日行軍之次第書

先鋒斥候隊　肥後藩

中軍　筑後藩　因州藩

長州藩　磯部鹿之進
館林藩　澤　四兵衛
陸州藩　西　武八郎
鈴木重太郎

後軍

伊州藩
筑前藩　大州藩　藝州藩

右之通御達有之候事

九月　參謀

肥後藩　筑後藩
因州藩　長州藩
館林藩　長官中

一同日出張御使番

〔佐田家記録〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

九月十八日

仙臺藩伊達侯伏罪ニ就テ明日ヨリ各藩持場引揚中村城下エ宿陣スヘキ令アリ

總督府ノ先鋒トシテ明後二十日夜明參謀初メ各藩兵ヲ半分シ中村城大手前ニ揃六字發軍同夜亘城泊陣シ仙臺エ進軍殘り兵隊ハ中村城近邊ヲ固メ御當手ハ原釜ニ一小隊宿陣シ二小隊ハ明日先鋒ノ斥候ニ命セラル

九月十八日　在東京本藩機局吏畑尾源藏藩邸内の情況及ひ奥羽の戰況を在藩同僚に報告す

〔一新錄探索報告〕

慶應四年九月十八日東京發同廿五日着機局御物書畑尾源藏下廻（抄略）

一荒尾素兵衛轟木武兵衛去ル十三日着持越之御用筋等承り申候處笠大監列被差越候先之より懸ケ之由右二士之議論も一ト通り承り候處邸内政府之議と一轍大慶仕候古金之光りハ今日ニ至而國家之爲ニ鄙キ當時流行之太政官派とハ大ニ相違仕候事ニ御座候然ニ太政官とさへ申候得之惡敷事ハ受持之樣ニ茂有之候得共又可稱事件無之とも難被申共一を揚申候得ハ奥羽北越其他所々鎭撫等ニ被差出候兵隊等御取扱之儀之舊幕よりハ遙ニ宜敷月給畫遣兵食玉藥迄茂御世話ニ相成白川口ニ之軍費金月々四五萬兩宛遣しニ相成且諸藩費用差支候得之共筋さへ相立候時ハ何萬たり共御振替且被下方茂有之旣ニ御國茂五千兩拜借相濟追々とも高增ニ而ハ拜借相濟候由是等ハ實ニ感心仕候諸侯ニ土地人民を被與置候上之右躰之御渡方等無之共隨分可宜處斯之ことく御手厚之御取扱ハ舊幕之不及所併金穀之出所甚不審と奉存候

一會津落城君侯父子行衛不相分との趣乍不審出先ゟ注進之趣を以先便錄呈仕置候通ニ候處別紙鎌田貞之允探索書之通候得之中々落城之存懸茂無之是社實ニ會津持前之氣性と感心仕候右落城之注進ハ間違之趣別紙北野子來翰之通ニ而是亦太政官派之卒發ゟ出候儀之一層歎息を增申候當時會津領海にフルイセン來舶戰爭之樣子及見聞是迄海外ニ而茂追々戰爭且他之戰ひ茂度々見聞候得共如會津上下一致男女共ニ決死防戰決而無比類如斯之人々を見殺しニスルハ何分難忍願クハ應援仕度と感心之餘り申越候處會ゟハ弊藩事日本之兵を以從　朝廷勦滅被　仰付候付假令應援を受幸ニ打勝候共再ひ雲霧を披て天日を仰く期ハ萬々無之候ニ付責而會藩壹人も不殘城を枕ニ討死ハたし於黃泉下　先帝ニ謝申より外無之と覺悟ハたし居候ニ付折角之御胸志を及御斷候儀之心外之至ニ御座候得共應援被下度との一言則應援を受爲申と少茂相替り不申深く拜謝ハたし候と申送りとふ〳〵應援之相斷候由其志之殊勝成事フルイセン茂大ニ感し艦中不殘落涙ハたし爲申趣ニ承申候右之通危急之秋ニ至而茂夷人之援兵を相斷　皇國之體を不穢國ハ先容易ニ之有之間敷東國第一之强藩奥羽之元氣ハ會津ニ集居可申相見申候卽今醜夷覬覦之折柄奥羽之元氣を截殲さゞ候ハヽ奥羽丈ハ　皇國之衰弱ニ至候譯茂有之且民ニ父母たる之　聖天子より被遊　御覽候ハヽ等敷赤子ニ付可罪所ハ罪し外侮を被爲防候儀社肝要之事と奉存候今日迄之御運ひを以見る時之勦滅ならさゞハ不止之勢ニ相見左候得之玉石共ニ燒ゞ候ハ必然之事ニて有之茂歎息仕候併閨國女子ニ至迄死を究居候得ハ中々容易ニ落城ハ仕間敷最早霜雪降積り朝五ツ半比迄ハ霧深く咫尺

も不辨より當月下旬ニ茂相成候ハヽ、寒威洞膚戰爭も被行間敷自然と休兵ニ相成可申歟然時ハ雪解之後ならてハ取懸り茂六ヶ敷其中ニゑ又如何成變も難計一刻茂早く先日差上ニ相成候御建白之通御施行ニ相成不申候而ハ天下瓦解ニ至可申も難量恐惶仕候相馬口之方ハ廿日後戰爭無之追々仙臺より使節參り謝罪之談判有之由未タ結局ニ茂至り不申樣子ニ候得共先日米澤降伏後同藩老臣甘粕備後同盟之藩々に周旋一同謝罪之實効を顯し可申と力を極而相働居候由仙臺も其同盟之事故内外より謝罪之運ひを付ケ候ニ付不遠埼付可申と被下候唯今承候得ハ去ル九月十日若松城下大戰爭九日ニゑ會澤大敗續十日ニゑ盛返し官軍ハ一人も城下に足を留候儀難成樣追拂爲申由未タ確報ハ無之候得共相流有之間敷相聞申候

一兩府之御運ひ筋之儀ハ諸藩より之建白等出候得ゑ其善成ものハ善とする之樣子ニゑ御座候得共布施之一條ニ至而甚鈍ク遺憾之次第ニ御座候恐クハ郭公之古轍ニ共ハ至り不申哉と愚考仕候

一笠大監並同行之内松崎傳助林新九郎岡松辰吾小山玄龍古庄嘉門御用相濟今日出立凌艦乘組ニ而志州鳥羽より上陸京都に中二日程之滯ニ而下國之筈ニ御座候植野虎平太福田大助ハ内意之趣ニ付濱府被仰付段昨日御達ニ相成申候

九月十八日

源　藏

機密間

御物書中樣

九月十八日舊幕士脅我主水舊領安堵願提出につき我藩島田次兵衛之に添申す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

東京府に

曾我主水本祿如舊下賜候樣願之儀此節差上候由右者從前々至于今懇親之家筋御座候間當藩に茂歎願之趣申出有之兼而勤王之志厚今般御一新被仰出候付而者御趣意拘深奉感戴彌以致奮發病中押而當春栗地駿州に罷越於同所大總督宮樣御初に罷出奉伺御機嫌其後勅使平松樣御通行之節茂人數差出御警衛並巡邏茂相勤且領分要地固場其他巡邏を茂被仰付候付而者直樣出兵勤上仕此度被仰出候趣ニよつてハ出府罷在朝命遵奉之誠實聊相違無御座既當春以來ハ彼是前條之通實効茂有之就而者追々御沙汰之筋茂可被爲在候得共當時之處ニ而者家來扶助者勿論一家難立行御座候間何卒願之通本領安堵被仰付御代地並舊知行所如元下賜候樣猶當家茂奉願候宜被成御沙汰可被下候此段申上候樣左京亮申付候以上

長岡左京亮内　　島田次兵衛

〔編者曰、曾我主水の采地は駿河遠江美濃相模四個國に跨居せるを先に駿河國一圓村替を命せられて主水も駿河の領地を公收せられたるに依りて其替地と舊領安堵とを情願したるものなり〕

九月十八日官兵舊幕脫艦を追逐し清水港に於て其一隻咸臨丸を捕拿す

〔海舟日誌〕

廿日　去る十八日清水港に而咸臨船ゑ富士飛龍其他一隻にて發炮乘組は上陸懸中ゆへ應炮無之官兵船ゑ乘込旨長谷川歸り申聞る

廿一日　駿州より早追にて御目付來る咸臨船を取卷たる官兵肥前土佐柳川藩士甚手荒く風聞にては春山鉾藏及傷に及ひ切害に逢ふ經雄殿目付等散々被罵既に害に逢はんとするの勢也と是去月以來脫艦御屆も遲々亦修覆に取掛等其他種々不都合を御咎め有之と云嗚呼諸役因循身を不致して私情(警カヤ)に苦我輩百方を言ふといへ共内破如斯また如何せむ

九月十九日本藩主詔邦軍制改革の實績遲々として擧らざるを以て速に軍備を充實せしむへしとの旨を命令す

〔明治元年機密間日記〕

九月十九日

今般御軍制調被仰付候御趣意書取

御軍制之儀者御家之御先蹤を初甲越二家之遺法を御斟酌有之御組立被置候處時勢轉換砲戰專一之今日ニ到舊制之通ニ而者實戰ニ臨必障礙之筋可有之仮令甲越二將をして令存在候共取捨損益可有之候得ゝ徒ニ舊制ニ膠柱いたし候時躰ニ無之處より當夏既ニ御變革被仰付候得共未タ結局ニ至不申此儘可相濟樣茂無之然處間ニ者古法を固執し洋式を惡ム事甚敷柔ゝ良法利事たり共一切不取用習弊も有之事ニ付右躰之習弊者悉ク除去可取者取可捨者捨紀律節制練兵之道迄完備いたし臨機接戰之長技を施し候社甲越之兵法活動いたし其深意ニ茂叶可申候條片時茂速ニ御勝算之道相立候樣和制ゝ茂洋式ゝ茂不致拘泥御國一定之御軍制を組立吏卒之員數粮餉陣營等至迄精細ニ取調不處之御備充實いたし候樣可申談旨被仰出候事

九月十九日奥州出征の我藩兵一部隊の守備を原竈に殘して中村城下に旋る

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

九月十九日

早朝臺場ヨリ山砲貳門附屬品共ニ取片付朝飯後今泉引揚正午比中村城下同慶寺ニ着ス

是保君ハ正午原釜御立夕八半時分同慶寺御着陣中井組（米田手兵）等銃隊ハ原釜ニ宿陣中村藩兵モ百人程同所ニ陣ス

薩州兵二小隊一昨日中村ニ着

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月十九日

一原竈に本陣手之先手迄宿陣いたし今泉并同所共都而中村城下に引揚候事

仙臺謝罪降伏之略（抄略）

此書取廿日之御飛脚ニ東京へ差遣

仙臺藩降伏之端緒ハ前書取之通ニ候處去ル十一日氏家道以同道ニ而老職石母田但馬今泉陣營に罷出候付津田山三郎應對いたし候處實謝罪之効如何仕候ハヽ相立可申哉追而謝罪狀可差出候へ共先封境之兵を解尚其他之稜々草稿を以伺出候付參謀に内見いたさせ候處少々添削有之候間引直させ歎願書一同差出候樣申含差返し候處翌十二日罷歸り同十五日一門伊達將監并家老遠藤文七郎石母田一同罷越歎願書并稜書共差出候付取次惣督府に相達候處御達并御差圖等別紙之通ニ而一々御請申上候へ共十七日御先鋒御繰込丈ハ内諭調兼候事情有之三日之御猶豫願出候間其分御聞屆ニ相成諸藩に之御達是又別紙之通ニ候依之大河原次郎九郎中村左助横田治部右衛門三手繰出し本陣先手一小隊原竈に宿陣いたし其餘ハ都而中村に引揚申筈候事

但坂英力但木土佐田邊蘭吉大槻平治玉虫左太夫一條十郎若生文十郎眞田喜平太等之姦黨此迄執政ニ而候處今般悉ク被廢伊達將監伊達藤五郎遠藤文七郎後藤孫兵衛石母田但馬大條孫三郎（此孫三郎ハ坂本之稱持ニ而候處王師ニ弓ひく不忍其稱を棄而仙臺へ閉居いたし居候人也）等之正黨被擢用謝罪等專盡力仕居申候事（本文中別紙とあるは十五日仙臺の謝罪狀及び實效稜書十七日參謀よりの達文等にて既に登載せり）

九月十九日松平容保の臣手代木直右衛門秋月悌次郎等若松城を出て二本松の官軍土州の本陣に至り降伏の意を陳す

〔一新錄探索報告〕

若松落城聞取書（節略）

一會城降伏と申候儀ハ決而有之間敷と寄手官軍より茂見込居本丸迄責寄せ八月之末より九月末迄凡三十日計持こたへ遂ニ四方之口々破レ手强ク烈戰茂幾度いたし實ニ官軍茂無理ニ城を拔キ候而ゝ死傷茂不少可有之責メ兼居候程ニ有之候處先月十八九日比より米軍門に會之手白木直右衛門野口九郎太夫秋月悌次郎三人城中より忍ひ出降伏之情實申向候得共米藩より茂未タ我藩すら如何相成可申茂難計況他之降伏等之周旋ハ一切斷申切候處不怪右三人當惑之躰ニ而有之左

候ハヽ、何とそ尊藩兵隊之内に我三人を御加へ二本松釜謀手元迄連レ越呉候様精々歎願仕候間米より同心いたし二本松迄護送仕候由（以下翌廿日の條に續く）

〔谷干城遺稿上〕

東征私記　第五章　白河着より高知凱旋に至る（抄略）

同十九日未明米藩出張の重役倉崎七左衛門我本營に來り云昨夜會藩手白木直右衛門秋月悌次郎桃澤彦次三人して鹽川邊に屯集の幣藩人數に依頼し開城降伏の儀官軍へ取持呉度申に參り候得共最初幣藩降伏の議決する時已に使者を以て彼の藩へ同樣降伏の儀促し候得共更に承引不致故に不得已敵と相成未た何等の實功も相立て不申反て彼樣の周旋致し候ては官軍の御嫌疑を蒙るも無計深く斷り候得共彼等只管頼みに付き然れは只其趣きを參謀中へ可申入旨爲申聞伊地知へ參り對面を願ひ候所用向なれは土州板垣へ參るへしとて對面致されす故罷出候なり右三人の者縛して同行せり（原註三人皆帶刀は取上け深き笠をかぶり我本營の蒼下に立てらせり實に可憐姿なり不取敢縛を解か令めたり）則ち我總督委細承り先つ三人を米澤宿陣の閑所に置か令め嚴に警衛せしむ則參謀中衆議あり（原註時に參謀至て多く白河口勢至堂より）する者は多久與兵衛米澤口よりする者は深尾三九郎薩の村田勇衛門越後口よりする者は吉井幸助、山縣小助、保成口即ち伊地知、板垣なり而て伊地知板垣尤事に關す肥後父子降伏手順并に始終評議多く右兩參謀の思慮に出つると云）遂に其の信僞を不問降伏の手順爲申聞皆城に返すに決す

九月某日大原少將辨官事を命せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

辨官事に御呼出ニ付河邊鐵之助罷出候處左之御書付壹通北大路外記を以御渡相成候事

大原少將

辨官事被　仰出候事

九月　　行政官

（此書、王政日新錄中九月十九日と全二十日との中間に記載して何日御渡の書なるか不明なり故に此に登載す）

九月廿日主上御發輦東幸の途に就かせ給ふ尋て神祇官は伊勢神宮の怪異を以て行幸を諫止し奉らむとして遂に果さす

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

九月廿一日藪より　十月九日着

雇飛脚差立致啓上候、、、

一主上關東爲　御親臨昨廿日卯刻之御供揃ニ而畫時比御出輦無御滯被爲濟候

一右　御出輦ニ付而之御達書寫一通差上申候右ニ付而者御在國之御方々樣御勤品茂可有之哉と其筋ニ奉伺候處其儀ニ不及旨御差圖ニ相成申候（御達書寫は九月十八日の條に掲けたれは此には略す）

〔一新錄探索報告〕

明治元年九月也

一伊勢神職山田大路陸奥より樹下石見守師岡善齋椎田直助三人宛之書狀九月十八日付ニ而同廿日未明ニ着石見守致披見候處去ル十八日曉新嘗祭之神宮之鳥居無風ニ倒無容易時變ニ付急飛を以申上ルとの事ニ候間直樣岩倉卿ニ石見持參懸御目候處御一覽之上此書狀之自身ニ呉候樣又此事決而脇々に咄間敷との御噂ニ而直樣御懷中ニ相成候由然處石見守之不容易事件ニ付大ニ驚最前其以前懇意之向に相話候事茂段々有之候間此事愛宕殿御聞込ニ相成神祇官御懸之事故早打を以稲羽五位を御招ニ而右之始末御話ニ相成候得之同人茂伊勢之國之知事橋本卿より御屆書今曉到來之由ニ而致持參

此事大事件ニ而之無御座時節到來之事候間　御慎ヶ申儀ニも不及今日　御出輦ニ付彼是と人心致動揺候様ニとも相成候而之不相濟候間私押置知事近衛卿ニ御知せ不申上との申分ニ候間彼是御議論之上漸近衛公ニも御達ニ相成候運ニ至申候由此事廿一日曉七時分迄ニ及候由

一大原卿之樹下石見守に帛面之様子御聞ニ相成候而より直ニ御踏出ニ而　御跡に隨ひ被成候處最早蹶上ヶ　御休所より鳳輦出候由ニ付此所ニ而供之者を殘而大津迄御出ニ相成岩倉卿中山卿にも右之始末申上候而還　幸御慎可然と御忠言ニ而兩卿も一旦ハ御聞込ニ茂相成候御模様之處參與邊より之論ニ而歟御採用無之のミならす　奏聞ニ茂至發候由御座候間廿一日大津　御出輦御見送ニ而書比御歸洛ニ相成申候由

一廿一日近衛殿ニ而御打寄福羽申上候之祭主藤波殿より御屆ニ不相成候間表向奏　聞此卿御歸京之上申上次第ニ寄可申との事ニ御座候由然ニ諸卿ハ片時茂難差置事件ニ付御内　奏可申上ニ而廿一日暮より松尾伯耆と申人被差立候而石部宿ニ而同人岩倉卿に申上候處其儀之奏　聞ニ難及此方聞候神祇官中沸騰ニ及候ハヽ知事より取鎮ニ相成候様ニと可申入との御事また中山殿ニも此儀別段申上候ニ不及早々歸郷候様との御事ニ而廿二日夕刻罷歸候由

一藤波殿ハ　御臨幸御伺茂無御座却而大和路を御通ニ相成候而廿二日夕刻歸京ニ相成候ニ付早々近衛殿より御呼參殿ニ而申上候趣之神宮鳥居倒レ候儀之朽而之事ニ付異變と申事ニ茂無御座候故別段不申上候夫々勢州之知事不案内故彼是手數ニ相成候事との申上振ニ而御座候其外段々之ケ條茂御尋ニ相成候得之一向ニ承知不仕との事計ニ而御座候間段々表向奏　聞と申儀ニも至發諸卿方無爲事閉塞之甚敷候只々恐入ニ相成候事計之由ニ御座候段々ケ條と申候者　神路山鳴動之由　御供調進之鍋ゐれ候由　鶏死候由　御即位ニ付奉幣讀上ケ之時社人即死との儀内々相聞候事ニ御座候右村井嘉門より之寫

九月廿日東京御駐蹕中外交事務は東京にて處理すへき旨を達せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

九月廿日辨事方御呼出　柳原大納言殿方御渡之　御書付寫

各國公使横濱在留ニ付今般御東幸中外國官之儀知事始諸役總而供奉被仰付外國事務御取扱ニ相成候條行在中其筋者一切東京に可伺出事

九月　　行政官

九月廿日官軍中村城を發し山下（陸前國亘理郡）に至りて宿す

〔御國往來狀扣〕

（九月廿九日米田虎之助より在東京尾藤金左衛門等へ通牒抄略）

一去ル廿日御繰出之御先鋒御人數同日山下に宿陣

九月廿日

未明ヨリ各藩ノ兵隊中村城大手前ニ整列六時過中村左助横田治部右衛門大河原次郎九郎組々引卒シテ繰出ス仙臺家老遠藤文七郎家來白鉢卷陣羽織ニテ先頭ニ撫導ス後チ半時程經テ各藩ノ大砲數門祝砲トシテ連發シ終テ銃隊繰出ス英式蘭式等各異ナレトモ隊列嚴肅感ニ堪ヘタリ

御本陣トセラル同慶寺（中村城下に在り）エハ仙臺侯世子來着ノ筈ニ付市中町家エ御轉營（本藩總帥米田虎之助の轉陣せしなり）

〔討仙偏誠（佐田家文書）〕

官軍進んて仙臺ニ入る事（節略）

將監（伊達）は間道より仙臺ゑ歸り國主慶邦ニ見へ事の子細を審ゑ告けゑハ慶邦大ニ悅ひ汝等が働を以て我社稷を全ふせんと欲するゑ激徒共汝等を害せんことを計りける條奇怪ふり且官軍亘迄進ミ來るとふらハ彼等を制せすんハ一大事差

大枝か館ハ勤地ニアラズ坂本ナリ

起らん阿武隈川以南ニも兵隊壹人も滞ること成り難しと怒氣勃然として布告をなハ流石の激徒共ふなとも國主の命ニ背き難く處々ニ隱なる居たる者共忍ひ〳〵仙臺差て引歸を市井村落の老若男女是を見て我肥の藝を以て戰爭止ミ再ひ平穩ニ成りぬと擊肩を開き喜ひける人心斯の如くなりけなハ爭ふ官軍の勝利ふあらんや所謂地の利ハ人の和ニ如ふず と前車の覆轍夫なを戒むゐしかくて大枝孫三郎ふ新地の城伊達藤五郎ふ瓦の城をハ　惣督卿の本陣と定メ何なも居城を芟除して饗應の手配り專ら也此由官軍ニ聞へけなハさらハ先鋒繰出さんと九月廿日の早天ニ祝砲數聲打放てハ數萬の兵隊堂々として押し出を先ツ一番ニも我肥の兵隊斥候隊として出けなハ筑後因州長州館林薩州の五藩ハ中軍と成て進發を伊州筑州大洲藝州の四藩ハ後軍と成り各藩列を亂さず繰り出す朝使磯部鹿之進澤村四兵衛西武兵衛鈴木熊太郎惣軍を督して出ニけり去なハ數里の間人影連綿して先手ハ新地ニ着ぬと思へとも後陣未た繰出さず皆是虎豹虎賁の士ニして其多ねこと斯の如く勇々敷こそハ見へ〳〵けり既ニ其日の夕刻ニ諸軍山下驛ニ至りけなハ見物ニ出たる老若相云て曰くあな夥の官軍やふ假令奥羽の廣きともかゝる人數ハよをゐらじと道の左右ニ拜謁を

九月廿日山下にて明日の進軍部署等に關する命令あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

先手ニ御達

明廿一日進軍刻限今日之通當楯門外ニ整列御使番指揮次第進軍之事

但肥後兵隊ハ當楯内整列ニ不及御使番指揮次第今日之通ニ候事

筑後兵隊ハ宿陣近邊往還ニ整列致居中軍先鋒今日之通爲べく候事

一各隊之輜重ハ中軍之後ニ置可申事

一明日瓦楯着陣之節ハ格外ニ整列致し號令降候上各隊宿陣可致事

一今晩番兵ハ其前角ニ宿陣兵隊一方引受之事

但御使番可受指揮事

一市中宿陣之兵隊巡邏引受之事

一今晩より合言葉

松ト問　風ト答

右之通可相心得事

九月廿日

肥後藩　筑後藩　因州藩

長官中

九月廿日本藩原籠役に負傷せし松本傳十郎外二人死亡せし旨を大總督府に中告す

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

去月十一日奥州原籠表戰爭之節　當藩人數深手を負候内左之通追々に相果申候

物頭格嚮導　松本傳十郎

中村左助隊　相賀彈助

井原古久兵衛

右之段同所出張之者より申越候間御屆申候以上

明治元年

九月廿日

（江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記に據るに松本は九月九日中村大病院にて死し相賀は九月八日同病院にて死し井原も亦同病院にて九月十二日に死したるものなり）

長岡左京亮内　島田次兵衛

九月廿日若松城より再ひ使者を出し土州本陣に至り降伏の意を陳せしむ

〔一新錄探索報告〕

若松落城聞取書（抄略）

一右手白木列通出候而歸城茂いたし不申事故定而生捕れたる歟又之首を打レ候歟城中より茂不一方懸念之餘り手方ニツキ候譯と相見既ニ土州人數之内奴僕城下へ野菜を採り（ニ落カ）出居候者を召捕へ城中ニ連レ越候間奴僕之定而殺され可申と恐レ居候處却而於城中馳走等懇ニ有之外之儀ニ而も無之此間より城中より重臣三人降伏之爲メ遣出二本松迄罷出居候得共未タ今日迄歸城ニ茂及不申如何成行居候事茂難計依而此降伏壹通何とそ大惣督府膝下迄送り屆呉候樣ニ頼談候付奴僕大ニ悦テ承知いたし頼之通持參屆ケ差出候由

右之二ケ條（一ケ條は十九日既に掲載せし若松落城聞取書の一節也）城中より彌以降伏之確證情實貫徹仕候間官軍より茂是迄之疑念茂氷解ニ相成秋月等か歎願之素意ニ任せ速ニ城中ニ九月廿一日放チ返し相成候云々

〔谷干城遺稿上〕

東征私記　第五章

同廿日會藩鈴木爲輔川村三助の兩人我夫卒を嚮導とし二人皆夫卒の躰に身を變し大根を擔ひ我本營に來る則ち先つ是を本營の閑宅に通し余等面會の意を叩く彼の兩人懷中より重役の書簡を出し云去る十六日の朝手白木等を出し國情の逐々申し出てさせ候所今に何等の樣子も不相分如何相成り候も計られす其の以來は城中よりの通路も絶へ再ひ人を差し出すへき道もなく苦心の場合貴藩の小者とて幸に城中へ連れ參り候故委細右の者相頼み罷出て候なり書簡を披見すれは則手白木等云所の意を含めり於是眞に降伏の主意なるを知れり委細手白木等の申し立て相違せし由爲申聞則晝十二字頃兩人も手白木等に萎添へ薩の持場より返之此の日諸手より頻に城中に砲擊す城中より亦烈敷發射す（原註城中頭役は降伏の議に決するを知ると雖も諸藩脱走者兵卒に至りては更に其の事を不知故に城門を固むる兵は盛に發射す此の日城中より發射する事平日より烈し）然る所手白木等並に我夫卒城中より會人同行せし事自然に流布し城中已に降參に成る由取沙汰致すに至る兵士の氣怠惰を生するの恐れあり故に戰備怠るへからさるを布告せり

九月某日舊幕臣扶助願書の受理期日を定めて布達せらる

〔一新錄皇令〕

先般以來德川舊臣共御扶助相願候者御採用被爲在候ニ付同家重役共ニ取調可申出猶又銘々直ニ可願出旨懇々御沙汰相成候處今以方向取失或ハ一時邪論を主張して奉命不致今日ニ至り自己之活計ニ差支候より追々願出候者も有之趣際限も無之而已ならず右樣心得違之者不埒之至ニ付御奉公願出候者來ル廿五日限りたるへく候其後願出候者之一切御採用無之旨御沙汰候事

九月（近世史料編纂綱例には九月二十日頃將府德川氏舊徒ノ收祿ヲ請フ者ハ本月廿五日ヲ限ト爲スコトヲ令スとあり）

九月廿一日公議人選出につき更に令達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

九月廿一日

一今朝三藩御呼出ニ付井口三郎彦取不敢出張所ゟ罷出候處馬杉玄蕃を以左之御書付一通御渡ニ相成候事

議事院之儀ハ廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スルノ御旨趣ニシテ最重大之擧ニ有之先般公議人ヲ被置議員ニ被充課目對

策御試相成候處遂ニ空文ニ流レ却而對策及第等之弊風可生勢ニ付一先課目對策被廢止改而大ニ國家實用之輿論公議ヲ被興候思召ニ候然處公議人之儀ハ其材ヲ撰ヒ可代國論旨前以御布令ニモ相成候故各其材ニ不乏事ニハ可有之候得共猶又列藩ヲ御達觀被爲遊候ニ中ニハ藩論未定公議未立向モ有之哉ニ相聞即今議事之制有之候而モ名實齟齬致シ　朝廷列藩之際氣脈ヲ通シテ公議ヲ興シ候御趣意ニモ不相副徒ニ空論浮議ニ渉り一己ノ私見ヲ以テ衆說ニ雷同致ス等之弊ヲモ相生スヘクヲ以テ御遲回被爲在候得共實ニ一日も不可缺ハ公議ニ付愈以藩論ヲ一定シ公議ヲ振起シ　朝廷ニ於テ大ニ議事之制ヲ御興立可被在ニ付追々其制ニ基キ皇國一致氣脈相通シ候樣銘々可致盡力旨被仰出候事

九月　　行政官

九月廿一日車駕東幸により諸藩公議人一人東京へ出張せしむへき旨の令達あり

〔慶應三年王政日新錄〕

（九月廿一日柳原大納言より内山又助へ渡の御書付の内）

此度　御東幸ニ付而者諸藩公議人之内一國一人宛海陸勝手次第御着輦前後東京ニ可罷出旨被仰出候事

但右差越候人體之儀ニ付御用有之候間公議人一統來ル廿五日巳刻飛鳥井家ニ出頭可致事

九月廿一日　　行政官

九月廿一日奥羽追討平潟口官軍の先鋒山下を發し進みて亘城に至る尋て明日滯陣し晝夜巡邏すへき旨總督府參謀よりの達あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

（九月廿九日米田虎之助より尾藤金左衛門等へ通牒抄略）

一去ル廿日御繰出之御先鋒御人數同日山下泊陣翌廿一日亘在十文字村ニ宿陣廿五日迄同所陣

〔討仙偏誠佐田家文書〕

官軍進んで仙臺に入る事（節略九月廿日の續き）

明れは九月廿二日山下驛（一カマ）ニ列を整へ亘の城に至りけれハ城内より市中に懸人數入得すして亘より東一里計りニして十文字村榎の木袋と云ふ處あり此所迄懸宿營す（我肥の宿營袋ニ居る）（以下廿三日に續く）

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月廿一日

明二十二日滯陣之事

但進軍之節ハ御達可有之候事

一宿陣所近邊晝夜巡邏可有之候事

九月廿一日　　參謀

榎木袋宿陣　　肥後藩　筑後藩　藝州藩　長官中

稲葉方引揚　　松浦織之丞　一小隊

稲葉渡場方引揚　　星源左衛門

但器械莚包ニ而持越

外ニ器械三包

常圓寺方引揚　　常盤大之進　深田大藏

右明朝當所ニ引揚候間爲心得相達候事

九月廿一日　　參謀

肥後藩　筑後藩　藝州藩　長官中

小坂方引揚　　伊達藤五郎家來　樋口助右衛門　一小隊

明治元年

九月廿一日原藍戰爭の際負傷せし我藩境野素兵衛外九人は中村なる我藩本陣より東京へ後送せらる

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月廿一日　中村藩陳　先手　瓦　在木文字村宿陣

一手負之面々東京府ニ差送候付今日爰許差立候事

但名前左之通

境野素兵衛　　中村左助隊
上野繁十郎　　布田彦九郎　柳井金太郎
田中平次　　横田治部右衛門隊
松浦治右衛門　　柿山淺右衛門　大賀八之允
本文四人ニ添狀　　日吉孫四郎
相渡候事　　定詰足輕
藤木民藏

九月廿二日天長節につき在府の諸兵に祝酒を賜ふ

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

（九月廿八日御供御用人中村上ゟ十月十七日着の内）

一去二十日（マヽ）今上御誕辰ニ付在府之諸兵ニ御祝酒下賜候付而之書付寫並總督府御使番より之廻狀寫添書共差上申候右ニ付御酒肴料左之通御渡ニ相成申候

金貳拾三兩貳分三朱　肴料
百五拾壹貫六百文　酒七斗五升八合

下ニ付札本文御酒肴料ハ當春以來被差越置候御人數並御門々ニ被差出置候御人數ニ被下候由

追而藩々戰士何人夫卒何人と分別ケ聢と取調明廿二日無相違當局ニ可被申出候事

別紙之通御酒肴料被下候條明廿二日四ッ時迄大總督府會計局ニ罷出藩々請取可有之候此段相達候以上

但藩々承知加點之上早々刻付を以廻達可有之事

九月廿一日　御使番

（筑後藩、肥後藩、外十二藩及ひ赤心、報國、龍虎三隊宛）

右一通明二十二日　今上帝　御誕辰ニ付在府之諸兵ニ御祝酒下賜候事

九月廿一日　大總督　下參謀

九月廿二日仙臺藩の兵器を沒收せらるゝにより受領の爲め藩士二人を選出すへき旨の令達あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

先手へ御達

今般仙藩謝罪歎願御聞屆ニ相成器械彈藥被取上候條請取方として各藩より兩人宛出張被申付候間人撰書付を以早々可被申出候旨參謀衆被相達候事

九月廿二日　御使番

因州藩　肥後藩　筑後藩　長官中

右之通ニ付馬淵次郎八中垣孫八郎被差出旨及達其段御使番に覺書を以相答置候事

九月廿二日我藩奥州出征中戰死せし者の遺骸を送還す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月廿二日　中村瀧陣　先手次于十文字村

一戰死之這骸東京ニ差送り御國許ニ被差下候樣申向候事

但法名等左之通

忠山雄徹居士　横田治部右衛門隊分隊司令士出張中銃物頭列仮席　森山章之允光晴　四十五

得悟院義性日勇居士　大河原次郎九郎組仮組脇　瀧導銃物頭列仮席　松本傳十郎元連　二十八

忠山義徹居士　同人組物見并宿陣宿賦兼日禅官銃番方上席仮席　園部新左衛門友景　四十五

忠山良徹居士　同人組建山林右衛門五男　建山四郎彦守義　二十

忠山清徹居士　中村左助隊小頭　井原古久兵衛清房　四十三

忠山頎徹居士　同人隊　相賀彈助定義　二十四

忠山英徹居士　右同　丸野源之允信義　三十

忠山久徹居士　右同　渡邊長太郎知嘉　二十一

忠山建徹居士　横田治部右衛門隊小頭　高野修五郎幸明　二十五

忠山諦徹居士　同人隊代小頭　野口一太正敏　二十九

忠山專徹居士　同人隊　松江光之助景綱　十七

忠山愁徹居士　右同　船津呈四郎忠秋　二十五

忠山圓徹居士　米田虎之助家來　江藤熊太正義　十九

忠山孝徹居士　右同　猿山岩太忠久　二十二

忠山榮徹居士　右同　丸野鐵次郎信則　二十七

忠山及徹居士　大河原次郎九郎家來　岩下喜一郎剛延　四十六

以上

九月廿二日松平容保若松城を開きて官軍に降る

〔一新錄探索報告〕

若松落城聞取書

明治元年九月

一ボナリ嶺上佛人ヲ頼ミ臺場四ケ所相築キ堅固ニ相守居候處薩長土大村大垣備前分隊及烈戰候處意外ニ乘取猪苗代ヲ立テ會城ニ欲向途中瀧澤峠ニ而防戰いたし候由右之ケ所ハ天嶮之要地ゝ有之處ニ關門ヲ鎖シ左右之深谷ニ而深サ廿四五丈茂有之處ニ高崖ゟ瀑水相掛り水聲喧シク當りを拂ふ切處ニ人數大分操出頻ニ相防候間なゝ〳〵寄付ケ不申薩土ゟ茂不怪手剛ク見受候由ニ而弊藩(長州藩)に先鋒ニ懸り果候樣相談致し申候間前戰之懸り口茂左迄手强くと覺不申直ニ先鋒ニ懸り暫時セり合候處前條之關門なゝ〳〵持チ固メ餘程及苦戰候得共遂ニ破不申仍而此儘ニ而ゑとても行不申と弊藩人數申合右谿流之尻に下り銃を負ひ木を樂て要所ゟ關門の後ニ出挾擊いたし候間敵遂ニ潰散致シ關門ニハ守兵上下皆見事ニ割腹其先キ十六橋有之候橋々を落シ不申内ニ進軍致し不申候而ハとても六ケ敷長兵茂恐レヲ抱キ迅速相進候處右十六橋一番之橋一ツヲ落シ有之殘り之橋々ハ未タ落シ得不申候間右ノ一番橋に竹木を渡し疊を上ニ置キ最易ク打渡り進擊候間遂ニ敗走ニおよひ砲器も打捨有之八月廿一日ノ一戰ニ而賴ミ切タル要地關門ヲ被破候間城中へ引取候付勢至堂口越後口米澤口等一時ニ破レニ及申候間夫ゟ諸藩兵隊引續城下へ亂入相迫候樣子ニ嘶ス

一同月廿二日白川口越後口桂林寺口米澤口等瀧澤峠天嶮之切處被破候故官軍ゟ後ロヲ被打立候付會兵進退切迫ニ相成不一方敗走致シ關門隊長初メ見事ニ割腹いたし殘兵引取候丈ハ城中通入候由ニ而其ゟ市中不殘燒拂ひ惣責ニ而四方之口々ゟ城下に進軍ニ相成候付何之手間もなく三ノ丸二ノ丸迄乘落シ意外ニ官軍勝利ニ相成其節侍屋敷家々へ入込見候處

なゝ〳〵感心有餘事ニ而毎戸二三歳之赤子ハ申ニ不及七ツ八ツ之子供ニ至迄不殘刺殺シ銘々衣服迄も相改メ水ゝ而今世之別レを遂ケ候樣子ニ而盃等茂處々に有之互ニ快ク刺違へ累々と死を潔ク致し居候有樣兼而之教訓武門之習各烈操(タナ)けなる氣象敵ならも涙不能禁元ゟ會之地へ入込候砌之木草草木迄一本茂立テハ置不申と覺悟いたし入込候得共右會人之精義只々我折申候なゝ〳〵我藩ニ而之ケ樣之國中婦人女兒迄死を潔クいたし國名を千歳之本迄不穢處置ハ是も六ケ敷と感激ニ不堪咄申候尤右之混雜之節スワ社と申社内ニ共ハ未夭姚二八之婦人白無垢緋無垢引重子化粧迄見事ニいたし相互ニ差違へ一死を遂ケ居候有樣男子之振舞ゝも不劣いつゝ茂烈婦と官軍不覺落涙ニ及申候由ニ而實ニ皇國中之亀鑑と茂賞スルニ有餘誠ニ惜キもの共と感話ニ及申候前條之混雜と二三之丸責落し候砌いつゝも本丸へ入込候節定而入後レたる物と見受申候由ニ話申候ケ樣ニ男女抛身命報國節ニ死候極ニ至り君公父子降伏と申候而ハ君臣之大義相違いたし惜ら。ハ君(く落カヤ)侯父子之一死を欠キ申ゟるゝと互ニ物語り數刻ニ及

一長人言會人長薩ニ餘程宿怨凝り候樣と相見八月廿九日ゝゟ城中ゟ二大隊計劔槍隊共操出シ烈戰ニ及申候處弊藩臺場前ニ參り長州〳〵と呼り相懸り餘程一端ゟ致苦戰其内弊藩臺場前ニ一同三十人計打倒申候へ共其煙之下ゟ相進ミ臺場三間計前ニ而壹人ゟ漸打留申候位ニ而跡ニ而死骸を檢もるニ姓名日月或ゟ法號迄相記し懷中いたし居候由烈敷事感心なる物と只々我折申候勿論口込如之雷フルニ而ハ一發外放チ六ケ敷仍而スナイトル乎又ハ七連發等用ひ不申候而ハ行不申候總而元込を相用候と咄ス

一會城降伏と申候儀ハ決而有之間敷と寄手官軍ゟ茂見込居本丸迄責寄せ八月之末ゟ九月末迄凡三十日計持ゟたへ遂ニ四方之口々破レ手强ク烈戰茂幾度いたし實ニ官軍茂無理ニ城を拔キ候而ゟ死傷茂不少可有之責メ兼居候程ニ有之候處先月十八九日比ゟ米軍門に會之手白木(代カ)直右衛門野口九郎太夫秋月悌次郎三人城中ゟ忍ひ出降伏之情實申向候得共米藩ゟ茂未タ我藩もら如何相成可申茂難計況他之降伏等之周旋ハ一切斷申切候處不怪右三人當惑之躰ゝ而有之左候ハヽ何とそ尊藩兵隊之内に我三人を御加へ二本松參謀手元迄連レ越呉候樣精々歎願仕候間米ゟ同心いたし二本松迄護送仕候由

一右手白(代カ)木列通出候而歸城茂いたし不申事故定而生捕ゟたる歟又ゟ首を打レ候歟城中ゟ茂不一方懸念之餘り手方ニツキ候譯と相見既ニ土州人數之内奴僕城下へ野菜を採り出居候者を召捕へ城ニ連レ越候間奴僕ゟ定而殺さゟ可申と恐レ申候處却而於城中馳走等懇ニ有之外之儀ニ而も無之此間ゟ城中ゟ重臣三人降伏之爲メ通出二本松迄罷出居候得共未タ今日迄歸城ニ茂及不申如何成行居候事茂難計依而此降伏壹通何とそ大惣督府膝下迄送り屆呉候樣ニ賴談候付奴僕大ニ悅テ承知いたし賴之通持參屆ケ差出候由右之二ケ條城中ゟ彌以降伏之確證情實貫徹仕候間官軍ゟ茂是迄之疑念茂氷解ニ相成秋月等ハ歎願之素意ニ任セ速ニ城中に九月廿一日放チ返し相成候處果而前條歎願内約之通同廿二日拂曉ニ旗旗相動無程城門を開キ壹丁計相離レ居候地に幕張いたし左右ニ降參と申候旗ヲ立テ申候付無程參謀右之處迄參り申候處君侯父子城中ゟ被罷出ゟら莚之上被座歎願書差出ニ相成引次而重臣共ゟ又一通之歎願書差出申候勿論いつゟ茂脫刀ニ而君侯丈ケハ帶劔何程ニ有之候哉之伺前以有之勝手ニいたし候樣參謀ゟ差圖ニ付大小ゟ袋ニ入左右ゟ所持いたし申候軍門降參之手數相濟申候而直ニ猪苗代と申處妙國寺へ不殘護送いたし候由ニ而勿論病氣有之候譯を以乘物之件相伺候處是又前條之通勝手ニいたし候樣申聞ニ付御左右之者と相見御駕をかき參候由誠以哀ふる次第ニ而是迄城中ニ茂玄關之下タ穴ヲ掘り其前ニ敷キ石を立テ住居ニ相成候樣子ニ而城中ニ茂彈丸跡縱横ニ有之最早糧米彈藥等迄打きらし勢ひ盡キ候處よりケ樣ニ武門之恥をさらし進退呼吸ニ迫り候處ゟ降伏と相成候而ゟ却而見苦敷相見申候と咄ス左候而翌廿三日同廿四日迄兵器ハ勿論糧米彈丸藥等殘り居候丈ケハ夫々受取開城之手數相濟翌廿五日若松城下發程いたし候由咄申候東京着大惣督府鎭臺府へ右之次第御屆ケ申上同二日東京發シ西京へ登り懸ケ之由ニ而宮ニ而出會桑名迄同船いたし右之件々情實内話之趣聞取之儘錄上仕候間跡立て相認メ間違之儀可有之と奉存候事

右ゟ長州藩片山正作と申者全躰斥候隊ニ而二本松ゟ若松城下へ進入セし者之由ニ而九月廿五日同所出立西京へ登り候途中宮ゟ渡海之節同船いたし右之次第聞取之概略

十月八日

明治元年

〔谷干城遺稿上〕

東征私記　第五章

同廿二日朝八時頃約の如く追手門外へ降參と書したる大旗を建つ則ち是を相圖に諸口の官兵に矢止めの令を傳ふ彼れ一追手外に幕を張り歎願書受取りの場所を設く總督府軍監中村半次郎軍曹山縣小太郎、唯九十九等列座肥後父子禮服を着け無刀にて罷出て歎願書を差し出す夫れより父子共一先歸城午後駕籠にて城北瀧澤村妙國寺に赴く薩一小隊我一小隊前後を護送す肥後父子へ隨從の者上下男女百三人男子は皆無刀女子姿裝樣々散切りの者もありチンを抱ける婦人もあり誠に可憐有樣なり番兵として薩一小隊並谷神兵衛隊を遣る卽ち大小砲並に槍長刀等諸兵器皆追手門外へ出さ令め各藩頭役出張の上受取る

〔佐田家記錄〕

松平肥後歎願書

臣容保乍恐謹而奉言上候拙臣儀京都在職中蒙　朝廷莫大之鴻恩ナカラ萬分之微衷モ不奉報其内當正月中於伏見表暴動之一戰旨意行違不憚近畿奉驚　天聽深ク奉恐懼候爾來引續今日迄遂ニ奉抗敵　王師僻土頑陋之訛謬今更何共可申上樣無御座實ニ不容天地之大罪措身ニ無所人民塗炭ノ苦ヲ爲受候次第全容保之所致ニ御座候得ハ此上如何樣ノ大刑被　仰付候トモ聊舊恨無御座候臣父子並家來之死生偏ニ奉仰天朝之聖斷但國民ト婦女子共ニ至候テハ元來無知無罪ノ儀ニ御座候得ハ一統之御赦免被　仰出候樣代而奉歎訴候仍之從來之諸兵器悉皆奉差上速ニ開城官軍御陣門へ降伏奉謝罪候此上萬一モ　王政御復古出格之御憐愍ヲ以至仁之御寬典於被　仰付者冥加之至難有奉存候此段大總督府執事迄冒萬死奉歎願候誠惶誠恐頓首再拜

源　容保謹上

慶應四年九月

同重役歎願書

亡國之陪臣長修等謹而奉言上候老寡君容保儀久々京都ニ於テ奉職罷在寸功モナク蒙無量之天眷萬分之一モ未奉報　隆恩剩觸　天譴遂ニ今日ノ事躰ニ至り容保父子城地差上降伏奉謝罪候段畢竟微臣等頑愚疎暴ニシテ輔導ノ道ヲ失ヒ候儀今更哀訴仕候モ却而恐多次第ニ御座候得共臣子ノ至情實ニ難堪奉存候間代而臣等被處嚴刑被下置度奉伏冀候何卒保容父子蒙　聖慈寬大御沙汰候樣御執成シ被成下置度不顧忌諱泣血奉祈願候臣長修等誠恐誠惶頓首再拜

慶應四年九月

松平若狹重役

萱野權兵衛　長修花押
梶原平馬　景武花押
内藤介右衛門　信節花押
原田對馬　補龍花押
山川大藏　重治花押
海老名郡季　花押
井深茂右衛門　重常花押
田中源之進　玄花押
金澤右兵衛　爲花押

外諸臣共一同謹上

〔佐田家記錄〕

會津在陣ヨリ文通

其後日夜攻擊不止候故賊徒遂ニ及窮迫去ル廿二日松平肥後父子軍門ニ來テ降伏當時妙國ト云梵宇ニ蟄居謹慎同日大小ノ砲器不殘差出シ廿三日家來不殘猪苗代ニ引退大小相渡シ謹慎今日城請取ノ都合ニ相成申候抑當城ハ方五六町位ノ平城ニ候得共石垣ノ曲折巧ニ妙ヲ得殊ニ必死ノ兵三千ヲ以大砲五十門小銃二千八百挺中々數月ノ間ニ可攻落ニ無之候得共初メ討入ノ砌殊ノ外急速ニテ粮米火藥ヲ城中ヘ不運入候内ニ攻寄致放火候故老若男女五千ノ共著食用ニ困ミ數千挺ノ銃砲ハ彈藥ニ乏ク攻圍三十日ニシテ落城ニ及候次第畢竟諸將士ノ勉勵ト　皇運ノ天幸ニ由ル處ト率存候今日須磨敬次郎平田伊藏兩士差立候ニ付不取敢此段得貴意候以上

九月廿四日　　伊地知正治

大久保一藏様

〔佐田家記錄〕

字都宮ヨリ來狀之寫

小箇謹啓仕候然者私儀過日申上候通若松表ヘ出張彼之模様一見候處實ニ哀レナル事言語難申陳次第外曲輪ノ十六門皆口不殘十四日ニ乘取り二重三重ニ取圍ミ大小砲晝夜連發堂々不可犯勢實ニ勇敢事ニ有之賊ハ本丸ニ退縮彈藥乏シキ歟折々少々ツヽ發砲有之迄ノ事ニ有之内々軍議モ承リ候處未タ北陸道ノ官兵不殘繰込不相成候ニ付諸道總着ノ上取掛リ相成リ候趣ニ御座候當時ノ人數ニテ總攻相成候得者一日モ保チ申間敷ト相見ヘ候勢ニ御座候是ニハ何歟略ノ有之事ト愚考致シ候歸邑ノ上承候ニ中村半次郎殿ノ戰場諸隊ヲ指揮候ヨリ其他臨機處置ノ敏ナルコト實ニ感服ノ由云々

右書面認中丸山善兵衛早追ニテ歸着候處當廿二日肥後父子降服ノ歎願米澤人ニ手寄リ差出シ御聞屆ニテ即日中村半次郎殿本使ニテ入城彼是應接有之右父子某寺ヘ謹慎器械不殘差出シ兵隊ハ不殘猪苗代ヘ立退候樣御沙汰相成候由ニ御座候云々以上

九月廿四日夜　　宇都宮ヨリ

縣勇記殿　　戸田三左衛門

同

九月十九日會津降參ノ使トシテ手代木猶右衛門秋月悌二郎儀上杉家人數ニ願出候趣ニ而總懸候而土州參謀ニ差出同廿日右兩人歸城被差免同廿一日曉ヨリ城中ヨリノ發砲無之乍併官軍固場ハ不相替探砲有之候處同夕刻會津在陣ノ參謀ヨリ明廿二日十字過ヨリ諸藩固場探砲候樣被仰渡尤襲來又彼ヨリ打懸候ハヽ發砲候樣通達有之候ニ付廿二日四ツ時ヨリ砲發見合十二字ニ至リ降參爲應接中村半次郎殿副使ニモ可有之哉山縣小太郎殿附添大手門内迄被罷出候節爲迎降參旗一本立羽織着之者三人扣居テ先立ス北出丸外石垣下ニ幕打廻シ先方補理置候場所ニ案内ス手代木秋月又出迎幕内ヘ同道共上ニ而會二君ヲ秋月呼出候間二君共上下ヲ着無刀ニテ罷出菰ノ上ニ平服シ秋月手代木兩人ヨリ申立候趣ニハ廿二日夕七ツ時前城中ニ有之器械不殘相渡候筈引續二君并家族之分ハ城下明國寺ヘ引取蟄居之筈尤官軍ニ而護送之趣藩士ハ一同翌廿三日猪苗代ニ引取之筈護送之儀ハ前同斷諸方口々分散罷在候兵隊ハ追々呼寄度申出候事

右同藩丸山善兵衛早追着ノ上差出候書面ノ略

〔一新錄皇令〕

明治元年十月京都より差廻來候會津落城之報告

會津落城之報知唯今大政官ニ有之候宇和島侯書付之荒增別紙差出申候間御落掌可被下候已上

明治元年

十月五日

藪　作右衛門様

十五日ゟ諸手官軍一同大砲ニ而責寄外郭殊之外堅固ニ相守夫ゟ日夜之戰ニ而漸責拔キ十九日木丸ニ責付タリ鹽川米澤陣所ニ會藩手代木直右衛門秋月悌次郎桃川何某罷出降伏願出候先右三人召捕士州本營ニ送る三人より肥後父子降狀之願立有之　廿二日二字大手城門ニ降旗相立十二字大小銃器引渡同日午後肥後父子軍門ニ降伏直ニ瀧澤村妙圓寺ニ謹愼同廿三日城内兵隊退城同日日晃殘賊爲打拂諸藩より兵隊差出

以上

一仙臺茂開城藩士城を出謹愼武器等差出ス

右唯今宇和島侯ゟ申來

右委細ハ兩三日中ニ日誌ニ出候筈ニ付略ス

〔一新錄探索報告〕

（慶應四年九月聞取書、九月十五日の續き）

一米澤之事

世子七日ニ越後口ニ謝罪ニ出方ニ而十五日歸城

一庄内追討被　仰出候付米ノ世子先鋒被　仰付九月十八日發途

一米情士臺春以來官軍ニ抗來候處今日初而朝廷之御趣意致承知學羽今日之運ニ相成候事深恐入候事ニ而此上ハ一刻も同盟諸藩致說得不血して奥羽平定ニ相成候樣致盡力不聞入藩ニ之先鋒を勤右等を以實効を立是迄之罪科を謝し國中一統朝廷之被　仰付を相待候事

一庄内之事

米澤より致說得候處其後廿日ニ庄内之重役三人米澤ニ參り謝罪申出監察米澤ニ參りニ相成候折柄直ニ右之通候ハヽ最早進軍ニ相成候事ニ而此向ニ一刻も謝狀差出候樣返答ニ相成其後猶又認メ米澤ニ差出候事

但右之書面ニ而之難御取揚由ニ而猶又認替候由候事參謀見込ニ之是非押詰不申而之迎も實迹分兼候事ニ而不日ニ進軍之筈候事

一南部之事

米澤より說得ニ而謝罪申出居候得共互ニ兩國和議位之心得ニ而君臣之名分立兼是も庄内同樣之見込候事

一佐竹之事

庄内南部より襲候事ニ而肥前千人大村一大隊平戸六百人繰込居候得共其後何之報知も無之由候事

一天童　山形　上ノ山

右謝罪ニ而此度實効之爲メ庄内より一小隊二小隊宛出兵ニ相成候事

一會津之事

十四日戰爭手强ク長州百人土州隊長分之者十三人討死爲有之由

廿一日白地之旗ニ降伏ト書し城中ニ建其夜重役兩人謝罪申出監察中村半次郎御使番由井九十九別ニ山縣小太郎應接

廿二日肥後父子駕籠駕夫ハ皆近侍重役二十人計ノヨシ ニ而竹澤ノ村妙國寺城ト一ツ隔より ニ薩土大垣之人數警衛ニ而罷越謹愼之事

廿三日惣人數五千人餘内二千五百人余精兵殘ハ婦人男子ハ十五以上六十以下皆猪苗代ニ而之尾州大村警衛大村より腰之物受取一夜ニ而濟兼廿四日迄懸り候事

一小銃　　二千五百挺

但玉藥二萬程有之候事

一大砲　　五十二門

但玉藁ふし　一ヶ月分丈
一玄米　なし
一薪
尤是迄家を解炊居候由
一廿四日城請取之事
此儀委相分不申候
右大村藩左之面々廿四日出立ニ而廿五日二本松ニ報知之事
和田藤之助
岩崎鐵平
一福島之事
十五日ニ二本松迄謝罪ニ被相出候處暫滞ニ而惣督御達ニ相成其後歸府ニ而謹慎ニ候事
一二本松之事
謝罪ニ而謹慎被　仰付不日ニ歸府之筈候事
右之通聞取之儘御達申候以上
九月　赤尾九八郎（内藤儀十郎也）
中山閏五郎（後名政設）

〔海舟日誌〕

十月朔日

勝木氏來訪云去る九月廿二日若松開城

米澤人の取扱にて會藩降伏謝罪を乞ふ者　謀主　伊知地正治　板垣退助
手代木直右衛門　軍事方秋月貞次郎　用人宮川某
三條公軍曹山縣小太郎　薩中村半次郎
會賊父子瀧澤村妙國寺にて謹慎登居隨從貳拾人被差免家中の者交代も不苦
兵隊の向は廿三日猪苗代若松迄の内村里にて登居城中に居る婦女子の向は行方勝手次第住居構無し
是迄三千人計籠城三十日日夜の砲發五百人死傷殆困苦に及ひ辛ふして降伏の意を官兵に通すと
越後え出居る脫兵庄内を頼て勢絕し秋田え迫り居る由若松城は加越信州大名に任せ預けの上若松在陣の分は庄内え向き出張可成哉難計と
前件父子幷家中の向えは壹人前米五合幷鹽漬等被下の由
父子幷家中初め手廻り道具は持參不苦と云
右九月二十二日出にて彦藩松宮角左衛門内山治右衛門より申來る

九月廿三日本藩海上遼遠にして東京廻米の期限に後れむことを慮り豫め辨事役所に申告す

〔王政日新錄〕（慶應四年）

今般蒼生御綏撫之爲　御東幸被爲遊候ニ付而之賑恤之御備として御廻米被爲設置度　思召を以右石數貳万石御買上被仰付候間速ニ東京表ニ運輸可仕旨御達之趣奉畏候右之急場之儀ニ付不取敢大坂藏屋敷ニ申遣同所備米之内有合丈ニ而も急速御間を互候樣心配仕候處漸六千四百石程用意相調候段申越候尤右石數不足分之早速國許ニ急飛を以差廻方之儀

申遣置候得共遼遠之海上殊ニ和船ゟて運輸之儀ニ御座候得之速ニ廻着之程茂無覺束自然ゟ　御沙汰之期限ニ相後レ可申と奉存候此段も御屆申上置候以上

九月廿三日　　肥後中將内　内山又助

辨事御役所

九月廿三日仙臺藩老臣遠藤文七郎中村なる我藩本陣に來たり謝罪に關する我藩の盡力を謝す

〔佐田家記錄戊辰之奥州御出陣日記〕

九月廿三日　立多

仙臺重臣遠藤文七郎并氏家同意御本營（米田本陣）ニ出ツ御對談アリ

御組御備ノ片手御番頭奥村軍記組共ニ着陣

九月廿四日諸藩公議人を東京へ差遣すへき旨更に達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（九月廿四日南度呼出にて河邊に渡されたる書付の内）

立花宮内を以御渡

今般御東幸ニ付諸藩公議人之中一國一人宛東京ニ可被差越被仰出置候處御都合茂有之候間當時詰居候公議人何ゟ茂海陸勝手次第御着繫前後東京ニ可差越旨改而被仰出候尤病氣等ニ而難差越向ハ別段之儀ニ付其旨可伺出候事

但右付過日相達置候明廿五日公議人飛鳥井家ニ出頭不及其儀候事

九月廿四日

九月廿四日本年の租稅金納並に諸上納等は悉く金札を以て上納すへしとの旨を達せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

九月廿四日辨事より御呼出石山三位殿より渡之御書付寫

皇國一圓金札通用被仰出候上者當辰年租稅金納之儀并諸上納都而金札ニ而上納可致候事

但遐邑僻陬ニ至り未全く融通行屆兼候分ハ正金取交上納不苦候事

九月　　行政官

九月廿四日我藩奥州出征後續隊番頭奥村軍記兵を率ゐて中村城下に至る

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

（九月廿九日米田虎之助より尾藤金左衛門等への通牒抄略）

去ル九日品川沖發艦之萬里丸同十二日平潟着岸乘組之奥村軍記列同廿四日より廿七日迄追々ニ無異儀爰許（中村城下）着いたし候（奥村軍記中村城下到着の日前掲廿四日の條佐田家記錄と差違あれとも彼れは私記にて本書は公用文たれは是に從ひたり）

九月廿四日長岡護美よりの慰勞品を我藩奥州出征戰士に與ふ此日大砲隊長永嶺雲七等中村城下に至る

〔佐田家記錄戊辰之役奥州御出陣日記〕

九月廿四日

東京表此頃江戸ヲ東京ト改メラルヨリ御贈賜ハル御酒各忝ク頂戴ス御組御備附大砲手永嶺雲七引卒シテ着陣

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

九月廿四日

一拾挺　酒

一貳拾貫目　莫

右者此表萬端不自由之由　左京亮様入御聽候處前軍之面々に差贈候様御内々被　仰付候間一統に頂戴方相達候様尤外々ゝも不自由之品有之候ハヽ早々申越候様在京御奉行より津田山三郎出張之節奉行代也迄添翰を以蒸氣船便より參り候付早速一統に及配當せ候事

九月廿四日仙臺藩兵器押收に關する通達あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

明廿五日書十字當所器械受取候ニ付兼而御達之人體當局に可被差出候事

一亙楯内調練場ニ而各隊運動并標的打被差許候條參謀衆被達候事

九月廿四日　御使番

肥後藩　筑後藩

長官中

右之通ニ付馬淵次郎八中垣孫八郎罷出候事

九月廿四日伊達慶邦自ら亙城に至りて降伏の禮を盡す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

（九月廿九日米田虎之助より尾藤金左衛門等への通牒抄略）

仙臺領主も廿四日亙城迄被罷出降伏之禮被相盡徒并舊幕脱走人も彌鎮靜昨日頃本城受取之筈ニ而亙城器械彈藥ハ夫々御取揚相濟候段同所（岩沼）ゟ注進有之候

九月廿四日官軍若松城を收む

〔谷干城遺稿上〕

東征私記　第五章

同廿三日城中の戰卒多分猪苗代に移る創者は皆城南青木村に退けり婦女老弱は近邊諸村に退居す（原註多米澤道鹽川村に移る由なり）

同廿四日十二字約定の通城明け渡すに付き各藩より一小隊を出し受取る會軍事局の役人前導にて諸門夫れ〳〵引渡しを受く殆と日暮に及ふ只三の丸雜夫未た引拂ひ兼候由申し出つるに付則ち軍監中村の指圖に依り二の丸と三の丸の際の矢倉門を閉ち兵を不置時々巡巡を爲すに決す然る所各藩の兵多く引取り守城すへき兵至て少し遂に其の夜は我兵本丸を守り二の丸は長兵追手口矢倉門は米澤藩をして守らしむ（以下略）

九月廿五日曩に我藩より添申せし曾我主水の舊領安堵願聽許せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

去ル廿五日被仰付候書付寫

高六千五百石　曾我主水

自今　朝臣被　召加本祿如舊下賜候事

明治元戊辰年九月

右一通

明治元年

當分可爲鎮將府支配八番組觸頭旨御沙汰候事

九月

九月廿五日奥羽追討平潟口總督府は各藩聯合進軍部隊數及ひ先鋒以下の任務を指定す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

肥後藩　一中隊
薩州藩　一小隊
因州藩　一中隊
長州藩　一中隊
筑後藩　一中隊
藝州藩　不殘
伊州藩

長州藩　一中隊
大砲隊
筑後藩
大砲隊

右明廿六日七字大手前相揃整列八字發軍岩沼迄進軍之事次第左之通

先鋒　肥後藩
中軍　薩州藩
因州藩
長州藩
筑州藩

後軍　藝州藩
伊州藩
長州藩　大砲藩
筑後藩　大砲隊

一出張御使番　磯部鹿之進
西直八郎

右之通御達有之候事

九月廿五日　參謀
肥後藩　筑後藩
長官中

九月廿五日本藩主詔邦上京發駕するに臨み家臣の心得方を諭示す

〔安津免久佐 本田九文書〕

今度就　御發駕被　仰渡候趣別紙御書附寫一通相渡候條被奉得其意觸支配方有之面々ハ可被申聞候以上

九月廿五日　御奉行中

條々

一朝廷之御法度及國之法度堅可相守事

一文武者士之常といへとも此砌彌以相勵萬質素ニ基不虞之心懸怠るましき事

一一國之堅固は一和ゝにある事末々ニ至迄能々相心得我等留守中何事ニよらす右京下知ハいふゝ不及年寄共差圖不可違背事

右之趣組々支配方に茂可申聞者也

九月廿六日奥羽追討平潟口各藩聯合軍互城を發し進みて岩沼に至る

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

（九月廿九日米田虎之助より尾藤金左衛門等への通牒抄略）

一去ル廿日御繰出之御先鋒御人數同日山下泊陣翌廿一日亙在十文字村ニ宿陣廿五日迄同所滯陣廿六日岩沼迄進軍

〔一新錄探索報告〕

（十月六日筆者不明之書抄略）

九月廿一日世子中村迄罷出四條殿下ニ謝罪之儀被申述廿二日歸國ニ相成申候右ニ付四條卿ニ茂仙城點檢相濟次第御發途御入城之御決議ニ付私共廿五日中村發途仕廿六日岩沼着仕候處先鋒官軍之岩沼ニ宿陳阿武隈以西之器械ハ亙ニ而差出以東ハ岩沼ニ而請取之手順ニ相成亙岩沼邊も一躰恭順之躰ニ拜見申候

九月廿六日奥羽追討平潟口總督府使番より仙臺藩の軍器押收に關する通達あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

一明廿七日當所器械請取ニ付各藩兵隊滯陣之事

一器械受取として兼而御達之通各藩より兩人つゝ明廿七日丸字迄當局ニ御差出可有之候事

町外仙臺口固メ　　肥後藩

南町入口固メ

右之通御達申上候以上

九月　　伊州藩

肥後藩　　御使番

伊州藩

九月廿六日本藩安田源之丞大總督府軍監を命せらる

〔江戸京都來狀扣〕（從慶應二丙寅年正月至明治三年）

（九月廿八日在東京尾藤金左衛門田中八郎兵衛ヨリ家老中老宛報告書の一節）

右者御屆被成可爲軍監旨同日（一昨廿六日也）於總督府被　仰渡候段相達候　　安田源之丞

九月廿七日本藩主詔邦熊本を發し小島より汽船に乘りて上京の途に就く

〔京都幷江戸返達御用狀扣〕

（十月五日藪より十月十七日着の一節、東京より）

一太守樣天機爲御伺被遊御上京候付先月廿七日五半時之御供揃ニて熊本御發駕小島ゟ蒸氣船ニ被爲召被遊御渡海旨被仰出候段御到來有之奉恐悦候

九月廿七日仙臺城へ向ひ進軍の命令あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

明廿八日曉六字當楯大手前ニ整列七字進發仙臺城迄進軍之事

但順次前日之通之事

一仙臺城下激徒並舊幕脫臣潛伏不心得者有之哉ニ相聞候條尙更嚴重ニ整列進軍之事

右之通堅可相守御達有之候事

九月　　肥後藩　　藝州藩

筑後藩　伊州藩　長官中　　肥後藩　伊州藩　御使番

九月廿七日奥羽追討平潟口總督府より番兵撤去の通達あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

原釜口
大場

右今日より番兵引揚可被申候事

九月廿七日

九月廿八日官軍岩沼を發して仙臺城に入る時に我藩兵先鋒斥候たり

〔討仙偏誠佐田家文書〕

官軍進んて仙臺城に入る事（節略）

同廿八日各藩の先鋒我肥の兵隊を斥候として仙臺ニ入りけるハ伊達某（其名ヲ知ラス）一小隊計り孰も館を携へ仙臺外ニ出迎へハ警衛として先ニ立チ列を亂さす行程ニ大凡一里半計りニして城門ニ到り伊達ゟ兵隊門の左右ニ拜謁す我肥の兵隊ハ斥候ふれハ一番ニ城中ニ乘入り城の四隅を探索ゟをゞども怪むゟき事もふけれハ惣軍追々ニ到着し次第を亂さす入込たり素より大勢の事ふをハ城中のミニ入得をして市中ニ出て宿營を

〔一新錄探索報告〕

仙臺謝罪官軍入城之事件ゟ既先日來仙藩家臣を以謝罪申出九月廿一日世子中村迄罷出四條殿下に謝罪之儀被申述廿二日陽國ニ相成申候右ニ付四條卿に茂仙城點檢相濟次第御發途御入城之御決議ニ付私共廿五日中村發途仕廿六日岩沼着仕候處先鋒官軍ゟ岩沼に宿陳阿武隈以西之器械ハ互ニ而差出以東ハ岩沼ニ而請取之手順ニ相成且岩沼邊も一躰恭順之躰ニ相見申候廿八日岩沼宿陳之官軍も仙城ニ進軍之筈ニ而弊藩之儀ゟ先鋒斥候被命置候間廿七日より弊藩先鋒斥候仙藩氏家道以同道ニ而城下ニ參り一體之形勢見聞仕候處彌穩ニ相見翌廿八日官軍城下に繰込ニ相成候間重役共郭外迄出迎至而恭順之躰ニ相見申候官軍之儀ゟ城點檢等相濟各藩城下に宿陳ニ相成候事ニ而最早四條卿ニゟ御入城も爲被相濟と奉想像候扨仙藩國持等之儀も側見付增田齋說話之趣ニゟ君侯城内亀岡屋敷ニ謹慎世子ハ家臣百大吉屋敷ニ謹慎ニ相成申候當時迄執事之重役等堅禁錮申付ニ相成其外過激舊幕脫走之徒も別紙調之通ゟ而外ニ聞込候事も無御座最早各藩之官軍繰込ニ相成候得ゟ一般鎭定可仕奉存候然處今般仙藩正義之徒初恭順謝罪之儀を申唱候砌ゟ激徒ゟ勿論一藩之論も婦女子ニ至迄舊幕之復讐を踏候場ニ立至候而ハ決而難相成若今降參仕候ハヽ初官軍を不抗ニ不如ト申募正義ハ却而賣國之奸賊ト相唱候位之事ニ而一旦ハ大ニ沸騰仕候處段々君侯よりも御說得ニ相成漸今日ニ相運申候間仰願クハ猶此上至仁之御沙汰を以巨魁抔を死一等を被免候而人民之耳目被定候ハヽ愈以一統官軍を奉感戴恭順之域ニ罷成可申ト增田抔見込ニ御座候其他相變候事件も無御座既ニ官軍も當地に繰込ニ相成候付其夜發途仕候右此節見聞之概略書取差出申候

十月六日此書付ゟ誰某ゟ差出候哉相分不申候

右書付ニ相添居候別紙ナリ

德川脫走之人員大凡調

郭外近	國分寺	三百五拾人程 鐵砲十五挺	右謝罪取扱中	牛里	稱念寺	二十人程
壹里程	右之内三百人程謝罪申出 洞雲寺			壹里	同斯生	四十三人 鐵砲七挺
					謝罪申出	
十三里	百五十人程			十三里	石ノ卷	百六十人程
					謝罪取扱中	

一日程　野　蒜　一日　寒風澤
同斷　四百人程　七里　同斷　松島
一日半　涌谷　同斷　松　右兩所ニ而千人程
同斷　三百人程
一日　松山　大久保七郎左衛門手　貳百四拾人程

（編者曰、仙臺藩戊辰史に據れは額兵隊は參政草名勤員の部下に屬し星恂太郎の訓練する所にして凡一千人あり服裝は赤色にして擬闘として目を奪ふ云々とあり右別紙中額兵隊々長星甚太郎とあるは筆記者の誤聞ならん歟又曰、此に額兵隊々長星甚太郎宮床ニ謹慎申付置候とあれとも防長回天史には慶應幕脱艦の十月十二日折か濱出帆せしとき星恂太郎亦額兵隊の一部二百餘人を率ゐて之に投寸とあれば星は謹慎を破りて遂に脱走せしならん歟）

一額兵隊々長星甚太郎宮床ニ謹慎申付置候
人數五百人
以上

九月廿八日奥羽追討平潟口總督府は仙臺城下不穩の狀あるを以て各藩嚴に警戒すへき旨を達す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

當城下未激賊且徳川脱臣不謹慎之輩も有之哉ニ相聞候條無怠用心可致尚各藩兵隊無用之歩行致間敷最無據用向有之節ハ銃器所持一分隊宛外出可致夜行堅ク被禁候事

右各藩嚴重可相守旨　御達有之候事

但今晩之處市街巡邏厚候堅ク當藩ニ申付置候事

九月　　御使番

薩州藩　長州藩　因州藩　肥後藩
藝州藩　伊州藩　筑後藩
長官中

九月廿八日中村城なる奥羽追討平潟口總督府は後續隊に互城への進發を命す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

右明廿九日曉七字城外追手前整列八字發軍互城迄進軍候樣御沙汰候條乱段爲心得相達候事

九月廿八日　　因州藩
薩州藩　長州藩　筑前藩　第三大隊
肥後藩　微兵隊　同鹿寺止宿第三大隊　伊州藩
長官中　　參謀

九月廿八日奥羽追討平潟口總督四條隆謌互城へ向ひ進發につき行軍次第を達す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

來ル十月朔日互城迄御進發相成候條曉六字城外追手前ニ相揃軍列整肅同七字御發軍之事

但シ當日坂本御止舍之事

行軍次第　　御惣督

前軍　筑前藩　長州藩
中軍　微兵隊　第三大隊
後軍　薩州藩　肥後藩○

○付札坂本滞陣之事　　俱當日腰兵糧之事

御使番　大田釜太郎　　九月　參謀

榊原專藏　　筑前藩　徵兵隊　薩州藩

長州藩　第三大隊　肥後藩

長官中

右之通御沙汰候事

九月廿八日三條實美蜂須賀茂韶長岡護美大久保一藏大村益次郎等鎭將府に於て奥羽各藩の處置及ひ鎭撫の事を議す

〔一新錄自筆狀〕

辰九月廿八日於鎭將府三條公阿州侯長岡大久保大村列坐奥羽各藩御處置且兩州鎭撫之評議概略左之如シ

此義前以テ京師ニ而茂御議有之タル事ニ而京師ヨリ議定參與人ニ而見込之稜書來ル春岳侯者寛大論ニ而肥前大木民平尤嚴重論ナリ其他中庸ニ的スル尤少シ

會津モ既ニ降伏シ手代木直右衛門秋月悌次郎米澤ニ據リ降伏ノ事ヲ云フ米澤ヨリ兩人ヲ縛シ直ニ惣督ニ贈ル畢而軍監中村半太郎列入城窓保父子莚ニ坐麻上下ヲ着シ降伏ス兵士皆器械ヲ差出ス或ハ官兵ヨリ取上ケ無異儀城請受相濟候ヨシ

伊地知正治ヨリ大久保ニ贈ル書狀ニ會城攻圍三十日ニシテ落タルハ全クボナリ峠ヨリ不意ニ討入候故城下ニアル處ノ玉藥器械其儘ニ兵火ニ燒失シ空手ニ而籠城致シ候故トノ事ニ而初ヨリ直ニ防禦ノ策ヲ嚴ニシ必死之兵三千ヲ以テ是ヲ守ラハ容易ニ不可拔云々

二本松白川口ヨリ會津ニ討入ノ官兵最早惣勢引上ケ白川二本松ニ屯集至急ニ金二萬兩差越候樣申來ル

會津御處置之義京地ノ論モマチ〳〵ニ而或名家之末ニテ三萬石モ可被下トノ論アリ又ハ父子ノ首ヲ斬リ家名ヲ繼ツトモ云フ寛大ハ春岳侯ノ論ナリ嚴重ハ大木民平等ノ論ナリ乍然皆今日ニ至ラサル以前ノ論說ニ而用ヒ難シ先ツ父子ハ死一等ヲ免セラル、ト云フ處ハ一決タランカ會津ノ義ハ未タ御議無シ兩三日中ニ者有之筈ナリ右者妄向ノ報告不來宇都宮藩廿四日ニ若松ヲ立チ來ルノ報告ナレハナリ

會津領ハ悉皆御取上ケニ而諸侯ヲ封セラレ候義可然トノ評議ニテ縱令ヒ天朝之御領ニ相成リ候而も知縣事ノ手位ニ而ハ鎭定六ケ敷付而ハ大垣松代ノ封ヲ此ニ移サレ可クトノ見込一旦ハ大村ノ筈ノ處大村ハ肥前ニテ土地モ宜敷二三萬マシタリトテ却テ從封ニ而者迷惑トノ見込ニ而大垣松代ニ少々ノ封增シ可被移トノ事尤內分ニ而增ス表分ニ而增ス未決若松猪苗代二ケ所ノヨシ二ケ所ノ見込ハ伊地知正治ノ見込ナリ書中ニ見ユ

庄內ノ義形勢未詳是以テ削地サカタノ湊ニ府ヲ被建ルトノ事

仙臺ハ削地京ニテハ二十萬ト云フ三十萬トモ云フ乍然爰許今日ニ至リ候上ニテノ論ハ十萬ト云フニ八萬ト云フ阿州ハ十萬ノ論也愚考ニハ十萬ヨリ至十五萬ト然シ重大事件ユヘ至急ニ行在所に御奏聞ノ上速ニ御處置有之度段申上候事且今日ノ機會ヲ失シ候而者御處置モ大キニ六ケ敷段申上候大村殊ノ外同意大村ノ見込尤此ニアリ

仙臺ハ仙臺府ヲ置ル、筈也當分各藩ヨリ藩兵ヲ置ク

米澤ハ七萬石ニ決ス畢竟米澤ハ抗官軍今日ニ至ルト雖モ反正ニ至リ而者大ニ誠意相見候事ニ而三分ノ一ト言議有リ十萬石ト云論アリ皆一應行在所ニ奏聞之事ニ付天裁何レニ歸スルハ十萬ニモ至ル可キカ如何

岩城平ナトハ主人ハ京都留守ニ付格別之御咎モ無之處隱居侯賊ニ一味シ終ニ落城ニ至リ必削地ニ至ラン右賊ニ同結セシ譯ハ箱根ヨリ脫走セシ林昌之助岩城平ニ來リシトキ昌之助カ美男子ナルニヨリ娘ヲアタエ聟ニナシタリ夫ヨリ今日ニ至リシヨシナリ

南部モ半分ノ上削地ニ至ル可シ當分仙臺府南部府ト被建置候ニ決ス右者里數相隔ルカユエナリ尤數年ノ後ハ一府ニ而

可然トノ見込ミナリ

二本松ハ一萬石五千石カ其他小藩皆准之各共采地ヲ賜リ減石ニ決ス尤相馬ハ本領安堵

兵火ニ懸リ疲弊困苦ニカヽラサル土地トカヽリシ土地區別ヲ設タルノ見込

不日奥羽ニ而戰爭兵士皆引上ケノ筈左無之而者各所皆殺氣多クシテ政治ニ害アルヲ以テ也大總督初御引上ケノ事

右於西城左京亮様御評議御書取内々拜見被仰付寫取候極々御密書ニテ有之候事

九月廿九日長岡護美書を米田虎之助に與へ東京及ひ藩地の事情を報し仙臺米澤處置の議等を内示す

〔佐田家文書〕

近日之事情御聽無之と存候間一翰申入候嚴寒之候在陣別而御氣倒可被成ト致想像候先以仙城降伏之段致欣喜候彼是御厚配察入申候追々探索生ナド歸り來り逐一承知仕候此上御盡力致渴望候爰許も近日大キニ平穩過日は三條公東久世小生中井弘藏列横濱同行國王之誕生祝炮操練等見物誠ニ大愉快之至り御用濟之上致歸府候近日者内外誠ニ多用第一殊之外　朝廷より御用ヒニ預り日夜平臥之暇無之しかし誠ニ眉ヲ開キ申候大久保も一兩日以前京都より歸り來り大安心仕り候夫迄ハ阿州ト兩人之議政ニ而誠ニ如山御用大苦心仕候御國許も御上京之御決議ニ相成り太守様御上京之旨右ニ付而之事情は一々書中ニ悉り候得共御奮發之段難有奉存候

主上も廿日　御發輦小生は品川迄御迎ヒニ罷出候様との事に御座候誠ニ千歳之一事　御英斷奉感泣候　御着輦のみ屈指罷在候近來者外國官とも時々立越し愉快之論を極メ五大洲之酒ニ醉ヒ申候御一笑可被成候木戸準一郎も小生申出之通御東行供奉其他大木民平御供議定ハ宇和島中山御前後ニ容堂侯も被來候よし櫻井も辨事に而歟不日來り候よし其他内外之官吏皆知音のみに而誠ニ好キ都合ニ御座候委曲者面語之上ニ候得共先ツ御安心之爲申入候奥州之事は御盡力希申候太守様御上京ハ難有奉存候猶追々可申入候也早々不具

九月廿九日　　左京亮

米田虎之助殿

尚々御自玉專一存申候惣軍一和專要之事ニ付申迄も無之候得共大切之際御心を用ひられ候様存申候此節御面會之節は五大洲之愉快論ニ而御面語可申候木戸は暫滯府又歸り候よし御座候江戸も開市ニ相成り申候中井弘藏主ニ成り盡力同人は横濱同行且時々邸ニ來り至而親敷而白キ人物ニ御座候隆人ニ而誠ニ好クサエタル人才ニ候一昨々日者異人堂上打交り之酒宴大混雜御一笑ト存申候不具

別紙

此儀ハ極秘ニ候得共席中之評議入御耳置申候書生ナドノ耳ニ入り候而者決而不可然候間左様御含直ニ御火中被下置度候領知之見込

仙臺ハ十萬石十五萬石二十萬石之内

米澤者七萬石八萬石十萬石之内

右之邊ハ奥羽之事諸事評議有之候稜書一兩日中ニ尚又内々差出シ可申候得とも朝議之事ニ付一人トシテ洩レ不申様御一兩人之外御他見無用ニ候ナリ

十月朔日奥羽追討平潟口總督四條隆謌中村城を發し進みて坂本に至る

〔佐田家記錄　戊辰之役奥州御出陣日記〕

十月朔日

明方ヨリ中村城大手前南堀際ニ整列御國(肥後)手御備ノ大砲手平野永嶺二組ノ次ニ御本陣手(米田惣帥の手兵)ノ大砲ヲ繰付ケ置ク無程六半時分筑前藩大砲三發引續キ永嶺手及御本陣手大砲平野手大砲放發終テ前軍筑前中軍薩兵隊薩州隊總督四條殿長州隊并第三大隊(舊幕歩兵因州手管轄)後軍御國ノ各隊進軍市中毎戸香ヲ焚キ官軍ノ通行ヲ拜觀ス老若山ノ如シ　中村藩相馬侯世子兵隊引卒シテ仙臺領ノ界

關門マテ四條殿ヲ送ラル駒ケ峯新地ヲ經テ途中折敷ニテ雲食シ七時過坂本着陣（中村ヨリ五里半）四條殿ハ當地ノ主大枝孫三郎館ニ宿陣平野手初メ町家ニ宿陣御本陣（米田德陣）ハ德本寺ニ御定アリ大枝ヨリ一統エ酒肴ヲ贈ル

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月朔日

一今曉六時中村城追手前に整列六半時發軍夕七時坂本着陣之事

十月朔日在仙臺津田山三郎書を米田虎之助に贈り該地の事情及び津輕慰問等の處分を報告す

〔佐田家文書〕

仙臺より寸翰謹而奉拜呈候爾來益御機嫌克被遊御座奉恐賀候冥元ニ而御人數一統無異條一昨廿八日當所迄着陣仕候間御安心可被遊候扨當表之儀藩内先は鎮靜之姿ニ相見候へ共海邊其外所々屯集之舊幕兵不服之輩多ク中ニ者榎本なと申者激論を唱若輩を煽動し板倉小笠原抔内實は力屈し術盡降伏之意中ニ有之由ニ候得共榎本より被爲激動未タ謝罪ハ不申出候由當藩中ニ者少々脫走も有之會計を司り居候松倉何某なとハ松島石卷等之官庫を開キ幕人を扶助致候等之儀共有之當藩より百方手を盡し說得仕候へ共昨今之處は手段も付兼迎ヒ兵力を不用候而者落着兼候見込ニ御座候然し是迄仕寄候末此際ニ至り干戈を用候樣成行候へは藩内も向又沸騰動搖を生し可申と共處當藩有志輩憂思苦心の模樣ニ而私迄段々賴談之趣も御座候畢竟榎本輩決死之結局はとても此節降伏いたし候而も一命ハ保チかたき見込より右樣暴激決死之覺悟を極居候由ニ候得は　朝廷之御趣意降伏さへいたし候へハ一死ハ被宥候樣之響きさへ有之たらバ何と歟說得もとゝのひ可申見込其邊之儀私より參謀之意中聞取呉候樣しきりニ懇談を受候間參謀河田も今日は當所へ着仕候筈に候間面會愚存之趣も申述候心得に罷在申候

一津輕藩兩人夏以來當地へ探索樣之御用にて參り居候處破盟後歸路塞り通行出來兼江戸表へ罷越候賦りニ而岩沼迄參り懸り下宿ニ來り候ニ付段々話合唯今ニ相成候而は道路も開ケ候ニ付當地之事情一刻も早ク歸報有之度咄合候處承知いたし就而は江戸表ニ而左京亮樣より御見舞之御使者被進度尊慮之儀は委細御伺取ニも相成居候事ニ付此節津輕人と同行仕候へは一體都合も宜敷其御表迄奉伺候へハ次第ニ遲延ニおよひ候間差切り取計候儀重疊奉恐入候へ共冥元限り取計御見舞之御使者として鯛瀨小左衛門幷林玄助差添今日より早打ニ而差越申候玄助儀ハ形勢事情實見熟知之者ニ候間是より委細奉言上候樣相含置申候尊慮不奉伺冥許限り取計候段ハ幾重ニ茂御宥免可被成下候四條殿ニ茂今朔日頃中村御發陣之御模樣に候へハ四日五日頃迄ニ者御人數も御到着と奉遙察候奉得拜顏言上之儀多端御座候へ共取紛略筆仕一刻も奉待御着候百拜謹言

十月朔日　　津田山三郎花押

虎之助樣

二白向寒之候御道中乍憚御自重御專一奉神祈候今晩ハ定而坂本御泊陣と奉拜察候大鳥幷古閑富次へも乍恐御序御傳被下候樣奉願上候再拜頓首

十月朔日在熊本元由八右衛門書を裁して藩情を米田虎之助に詳報す

〔佐田家文書〕

戊辰十月朔日

上包　虎之助樣　　元田八右衛門

平安極密

一翰奉謹啓候先以　太守樣益御機嫌能被遊御上京重々奉恐悅候此元ニ而　若殿樣益御機嫌能於江戸　左京亮樣益御安泰被爲成御滯營東西奉恐悅候續而　賢臺益御清健被成御座奉至悅候於此元　監物樣御初御滿堂被爲揃益御安康被爲在候間御休襟可被爲成奉存候畢而私儀無異儀消光仕居候間乍憚御放念可被成下奉願候

一先月八日之尊翰同廿五日比到着仕　監物様より被爲拜見御心肝之程も奉敬承殊ニ御別紙ニも御添筆被仰下候旨難有奉感銘候此元之事情之實ニ御憤悶ニ可被思召上と奉深察候先書ニも申上候通りニ而賢臺被爲在候得之初發ニ御勇斷廟堂一致之力を以牧崎鞍掛坂へ押懸　君上御明斷ニ而監察輩を壓倒外ニ辯論家小兒輩まて明白之談判一國快然と相成候様之御處置可有之と初より目算中之事ニハ御座候へ共有様　監物様勘解由様ハ被爲在候而も亦其御人躰之御居り場も御違ニ而其御手を被出候事被出來兼美濃殿角左衛門一番ニ一己勇退之處置ニ相成候而ハ私共力ニ而挽回之道を盡し候事及も無御座只々一己之誠意を奉盡候處分ニ出候外無御座候ニ付一身を差出兩度之献言仕其儘轉役被仰付候埒ニ相成申候間一己之遺憾之聊も無御座候得共　君德を損し國家御運ヒ上之儀ニ於テハ于今感慨無涯次第ニ奉存候有様六七月之初迄之美濃殿初大中府何之異論も無之兩君上之御都合彌以御宜敷奉窺候得之此勢ニ而御運ヒニ相成候ハヽ三年之中ニ之余程之御乘り上ケニ可相成私儀一和公正之微存茂大樫廟堂中ニハ透徹仕たると内々微笑仕候程ニ御座候處豈料らんや外庭小兒輩之辯論監察一致内密より　君上を動らし奉り牧崎鞍掛坂邊迄御同意ニ而外ニ一統之物議と相成り美濃殿道家神谷幷私儀小兒輩押懸劍擊ニも及ひ候勢ニ相成候段誠ニ埒もなき次第ニ御座候私抔へ一人ニ而も罷越候ハヽ十分之話合致し申候半と相待申候得共誰一人も參り候者之無御座候唯虚喝迄を以動搖致し終ニ今日之時體と相成慨嘆之至ニ奉存候一統之辯論太政官を疑惑誹謗會仙を助る薩長を忌疾し　御上京を達而御留メ申上候存念より御主意を伺取誤り一旦之朝敵と御成り被成候而も鎖國割據之御國議と書取迄も出來候様成行誠ニ奉恐入候右ニ付而之私儀先度献言之末ニも御座候間御上京之儀を初メ御隣藩御交際其外内外一致賢才御登用より御學問之筋實學之始末迄恐なら上書を也仕候儀ニ御座候然る處諸君子之御誠意相達し漸々京師關東之事情明白仕　祖宗御神靈之冥助を以　太守様御上京被遊候御運ヒニ至り候段重疊恐悦生涯奉欣躍候此上之何卒　聖主之御誠意相立後來御一新之御基本ニ相成候様有御座度奉懇祈候別紙今日之時體荒増之事情奉入御内覽候萬事御賢察奉希候

一其御元之事情之權之助より之書取等近々披見仕今度先月十四日迄之事情委細相分仙臺謝罪其外米澤も同様津輕之初ゟ勤王之段重々恐悦會津之落城ニ相成候勢ニ相成もとや東北一時之平治誠ニ以　皇國之恐悦奉欣躍候計ニ御座候就而ハ賢臺當五月御國御離レ被成候節此元を御立被爲在候而ハ跡内輪之儀實ニ懸念之次第も御座候へ共外表之御大義ニ之難被替無理ニ御決斷御出立被成候儀今日ニ至り時運之實跡追想仕候得之鏡ニかけ而見候様ニ相覺へ申候大坂ニ而御大論速ニ　左京亮様御東下猶又關東之言論御蹴破りニ而斷然御出陣御奮進突戰を以數人之討死　皇國へ之御信義忽相立其後御勝利度々ニ而其末仙臺之謝罪御談判ニ相成候事ニ御座候へハ御國從來仁義之御主意天下ニ明白仕是迄之言論家初而心死仕たると實ニ快然と罷成大病之全快仕たるよりも誠ニノヽ快夢寐難忘次第ニ奉存候其後之御模様之彌以順路之御運ヒニ相成候と奉恐察候得之猶追而之御報告を奉待候

一御東巡も被爲在東北も平定仕候得之天下一統王政を可奉仰彌以古今未曾有之御治道相立可申候御風化を以御國之儀も猶又回陽之運ニ相成可申奉懇祷候然處御國今日之勢實學學校誠ニ氷炭相反し候得共　監物様御初勘解由様方猶又御乘出し之儀中々難事ニ相成申候間彌以御鎮定被成候外無之只々賢臺御一人之御誠忠を以内外上下ニ御立被成候得之今日之御任ハ是迄と又大ニ相替り可申と奉存候乍憚御果斷勇決之聊以不奉望御精神泰山之如クどこノヽ迄も御持通し被爲在候様ニ奉懇祷候美濃殿道家之今一應御盡力も可被爲在御賢慮之段至極奉敬服美濃殿ニも直様隱居之儀之無之様辭職之節　御沙汰傳ニも相成居候由道家之直ニ隱居之覺悟ニ而御座候此兩人之既ニ私言上之節も達而申上置身を以代り申候段も奉言上候程ニ御座候間今度　御上京目出度被爲濟王政御遵奉被遊候ハヽ何卒御再攪被爲在度と奉祈居候事ニ御座候

種々申上度儀之誠ニ海山不盡ニ御座候得共別紙ニも認メ置申候間右迄寸心奉錄上候此上ふから彌以御自愛天下國家之爲ニ御精忠奉懇祷候恐惶謹言

十月朔日　　元田八右衛門　永孚花押

虎　之　助　様

御　左　右

尙々津田も彌以壯健精忠不斷御交接可被爲在乍憚本文之次第等宜敷御傳聲被成下候樣奉願上候新堀沼山事ハ別紙ニ申上候通りニ而山形も于今滯坂致し居候此元ニ而村井不相替出會仕候得共先月隱居病氣之末養生相叶不申もとや老病ニ而殘念ニ御座候右ニ付當時ハ引入居先之遠々敷方ニ御座候安場なとも一旦之罷登り候筈ニ余程願立も致し候得共例之物議ニ而御引留メニ相成申候住江茂四郎も京都よりハ引返しニ參り居候得とも未タ何之御模樣も無御座是も此まゝ御引留メ歟と相見へ申候近藤眞之丞村上重次郎迄も一旦之實學之評說を受け事情言上筋も中々通り不申漸ニ致し候而右兩人之罷登り候樣相成申候長谷川津田も其御元ニ罷立此度之厄運を免レ其身一己之申ニ足らも實ニ國家之大幸と奉存候津田留守家内子供も何之申分も無御座追々私方とも往來出會仕候間安心仕候樣乍憚被仰向被下候樣奉願上候此段迄申上殘候頓首

（別紙）

追啓

一八月十六日より上野堅五荒尾素兵衛轟木武兵衛加屋榮太列上京仕候儀之御國論　朝廷より之御聞込惡敷儀相分り夫を御取繕ひの爲メニ内々ゟ堂上方へ御頼ミ之御主意ニ而有之候由なり住江甚兵衛此節下り之節一同ニ武兵衛之罷下り申候御上京之御實跡之御立不被成候而御取繕とハ何等之事歟夫を御受申候而參り候武兵衛杯も何たる譯歟と一言ニ而論破仕たる由承り申候

一澤村脩藏も初發ゟ井澤傳列内議ニ而七月之比上書等も致し其末御目附ニ御選擢ニ相成候處先月十一日休憩殿上京ニ一同罷登申候此儀之沼山徵士ニ出候而ハ國論沸騰致し候等之譯を以解キ下し之手段ニ有之候段右洩聞致し候者ゲ樣之譯ニ而太政官之御聞濟有之候樣も無之と一笑致し候なり

一長崎ニ而館國之御國議藩臺府ニ相知レ國之中川西山なと讒訴も有之候由ニ而既ニ御國朝敵之名義を下シ可申との評論も有之たる由右之儀を嘉悅承り付早速惣督へ罷出御直ニ陳說仕御國之事情具ニ言上致し初而惣督も御合點ニ相成候由參謀井上聞多杯周旋ニ而以後之事迄屹度確定致し右一旦疑惑之次第ハ丸ニ取消シ御國元ニ相聞へ候而ハ決而宜敷無之長崎限りニ取消シ申候段井上嘉悅惣督之御聞込ニ而相濟申候由承り申候誠ニ可畏次第ニ而有之候

十月朔日

別紙

一九月廿七日　君上御上京之　御發駕八ッ時之御供揃ニ而七ッ半時比御立被遊御供廻り御近習御次等每も御野方通りと御輕隊ニ而小鳥ゟ御一泊翌朝御乘船之筈也書前ゟ之雨相止ミ不申君臣濡ゟ成り之御行裝ニ而御乘切なり

一御船之前以長崎ゟ御手當ニ相成幸ニ加州之御船御借受相濟上下二百人計之乘組往來十日程之御借切ニ而御都合好キ御事なり

一船將之太田黑權作ニ被仰付置候處少々入組有之前日ニ至り牛島ニも被仰付御同日御先キニ出立致し候

一此節之御供ニゟ藪圖書新御中老を初メとし而御奉行御用人ニ而宮村平馬鎌田平十郎表御用人ニゟ松野亀右衛門井上才七長谷川久御取次ニゟ志方司馬其外是迄被召仕候人躰之外ニ寺尾左助小篠熊雄なと迄も被召仕學校御穿鑿局等ニ而是迄　御上京嫌ひ候而々此節御供願出其内之巨魁を被召仕候なり此外諸生輩ニも段々御供願も有之候得共漸く押付ニ相成例之無足御供ゟ無之御中小姓ゟ三十人被召連御番頭牧多門助組共ニ思召を以被召連候なり

一廿日　御發輦之御治定ニ被爲在候得ゟ御着京ゟ其後ニ相成候ニ付　天機御伺とし而　行在所迄ゟ御追懸御當前ニ可被爲在候處例之俗見ニ而　御留守御伺ニ而可被爲濟との周旋も有之候由其儀ゟ休憩殿御先サニ着ニ而取繕ひゟ筈之由なり此節も可成丈諸所御出等不被遊樣の仕組ニ有之候由實ニ御誠意無之御事共ニ而奉恐入候御仕組なり

一御滯京も成丈御速ニとの御役々念願ニゟ候得共迎も左樣ニゟ參り兼可申候何樣　若殿樣御引替りニも可相成との由内

議之有之候趣ニ而　若殿様ニも内々其御深慮ニ被爲在候御模様ニ奉伺候なり

一御上京一條七月末八月央比迄ハ一切通り不申候處近藤眞之丞京都より村上重次郎江戸より其外小橋常藏住江茂四郎等追々ニ到着太政官現實之事情漸く明白仕休焉殿孤雲殿へ近藤言上能貫通致し天朝御尊奉之一事ハ今一層御立不被爲在候而ハ相濟不申候と休焉殿ニも重々御同意ニ相成初而　御上京御急決ニ相成申候七月之初　若殿様御上京御斷ニ御決定ニ相成候儀も根元　左京亮様御直書之事情ニ而御進ミ不被爲在内田尻彦列ヵ事情並竹添古庄列奥羽之事情等監察ヵ相助け申上候處ヵ之儀ニと候得共全ク休焉殿將監殿　御召出ニ而御上京を達而御留メ申上候ヵ御決定ニ相成候と被致推察此節

御上京之儀も休焉殿御同意無之候ハヽ中々御急決ニと至り申間敷と推考致し候なり

一當時廟堂將監殿を初メ男吏殿夷則殿市左衛門殿藏人殿九郎右衛門殿御留守殘りニ而御奉行鍾田軍番頭ニ而林九八永屋井口井澤傳ニ而有之候夷則殿少々宛正議ニ而先と奇特之事ニ有之休焉殿將監殿是迄ハ正議も少々宛相聞へ候得共當春之引入當夏美濃殿道家倒レニ付而猶出動之一條ニ相成候而ハ眞情相知レ何とも笑止之御人躰ニ相見候右之御人才ニ而ハ會計御運ひも付兼候趣ニ相聞へ近日孤雲殿猶又出勤御勝手方之儀等大中府ニ話合候様被仰付御心附米五百俵被下置旨ニ候もとや今日と藪岡書も御中老上田休も表御取次當分被仰付候而殘所無之御登用ニ而水前寺之隱居一人未タ動キ立無之迄ニ相成中候學校連ハ一抔ニ頭を擧け和流混同之御制近日御定メニ相成西洋流と輕輩迄之稽古ニ相成御侍之僮十人餘之出方之由ニ御座候七月初迄之勢と誠ニ勇々敷御軍制ニ相成可申と存居申候處ヶ様之勢ニ相成候段誠ニ慨嘆共何共言詞ニ難盡し因陋無識とハ申なゝら御兩殿様中興之御盛業御手初之勢を一時ニ變却致し候段沙汰之限りニ御座候ゝし夫と申スも當時美濃殿初メ末輩之私ニ至ル迄不束之致ス處ニ而自反奉恐入候外無御座慚獨之工夫專ら仕居他日報國之時を奉待候計ニ御座候なり

一西洋御誘ヒと思召と聊不被爲替既ニ本五日　御兩殿様演武場御入被遊七月初メ御入り後初メ而之御入ニ而正義一統大分眼を開キ申候ゝし和流一統と種々浮說も可有之中々之物議沙汰之限ニ而御座候先日來と　若殿様御令名を不都合ニ講誘仕候族も有之候由私共ニと耳遠く御座候得共世間之浮說と　不忍聞事共ニ有之候由今日御紀綱之頽廢如此ニ至り候歟と嘆息のミ仕候

一住江甚兵衛廿五日歸着矢拇面會致し候處餘程見識も打替り關東之話等一々矢拇論に符合致し安心致し候との話ニ御座候同人も表御用人被仰付直ニ上京被仰付候頼ミニ者相成不申候得共學校一流のミ被召仕候よりハ大ニ宜敷御座候なり

一志方司馬中山源治と御直對も被爲在候由ニ而大ニ見識も打替り申候由一人ニ而も開明致し大慶ニ御座候なり

一井澤傳鋒田平今日と根ニ相成り候小篠熊林新早川助澤村俯外ヵ相助け其外上田休井上治部等ニ而通丁京町山崎千反畑高麗門等少年輩迄鼓動致し實學西洋二家を惡ミ立候事實ニ切支丹より甚敷氷炭相反し候勢今日ヵ甚敷事是迄無御座候然し社中之面々と泰然として一人妄動之儀無之其職分々々を相愼ミ自反講習專一ニ致し居候ヘハ何一ッ咎を受候事ハ無之候追々聞方共沼山之留守等其外ニも徘徊致し候由實學之面々餘り靜カ成事ハ彼輩ヵと甚怪ミ候由承り申候

一沼山病氣も漸快く當月初ヵ外勤追々出勤致し候苦之由申遣候一旦ハ餘程之容躰ニ而既ニ死後之遺表も認メ候位ニ有之候由之處快復致し重々彌重之至ニ御座候東北平定　御東巡も被遊候得共治道之御手初ニ相成沼山平素之經綸今日共時ニ達候儀ニ而十二分之忠勤祈申候事ニ御座候

一新堀も今以滯坂小瘡病未タ全快無之病氣ニ而歸鄉延引之段と御斷ニ相成居申候此節之御上坂迄ハ滯ニ相成居可申候戻り船ニ共乘組ニ相成候ハヽ都合好御座候半と存申候

一牛島も願曰一兩日ニても上京之心積りニ居申候新堀沼山ニも面會致し候ハヽ藩内之事情等委敷相話申候様話合置申候

一今度　君上太政官之御模様御直覽被遊候而御聰明御開け被遊例之因陋輩も眼目相分り候得と後來之御開明誠ニ奉恐悦候然し例之引込見ニ而ハ夫も何程ニ可有之哉　朝廷之御教導を以春嶽公を初メ諸賢之補助を祈り申候計りニ御座候

一若殿様ニと七月末ヵ八月中ハ御病氣被　仰立置候事故ヵ一向御登城も不被爲在候九月三日御上京御決定被遊候而其後

ハ追々御登城ニ而一躰御意も被爲仲候御模樣ニ奉伺候神足十、七月之比私共轉役之砌既ニ轉職之調ヘ迄ニ相成候得共其後いろゝ致し候而討洩され候哉唯今迄無事ニ居申候此一人之　若殿樣御眷愛被遊候得ハ何卒持答ヘ居候樣祈り申候

一長谷川津田下津三人へ御役御免之御僉議濟ニ而被仰越由ニ承り候得共關東王政之御勢ニ而先御押付ケニ相成居候と相見候是亦珍重ニ御座候

一王政御根本上より臣下一般之御風勵ニ相靡キ東北平定之御恩威を以御一新ニ可相成候ヘハ遐く共來春迄ニハ又々陽氣之發動も可有之憂國之念慮日夜相忍ヒ樂天之悃誠深ク晦養仕居候事ニ御座候間萬々御安心奉希候なり

九月廿九日　認　　元田永孚拜

虎之助樣
御左右

十月朔日大總督府軍監安田源之丞依願免職せらる

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

（十月十一日御供御用人中村上より十一月朔日夜着の內）

一安田源之丞儀御暇を以軍監被仰付置候處兩親病氣ニ付軍監御斷御暇奉願爲看病罷下申度段內意申出候付別紙之通取調先日廿九日總督府ニ被差出候處情實無余儀次第被聞食屆依而軍監被免候段去朔日御付札を以御差圖相成候付差上申候（別紙願書略す）

十月朔日本願寺出役唯實寺良嚴長崎に於て米國宣教師ウリヤムンスと我國基督教の狀況につきて問答せしことを本殿年倚中に報す

〔慶應三年探索書扣〕

十月報知（九月二日耶蘇教師フルベッキ長崎を發して大坂へ往くの條に揭けたる九月報知略の續き）

十月朔日亞美利駕合衆國ヘルデンヤ國ノ耶蘇教師ウリヤムンスト出會問答之略（ウリヤムンスハ一昨年予尋云汝一昨年ヨリ何處ニ滯リシヤ　ウリ云清國ノ武昌ニ滯留ス

予尋云此度何事ニ日本ニ來リシヤ　ウリ云大坂ニ要事アリテ來ル

ウリ云耶蘇教ハ日本ニ弘ルト思ヒマスカ　予云追々信仰之者モアレドモ國禁ユヘ表向ニ弘ルマイ

ウリ云何故ニ禁スルヤ　予云日本ハ古ヨリ掟ナリ　ウリ云此節ハ日本モモハヤ表向許シマシヤウ

一夷人ノ話ニ云兵庫ハ一通ニシテ京大坂ニ大ニ館ヲ開クツモリ大坂ハ中島安治川邊京ハ圓山邊ナリ

一フルヘーキ九月上坂ウリヤムンス十月上坂ニ付種々之風評有之且大坂追々夷館盛ニ相成候ゟ浦上之邪徒共邪教茂最早公然開宗之心地ニ而彌增强情ニ相成候樣ニ見聞致候

十月三日刑法官を舊賀陽宮邸に移轉せしめらる

〔慶應四年王政日新錄〕

刑法官今三日ヨリ朝彥舊邸ヘ被引移候事

十月三日

十月三日京都傳馬御用所を設け其規則を發布せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（十月三日非藏人口にて石山左兵衛頭渡し秋田中將內村圓清より細達の書付）

一京都傳馬御用所御取建相成候迄三條通大宮西に入三寶寺を以假傳馬所ニ相定候事
　但十月三日ゟ取開候事
一人馬之儀者御用通行出兵等限り都而當司之添簡を以差出其余諸藩發京私用之分等一切差出申間敷事
一諸官司始人馬入用之節者前以當司に申入置當日其向々ゟ請取として小者壹人假傳馬所に差出候筈ニ付其者に人馬駈ゝ引渡可申候自今傳馬所ゟ銘々宅落カに繰込候儀者致間敷事
一諸官司より被差出候御用狀諸荷物自今傳馬所ニおゐて取扱可申事
　尤當司より掛之者壹人ッゝ致出役立合爲取扱候事
一宿駕籠等之一切差出申間敷萬一早追等ニ而買上被申入候ハゝ、世話可致事
一宮堂上方平生遣人夫各不同有之候得共都而領地高百石ニ付一ヶ年拾人遣之割合御定相成候ニ付其分申込次第無賃ゝて繰入可申事
一右人夫遣方ニより宮堂上方奥向之用筋ニ而領民不成而者難相叶其段前以屆有之候ハゝ、其通繰入可申萬一領民繰込方難出來候節之夫銀を以相納可申事
一傳馬所御定賃錢左之通申付候事
一京都ゟ大津迄
　人足壹人ニ付六百三拾九文
　本馬壹疋ニ付壹貫貳百八十二文
　輕尻壹疋ニ付八百三拾五文
一同伏見迄
　人足壹人ニ付五百四拾五文
　本馬壹疋ニ付壹貫五拾文
　輕尻壹疋ニ付八百三拾五文
一同淀迄
　人足壹人ニ付六百拾六文
　本馬壹疋ニ付壹貫貳百廿五文
　輕尻壹疋ニ付八百四文

一同山崎迄
　人足壹人ニ付七百壹文
　本馬壹疋ニ付壹貫三百八十六文
　輕尻壹疋ニ付壹貫五拾二文
右之通京都傳馬御用所規則取極取締役共に申渡候事
　辰十月
右之通候間相渡候事
　十月　　驛遞司
一同樫原迄
　人足壹人ニ付三百拾貳文
　本馬壹疋ニ付六百貳拾四文
　輕尻壹疋ニ付四百六拾六文

十月三日仙臺城内兵器點檢につき明日各藩士二人宛出頭せしむへしとの達あり
〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕　　行政官
十月三日
一昨日同斷（坂本藩陣なり）
明日當城器械點檢ニ付兼而御達之通各藩兩人宛八字迄ニ當局へ御出し可有之候事
十月三日
藝州藩　長州藩　筑前藩
因州藩　肥後藩
長官中
右之通ニ付馬淵次郎八中垣孫八郎罷出候事　　御使番

十月四日奥羽追討平潟口總督四條隆謌明五日互を發し岩沼まで進軍につき我藩兵隊互館まで進軍すへしとの達あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

明五日中軍岩沼迄　御進發ニ相成候條其藩兵隊互館迄進軍可致旨　御沙汰候事

十月四日　　肥後藩　　長官各中　　參謀

明曉六字本營前ニ相揃整列之上七字發足之事

十月四日　　米田虎之助

右之通一統ニ相觸候事

佐出家記錄〔戊辰之役奥州御出陣日記〕

十月四日霜初テ降

御本陣朝食後大枝ガ館ニ御轉營大枝孫三郎ハ當坂本ノ主知行四千石ヲ倉ミ館ノ周廻ハ水堀ニシテ内部土手高ク杉ノ老樹鬱茂シテ構造廣大ナリ夜ニ入リ互表參謀官ヨリ達來ル明日日四條殿ヲ初メ中軍ハ同所出發ニ付當御國手ハ同所迄進軍スヘシト

（本文中御轉營とあるは坂本にて米田總帥の移轉せしことなり又四條總督は去二日坂本を發して互へ進み居られたるものなり）

十月四日本藩和泉橋昌平橋の守衛を免せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

十月四日總督府より御呼出御渡之御書付寫　　肥後藩

和泉橋昌平橋守衛被免候條吉田藩ニ交代可有之旨　御沙汰候事

十月

十月四日水戸の景況により直に出兵の命あるへきを以て豫め準備し居るへしとの旨を我藩に達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

十月十一日御供御用人中　村上より（抄略）

一去四日總督府より御呼出ニ而出兵之儀先以見合相成候得共水戸表模樣次第急速出兵可被仰付との御書付一通被成御渡候付寫差上申候

此節水戸表爭亂ニ付而者御持場并御鎭撫所茂有之候付左京亮樣より御出兵之儀參謀ニ被仰談候末本文之通御達ニ相成候由其後賊徒水戸表立去候付御出兵之御達之無御座候　　肥後藩

出兵之儀先御見合相成候得共水戸表模樣次第急速出兵可被仰付候間其旨相心得候樣　御沙汰候事

十月

〔海舟日誌〕

十月三日　水戸朝比奈市川の徒并脫兵等千五百程水戸城に取掛内應も出來落城に可及哉と聞く

四　日　中島純次郎水府の事は城には不入弘道館より賊徒入込む所被燒討散亂と云

十月四日本藩入江八千兵衛（後藤木曾源太郎）徵士度會府權判事を命せらる

〔京都幷江戸返達御用狀扣〕

（十月四日石山左兵衛督より非藏人口に於て松尾彤助へ渡されたる書付）

細川越中守

其方家來入江八千兵衛儀徵士度會府權判事被　仰付候間出仕可申付事

行政官

十月

入江八千兵衛

徵士度會府權判事被　仰付候事

行政官

十月

十月五日各府藩縣の拜借金札上納方につき示達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（十月五日秋田藩村瀨清より我藩外六藩公用人へ廻達書付）

一金札石高拜借御渡方遲速之違ニ而上納方均シカラズ候ニ付一ヶ年一割之算當ヲ以拜借之月ヨリ月割ニ而每年十一月限上納可致候事

但十月後拜借之分者翌年正月廿日限上納可致候事

一年割上納之分兼而御布告之通會計官ニ而破札ニ相成候ニ付當辰年ヨリ府藩縣ニオイテ雛形之通印判押切上納可致候事

黑印

縱二寸五歩

年割上納　何府藩縣

十月

十月五日水戸地方の情況に據り出兵を命せらるへきにつき我藩豫しあ藩兵一大隊に出張を命す

行政官

〔江戸京都來狀扣〕（從慶應二丙寅年正月至明治三年）

（十月十一日在東京田中八郎兵衛より京都熊本の重役宛報告書の一節）

御側備之內

一大隊

右ハ水戸表模樣次第急速出兵可被　仰付候間共旨相心得候樣從總督府御沙汰有之候付出張被　仰付旨

沼川敬內

右者水戸表之模樣次第急速御出兵之筈ニ付大隊司士令ニ被差添御軍備方御勘定方御用を茂主ニ成申談候樣被仰付旨

右之通去五日及達候

十月五日本藩下總常陸鎭撫として松野又右衛門町市郎右衛門等に出張を命す

〔御國往來狀扣〕

（十月十一日在東京田中八郎兵衛より通達狀抄略）

右ハ下總常陸鎭撫として出張被　仰付置候ニ付至急ニ被差立旨　松野又右衛門　町市郎右衛門

右者佐々布貞之允元組副頭之場ニ而下總常陸鎭撫として至急ニ出張被仰付云々　右組共　松野善九郎

右者以前之通御物頭副士被仰付下總常陸鎭撫至急ニ出張被仰付云々　東次郎左衛門

右之通去五日及達候　中山閑五郎

右者御物頭副士ニ而下總常陸鎭撫として出張被仰付置候處外向御用兼相勤候樣被仰付旨　中山閑五郎

右之通同七日及達候

十月五日本藩米田虎之助奥羽追討平潟口總督府の命によりて坂木を發し亙城下に至る

〔佐田家記錄　戊辰之役奥州御出陣日記〕

十月五日

早朝坂本御出發（米田總帥等）山下町御休アリテ夕八時分亙城下市中ニ御着陣

晩方當城主伊達藤五郎三萬石ヨリ酒ヲ贈ル各懇切ノ情ヲ感ス

總督府ヨリ御達無之マテハ當地エ滯陣スベシト晩方申來ル

坂本ヨリ當所マテ戰爭ニ付構造セシ關門三ケ所里程ハ二里半ナリ

市中菓物ヲ初メ品々ノ價店前書付張出ス是ハ當地役人ヨリノ告達ニテ官軍ニ對シ實ニ謝罪ノ情ヲ顯シタリ

〔江戸發軍ヨリ同所凱施マテ日記〕

十月五日

一今曉六時整列六半時發軍夕七時亙着陣之事

一此方御人數進滯之儀惣督府御（此日岩沼御泊陣）ニ相伺候處暫當所ニ滯陣候樣進軍之儀ハ仙臺御着之上猶御差圖有之筈候段御沙汰有之候付一統へも爲心得相達候事

十月六日我藩昌平橋及ひ和泉橋の警衛を吉田藩（三河國）と交代す

〔御國往來狀扣〕

（十月十一日在東京田中八郎兵衛より通報書抄略）

右ハ筋違御門并昌平橋兼警衛として被差出置候處昌平橋守衛ハ被免吉田藩と交代被　仰付旨從惣督府御達有之候段及達同六日引代相濟申候　小坂大八　組

右ハ和泉橋警衛として被差出置候處同所守衛被免吉田藩と交代被　仰付旨右同斷及達同日引代相濟申候　平野太郎右衛門　組共

十月六日奥羽追討平潟口總督四條隆謌亙城を發し進みて仙臺城に入る尋て各藩兵の巡邏方面を指定せらる

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月五日

總督府卿來ル七日御入城之御決定ニ有之候處思召有之一日御促リニ相成明六日御入城ニ相成候事

十月　　參謀

薩州藩　筑前藩　因州藩
肥後藩　筑後藩

長官中

十月六日

一豆滞陣（米田虎之助の本陣の事）

一惣督様無御滞今日仙臺御入城相濟候由之事

先手に御達

〔討仙偏誠佐田家文書〕

大總督四條殿仙臺入城之事

斯くて仙臺の激徒奮幕の脱走等が石卷と云ふ處ニ立除き戰闘の意を含みけゑハ順逆の理反正の義を說示さんと參謀より某を以て屢もと雖も聊服もるの心なく進んて死もることゑ知り退て生ることを知らもと云て奮激當るゑらもを去ゑハ惣督卿の來り給へる𪜈待て討伐もゑしと此趣を𪜈ニ報しけゑハ四條殿聞給ひ同五日豆を發し同六日仙臺ニ聞へけゑハ其臣某姓名ヲ忘ル二小隊計り𪜈引卒し岩沼迄出迎道𪜈拂ふて導し仙臺の門外ニ止り左右ニ分ゑて拜謁もゑ礎部鹿之進列町西　壹番町ゟ拾番まて　廊内

肥後藩　薩州藩　大洲藩　因州藩　御親兵　藝州藩

右晝夜斥候巡邏可致旨御沙汰候事

十月　　參謀

薩州藩　肥後藩　因州藩
藝州藩　大洲藩　御親兵

長官中

ハ城門ニ出迎へけゑハ兵隊等ハ小銃を取て門内ニ拜立す扨も去ル六月奥地ニ入り給ひしより堅を破り剛を挫き向ふ處敵なく縱ニ五ヶ月を經て此城ニ入り給ひ衆庶萬歳を唱ふ然るゑ戰爭既ニ止みけゑハ中街道白川口より攻來りし各藩の兵隊も岩沼ニ出合大ニ混雜の折節處々沒落の諸侯其外貴賤上下の差別なく仙臺差て逃來りける者共今度寛典之命を蒙り故郷ニ歸りけれハ老を扶け幼を携へ或ハ馬ニ乘り或ハ駕ニ乘り人馬道路ゑ充滿して宿もる家を更ニふし山野ニ暴露もるも多ゑりける余此時器械彈藥を領もること四百七拾箇仙臺ニ入らんと欲もゑども雇夫來らもと雖も爲ん所を知らもと𪜈ニ滞留もること十有四日既ニして各藩凱旋の風評有り然ゑハ無用人馬費もゑゑらずと强て行くこと𪜈欲せず猶𪜈動𪜈伺ひ扣へたりかくて大惣督四條殿ハ仙臺城ニ入給ひ石卷の賊徒未た服せざれバ早く討伐を加へ仙臺を平定せんと薩州長州伊州三藩ニ命せられ同十日三藩の兵隊石卷差て操出せハ賊徒共是を聞兼而一戰の覺悟なゑとも粮米彈藥の貯へなく此地ニ長居ハ惡しゑりなんとちがの浦より小舟ニ乘り舊幕の脱走艦ニ移り蝦夷地差てぞ遁れけり是よりして奥羽二州の中官軍を抗防もる者なく大なる者ゑ其德ゑ懷き小なる者ハ其力ニ服し遠近靈く平定もゑハ參謀より仙臺の奸臣但木土佐瀨上主膳田邊彈吉等を引渡もゑゑ𪜈旨云ひ渡せハ仙臺ニゑ初より但木等を獄中ゑ繫き置たることなゑハ獄卒等彼の者共を縛りて引渡す然ゑハ此但木列ハ參謀瀨良周藏を殺し奥羽二州之兵を合し　宸襟を腦し奉りけるもの共なゑハ東京ニおゐて糺問を遂け重罪ニ處せらるゑしト鑑輿ゑ幽し護送もゑしとの命ニて即日兵隊を以て宿次ニし晝夜分たす差越さる

十月六日岩倉具視は東幸供奉中書を長岡護美に贈り國事に關する各地の情報を通告す

〔子爵長岡家文書〕

以別飛態々天氣御窺感拜此事ニ候無程參入何も可及披露候　聖上益御機嫌能被爲渡日々　行幸殊ニ快晴續キ實ニ一點之御申分も無之凡而御盛ん御事ニ而御同前恐悦欣然萬々御放念可給候登輕ニも彌御清榮恐悦殊ニ不容易形勢ニ當り御車下而來夜白御勉勵全く諸君之御盡力ニより東京之事及ひ奥羽之事今日之運ニ至り候儀と物比すへきなく只々感銘罷

有候尚不日　御着輦候條拜上縷々可申承頻りニ相樂居申候不取敢御請迄早々以上

十月六日

尚々如命奥羽之次第追々承候處實ニ驚入候官軍之憤戰元々所詮來年ならてハ御成功有之間敷存居候所ニ付一入感拜之事ニ候併庄内報知更ニ無之如何哉と存候亦水府城陷落之旨是又御配慮と察入候供奉之兵隊も貳千計ハ有之候ニ付時宜ニハ何時テモ繰出し可申存候也

東海道至極平穩駿府感心ニ敬順候是間亦御安心可給候也

昨日より大木民平出府被仰付候

長　岡　殿　　具　視

御　報

十月六日備前藩主池田章政東京行幸供奉を命せられ兵を率ゐて後衛を奉仕する旨を長岡護美に報す

〔子爵長岡家文書〕

寸毫謹呈仕候聖上益御機嫌能日々被遊御旅行奉恐悦候其地尊公彌御勇壯御奉職奉敬賀候然者小臣義先般刑官其儘ニて當分御人少ニ付議定同樣之心得ヲ以勤仕候樣被仰付猶此度東京行幸供奉被仰付兵隊爲御後衛差出候樣尚引卒之義ハ末家丹波守ニ被仰付候處同人義所勞ニ而御斷奉申上就而小臣に兵隊引卒之義も相兼供奉仕候樣被仰出日々供奉ニ而旅行仕候右之段京地御發輦前ニ尊公御初に呈書も仕東京着之上ハ萬端御世話ニ相成候御願茂申上候筈之處何分彼是混雜仕共義無御座乍延引以寸毫申上候吳々も別而宜御示教奉希上候右相願度如斯御座候恐惶謹言

十月六日　　池田備前守章政花押

長岡左京亮殿　　玉坐下

猶々時下御厭專一ニ奉存候乍末阿州公初へ宜御傳聲奉希上候別段呈書不仕候間宜尊公ゟ御傳へ相願候再拜

拜呈　　章政

旅中甚亂書御免可被下候

十月六日本藩主詔邦上京の途次大坂に着す

〔一新錄自筆狀〕

明治元年十月七日大坂發同十七日着他筆狀

以手紙申達候太守樣益御機嫌能昨夕七半頃御上坂明曉八半時之御供揃ニ而淀舟被爲召淀被遊御一泊旨被仰出奉恐悦候

（以下略）

十月七日　　藪圖書

長岡帶刀殿　始メ宛

十月七日奥羽追討平潟口總督府より東北征討軍士防寒用毛布下賜の旨傳達せらる

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月七日

一同前(亘滞陳)(中略)

先手に御達

御用之儀候條只今當局に可被罷出候事

十月七日

薩因藝伊　　肥後　　長官中　　参謀

右之通ニ付岩男内藏允罷出候處東北征討云々之御書付相渡候事　来ル九日ニ記六アリ

(中略)

十月九日　　昨日同斷(亘滞陳)

東北征討之諸軍勇進長驅已ニ賊巣ニ逼捷報今至り　叡感不斜候然處邊陬之地追々寒天ニ赴キ風雪之惨苦ニ可至哉ト深被爲痛　聖念候ニ付格別之思食を以て聊爲防寒毛布一着宛賜之候事

行政官

九月

別紙之通被　仰出候間早速右品調方諸所手段相盡候處「フランケット」は東京横濱をかけ千枚位之外品更ニ無御座候夫ニ付大ラシヤトンビ相調差送候心組ニ候處右者所持之輩も有之候間代料望之人ハ金三兩被下候間何レも人員御調品ト金ト相分御申越被成度依而此段得貴意候也

大總督府下参謀

九月廿四日

右兩通仙臺出張之參謀局より被相渡帶刀以上被渡下候由演達有之候段先手より申越候間一統に及達候事

十月七日我藩下總常陸鎮撫の爲め人員增遣するにつき會計局に申告す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

會計局に

下總常陸鎮撫之儀當藩に被仰付置候付先般隊長二人兵隊二拾人差出置候處此程押込火集之賊徒徘徊民家を惱し候段頻ニ申出候間猶又此節左之通出張爲仕候之間賄等御手當之儀最前御渡被下候當りを以御收納之內ゟ取調置追而御勘定仕上之節巨細御達仕候樣取計可申候と奉存候

隊長物頭　二人　　歩卒　拾人

副頭　一人　　鑓人足　五拾五人

兵隊　三拾二人

右之段申上候以上

長岡左京亮内　　島田次兵衛

十月七日

十月八日各藩の內紙幣發行の主旨に反き通用せさるものあるを誡め且つ之を非難し融通を妨くる奸曲者あらは嚴重に取締るへき旨を達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

十月八日

一今日五萬石以上之面々一藩ゟ公用人壹人宛非藏人口に御呼出ニ付志垣罷出候處西四辻殿ゟ左之御書付貳通被爲拜見候

事（三萬石以下の藩々へは翌九日此旨を達せらる）

今般厚キ　思召を以世上爲融通金札通用被　仰出候處諸藩之内間々未タ通用不致向茂有之趣相聞へ以て外之事ニ候
皇國一圓通用之儀ニ付藩々ニ於而茂追々相當之拜借仕なから不通用之向有之候而ハ全く　朝命を拒候筋ニ相當り候
ニ付向後右様不心得之向於有之ハ屹度　御沙汰之次第茂可有之候條兼而被　仰出候通正金同様令通用候様僻邑遐陬
ニ至迄速ニ可相達旨被　仰出候事

十月　　行政官

諸府縣に　御達書寫

今般厚キ　思召を以世上爲融通金札通用被　仰出候處間々不心得ニ而彼是と申難し通用を妨け奸曲之所行せしめ候
もの有之哉ニ相聞以之外之事ニ付府縣ニおゐて嚴重遂詮議右様不心得之者於有之ハ早速召捕可遂吟味候事

十月　　行政官

十月八日東京上野の戰に負傷せし我藩徒士千田四郎右衛門並に奥州原籠の戰に負傷せし藩兵松本傳十郎等の死亡せし旨を京都の軍務官に申告す

（慶應四年王政日新錄）

當春以來戰爭ニ付死傷人名可申上旨最前御達ニ付弊藩死傷御屆申上候内五月於東京上野炮戰之節徒士千田四郎右衛門
深手を負候後生死之境瞭と不分明ニ付相分次第追而御屆可仕旨其節申上置候處右ハ其後差重相果候段申越候間御屆申
上候以上

肥後中將内

十月八日　　軍務官　御役所

八月十一日奥州原籠表戰爭之節當藩人數深手を負候内
左之通追々相果申候

物頭格嘱導　松本傳十郎
中村左助隊　相賀彈助

右之段同所出先之者より申越候間御屆申候以上

十月八日　　肥後中將内　　内山又助　井原古久兵衛

軍務官　御役所

十月八日本藩世子護久書を弟長岡護美に與へて藩内の情實を述へ藩政意の如くならさるを報す

（神庫文書十五番辰印二十七番）

護久公ヨリ護美公へ

先頃來之追々華翰被成下源次右衛門（中山）列も着ニ而御許之御模様も逐一承知仕嘸々何ゟと御配慮山々奉深察候段々同
人に御申含之儀も承知仕何様ニも今日之旅詰不仕候而之不相成源次右衛門列も着前と之見込打替候小子も大慶仕候帯
刀列（閑様）も一ヶ月ツヽニ而も交代いたし候様至極宜可敷有御座右之處之其通ニ相成申候間定而不遠誰そ出立可仕小子
見込之席順ニ宜敷と存居申候事ニ御座候軍艦之儀も段々心配仕候へ共兎角因循ニ相成申候此度伍一郎（牛島）も上之御出
京之御共ニ參り申候間不遠内歸次第ニ之愈以其方取懸可申と存居申候兵制之儀も只今以被行不申實ニ歎息之次第ニ御
座候近日中より少ツヽ之出方も仕候見込ニ之御座候へ共何も小子見込通ニ參兼心痛之次第ニ御座候右之邊之段々入込

申候間此度之直(田溝)を差立申候間同人より委細御聞可被下候此度之先月廿七日上ニ茂御出京被爲在御船之儀も幸加州之船を長崎より借受相濟其邊之至極之御都合ニ御座候此度休爲(長岡)儀出京ニ相成同人も段々見込之次第も有之候間定而萬事御都合之御宜敷可有御座候とゝ存申候へ共御人繰も打替如何之御都合哉と奉懸念候小子も此度之追々朝命も有之候間是非出京不仕候而之不相成處上之御出京と申候而之甚心配仕候へ共御家老初論も其處ニ相成夫ゆへ小子之處之追而出京御交代ニ而も可申上存意ニ御座候右之邊も直に委細御聞可被下候角左衛門(道家)も此砌小子御存知通とても此者を被召仕候樣ニ無之而之御運も付兼候間至極望ニ御座候へ共右之邊ニゝ段々心配も不少將監(有吉)夷則(郡)へも談合兩人之處之是非召仕候樣無御座而不相成と申候へ共只今之少早く御座候と見込も御座候間小子之心配のミニ御座候軍之助(田鎖)列ニ而之何分運も付兼此度御留守中別而心配不少候此儀も直に御聞可被下候命計之儀實ニ切迫差濃(小笠原)引入候後之夷則近來之其方迄ニ孤雲(溝口)罷出申候へ共迎も夷人を呼寄金山ニ而も見付いたし何ニ付而も商法之夷人ゟら てゝ迎も委敷無御座候今より新地をつき候位ニ而之迎も諸藩とつり合兼不申右之邊も小子も望ニ御座候へ共時習館邊之今以相替不申井畦之論ニ御座候迎も彼方ニ御手之附樣ニ無之而も一統之人氣之向と候處ニ御座候間中々以六ケ敷事ニ御座候何も小子之實學西洋をのミ好ミ文武も取捨候樣之見込ニも合甚以右之邊ニゝ心配仕候此度之御留守中之何も手を引候覺悟ニ御座候其邊之御察可被下候御役々も段々被仰付候へ共十年前之人物ニ御座候間見込も矢張井畦ニ而御座候將監夷則之段々見込も有之宜敷御座候此上之一日も早ク御下國ニ相成上ニ茂御歸國有之候而御國之儀も篤斗御運ヒ之付候樣ニ無之而之不相成何樣小子之今日之旅行仕候方ゟ却而論も無之氣安かと存申候兵制之小子も段々說も有之候へ共何も夏以來見込通ニ參兼此度之兵制ハ鵠之樣成御備ニ御座候奥羽之方も段々御手も付官軍勝利恐悅之事ニ御座候御人數も如何ニ其後も御座候哉定而少々ツヽ者戰爭も可有之と存申候何も御歸國を祈申候極內々申上候直儀も御存知通宜敷夫ゆへ百貫御擬作根役申付候少々之自論も有之見込もせマク旁此度之使ゟ差立申候定而歸候節之宜敷と存申候誰も參候時とハ大キ相替助作(早川)抔も餘程相替候一人ニ而も右樣ニ相成候ハ御國之大幸ニ御座候外ニゝ何そ相替不申因循のミニ御座候午未二ノ丸樣(護久の父齊護の正室淺野氏)御初御揃被遊益御機嫌被爲入候御事御安心願申候小子も何そ相替不申六月よりゝ何方にも參不申近日ニ一度打方ニ水前寺迄參申候當年之上ニ茂御留守夫ゆへ水前寺方之鴨も澤山白川邊も多何樣天下之紛亂ニ候へ共鴨之治世と存居申候奥々も此上之御歸國を祈申候右迄荒々如此御座候早々頓首

十月八日

尙々時下御自愛專一ニ奉祈候御序ニ役々御側向へも宜敷願申候御心配之御察申上候早々以上

十月八日長岡護美東京に在りて豫め臨時出兵の隊伍編成法を定む

〔江戸京都來狀抄〕（慶應二丙寅年正月至明治三年）

（十月十一日仕立江戸詰田中八郎兵衛ゟ通報の一節）

一左京亮樣御滯府中事變ゝ應し御出兵之節御手當左之通

一左右半大隊之儀之相究居候通ニ而今日よゝ右先踏出日數十五日代受持被　仰付候

但時宜ニよゝ半大隊之內より二小隊又之三小隊分隊ニ而彼差出儀も可有之候

一大炮隊

右之通被差出事重候節之大隊司令士茂出張可被仰付候

右中之御手當

一大隊

一大炮隊

右大之御手當

右之通被究置候條兼而其覺悟いたし奉待御指揮候樣大隊附屬之面々に茂不洩樣相達置候樣

戸田儀兵衛

右同斷右半大隊ニ被差添旨

片岡四郎右衛門

古庄八太

大野平之助

右同斷左半大隊ニ被差添旨

右之通同八日及達候

明治元年

十月八日本藩毛利到の勤勞を賞し且つ觀光場取締役を命す

〔慶應四年轉職進階帳〕

御郡代之内同道　毛利到

到儀及老年候得共諸生教導筋不相替行屆自身之修行茂無怠慢致出精且近年歩兵練練御取起付而之主ニ成相倡格別御用相立候付別段を以御切米拾石被下置觀光場取締役被仰付座席組付御中小姓之上座ニ被仰付御足給五石并御役料米貳石五斗被下置御軍備方御奉行觸被召加旨被仰出之

畢而

文武藝教導筋之儀是迄之通相心得候樣被仰付之

以上

十月八日

右毛利到十月十三日申渡相濟候段申來候事

十月八日勝安房駿府へ往かんとするに際し長岡護美の問に對して鎮將府に請願せんと欲する條件を答ふ

〔海舟日誌〕

十月九日

昨日肥後侯より駿府え立歸出立に候はゝ可申立事共内々承置可申旨中島純次郎を以て御申越有之ヶ條書を以て答ふ三遠駿城地追々一二ヶ所にいたし跡は陣屋に可致事清水小普請の進退並引殘移住の取縮方○芝上野廟所の所置○其他兩三ヶ條也

十月八日曩に涌屋を發したる古屋作左衛門以下衝鋒隊四百餘名此日水路石の巻に到り長鯨艦に投す

〔大鳥圭介遺稿幕末實戰史附錄衝鋒隊戰史〕

諸隊の主將鳩首して長時間協議を行ひ（九月十三日福島にて）たる結果一先つ仙臺藩の意志を確めたる上若松の救濟を計るに決し大鳥圭介を委員に選んで早駕籠を飛し仙臺に急行せしめ各隊は桑折に前進して大鳥の復命を待つ甲斐もなや仙臺は世評に違はず已に鉾を伏せて謝罪狀を天朝に奉り恭順を表して只管罪を俟つの現況なるを報じたれば一同の落膽は恰も掌中の玉を奪れたるに等しく忙然自失して殆んど手を下すの術を知らざりしが桑名藩士より成れる雷神隊神風隊致人隊は事の成らざるを看取して斷然庄内藩に向て去り舊幕臣を以て組織されたる衝鋒隊傳習隊青龍隊等は兎も角も仙臺城下に兵を進めて散亂せる幕臣の脱徒を聚め福島に滯陣せる諸隊と共に若松の救護を計らんとせしに若松城も亦々二十一日を以落城の報に接せしかば今は陸上に一箇所の根據地も求むるに由ふく遂に兵を纒めて榎本等の海軍に身を投せんと欲し神風青龍の二隊は陸より衝鋒隊其他の諸軍は水路を取り十月一日を以て各々石の巻へ向け出發せり時に古屋佐久左衛門は乘船に先立て各兵を集め今や我が軍武運拙ふくして戰ひ利あらず諸士が粉骨碎身の努力も効果ふくして遂ひに今日の悲境に陷りたるは深く遺憾とする所ふるが將軍に於ても一意恭順を旨とせる場合ふれは諸士の責任は已に充分盡されたる事と信するのみか大勢の傾く處最早人力の如何ともすべきに非されば此際斷然農商何れとも生計の道を立るに如ず目下石の巻附近に滯陣せる諸軍隊も遠からず蝦夷に轉航して農商に就く可き筈ふりとか乞ふ幸に余の願意を諒して子々孫々の榮を計れと悲壯ふる訣別の辭は沈痛の態度を以て宣言されぬ時に一隊の志士は感窮り歔

欷嗚咽して云ふ所を知らさりしか誰れか此期に及び瓦と成て完全からんを欲する者ぞ一同に玉碎を希望して止まざるより總督も是非に及はす頭取秋澤直治差圖役勝田織江村越仲右衛門等を初め傷病其他健康勝れざる者二百五十餘名を強て涌屋の陣屋に駐め總勢四百餘名を率て石の卷に直航し十月八日を以て長鯨艦に投す時に彰義隊の殘黨澁澤誠一以下二百六十餘名旭隊の奥山八十八郎初め士官二十五名砲兵頭取關廣右衛門以下砲兵士官五十六名宮重一之丞以下騎兵士官三名は已に當艦に乘組み居りて計らすも久濶の對面をふし各自感喜して時ならぬ笑聲舟中に涌きぬ

十月九日本藩主詔邦京師に抵り壬生の藩邸に入る

〔御在京御在府御在國共御記錄〕

十月九日晴

一太守様御上京として先月廿七日御國許御發駕小島より蒸氣船ニ被爲　召御渡海去六日大坂御着翌日　御滯留同八日淀川御乘船淀御一泊今朝五時ノ御供揃ニテ同所御發駕倍御機嫌能夕八時前壬生御陣屋被遊御着候事

但淀より鳥羽街道千本通御通行

十月九日本藩政府は奥州出張兵の交代及ひ長岡護美歸藩に關する件を在東京幷に奥州出張の老臣に報告す

〔一新錄自筆狀〕

以別紙申達候東北之形勢追々官軍御勝利ニ而會津茂既ニ本城迄押詰其他仙臺米澤茂降伏之都合ニ候由此上之過激浮浪之向等窮策ニ不出歸順之筋と相運彌平均御鎭定ニ相成候樣致企望候奥羽出張且東京府御人數共交代之儀御見込之御稜書被差越委細被仰越候趣致承知早速評議被及申候處此節御軍制御改革ニ付而之御人數賦等之模樣も違ひ御注文通ニ之運象候付先別紙之通り評決　思召茂不被爲在候付其儘入御披見申候間　左京亮樣ニ茂御申上猶御樣子も御座候ハヽ被仰越候樣尤奥州交代之兵隊之往々番兵之御見互ニ有之候趣ニ付寺尾九郎左衛門組共ニ一隊吉田少右衛門貴田權内組共ニ二隊大炮手一隊御醫師二人關東行被仰付近日出立之筈ニ付着之上奥州引替之儀之宜御取扱有之候樣將又　左京亮樣東京御引揚被爲在候樣周旋筋之儀住江甚兵衛考議之次第申出候趣有之含之通被行候得之上下之幸甚此上茂無之事ニ付甚兵衛儀早々出京其筋盡力有之筈ニ付事成候得之御側手之御人數之御不用ニ付總常御鎭撫所幷武總御請持場丈之御人數交代計ニ而相濟可申哉夫等之件々甚兵衛着京之上報知之模樣ニ應し御取扱之都合ニ決着致候間左樣御心得此段も宜御申上被置候樣存候以上

十月

米田　藤　殿
尾

田中　殿

孤雲殿外
總連名

猶々金左衛門殿ニ之段々御詰月數ニ茂相成候ニ付而ハ御交代之儀御發駕前御沙汰之旨茂被爲在候付不遠御席中ゟ御代被差登ニ而可有之候間左樣御含候樣存候已上

十月九日津輕承烈書を米田虎之助に贈り其藩情を告け我藩の助力を索む

〔佐田家文書〕

明治元戊辰歳是保君奥州御出陣中より鯛瀬小左衛門林玄助兩人津輕表被差越候節津輕侯ヨリ之御返翰也

寸簡申入候日増寒冷相募候處愈御健剛御勤務被成奉賀候其後は久々御面謁も不仕打過殘懷之至ニ御座候扨此度は仙藩迄兵隊御引纏御出張嘸々御配慮之程察入候將當家之處ハ深御案事被下態々遠路之處御心添被下千萬辱次第奉存候兩人より模樣も委細承り當藩之處は是迄之取運ひ奥羽各藩にも被壓上方邊之模樣ハ更に不相分不都合之取運等も致候處漸

京地より重役罷下り右京大夫様左京亮様ニも段々御盡力被成下何共思召之程難有仕合奉存候就而は最早仙米會莊之譚責ニ預り候共斷然勤王之素心ニ確定致候間御安慮可被下候委細は小左衛門玄助より事情御聞取可被成下候猶此上共當藩之處は吳々も御盡力之程深御頼申候當節柄多忙御懇情之御禮迄荒々陳呈仕候不備

十月九日　　越中守

虎之助どの
机下

二伸時下折角御保護專要ニ奉存候拙子も明日久保田表迄爲伺　天機九候殿ニ出候事ニ御座候御序ニ津田山三郎にも宜敷御傳聲被下幾重ニも當家之處ハ吳々も御盡力被下候樣御頼申候多用大亂筆宜敷御推覽可被下候以上

十月

惠
紵
睦
右三字

御諱ニ付名字等ニ相用申間敷儀ハ勿論刻本等ニハ國書可致候事

十月　　行政官

十月十日至尊の御諱の字忌避闕畫すへき旨を布達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（十月十日秋田藩村瀨清より我藩外六藩公用人へ回達書付二通の内）

征討諸軍久々殊方に曝露し碎身粉骨連りニ捷功を奏候段深　叡感被爲在候然る處小家之向ハ獨任不相叶或ハ宗家ニ附屬し又ハ大藩ニ依頼し其力を効し候類茂往々有之候處自然其功勞隱沒不著候而者甚以遺憾之至ニ被　思食候條宗家大藩ニ於て精々取調功勞隱沒せしめさる樣可致旨被　仰出候事

十月　　行政官

十月十日征討軍中小家の功勞を隱沒せしめさるようとの旨を令達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（十月十日石山左兵衛督發し秋田藩村瀨清より廻達二通の内）

征討諸軍久々殊方に曝露し碎身粉骨連りニ捷功を奏候段深　叡感被爲在候然る處小家之向ハ獨任不相叶或ハ宗家ニ附屬し又ハ大藩ニ依頼し其力を効し候類茂往々有之候處自然其功勞隱沒不著候而者甚以遺憾之至ニ被　思食候條宗家大藩ニ於て精々取調功勞隱沒せしめさる樣可致旨被　仰出候事

十月　　行政官

十月十日奥羽追討平潟口總督府は仙臺滯陣の各藩兵に慰勞の酒肴を下賜す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月十日　滯陣
先手に御達
兵士爲慰勞御酒肴被下候旨御達有之候事

但會計官に可申出候事

十月十日　　長官中

薩州藩　肥後藩
筑後藩　伊州藩

十月十日本藩主詔邦に隨行せし藪圖書は藩主の上京につき嫌疑を受け老臣交代して上京するは却て支障あらんとの意を在藩老臣に通報す

〔一新錄自筆狀〕

以別紙申達候　太守樣益御機嫌能昨九日當御陣屋に被遊　御着奉恐悦候然ゝ拙者儀着京之上此表形勢等休焉殿より篤斗承り申候處先頃迄ハ堂上方を始メ　御上京を喜悦之趣ニ相聞居候内俄ニ昨今於外向ゝ肥後藩此節　君上始大擧ニ而大政官御所置筋等稜々屹度被仰立何處迄も御押通之勢ニ專相唱付而ハ正親町三條殿德大寺殿に茂被聞込從而堂上列藩ニ茂疑念有之哉之趣ニ御座候間　御着京之上茂今般　御即位を被爲祝　御出輦被爲濟候付而之　天機御窺迄其御筋に被仰上一躰之疑念薄らき候上萬般時宜ニ被應從來之　御本意貫徹ゝたし候樣無御座候而ハ何事茂相運申間數被相考申候既ニ出立前御兩殿樣思召之旨茂被爲在向後御同席中帶刀樣御始代ル々々當地之時躰爲御存御出京之儀御咄合之通ニ御座候處前文之次第ニ而此節御同勢外ニ茂御席中より唯今出京ゝたし候樣有之候而之彌以宜敷有御座間敷因而東京に御越之差障無之候得共此表地場御詰之御方ニゝたし候而ゝ是より得御意候迄之御出京無之樣休焉殿被申聞於拙者茂同樣之筋ニ付右之趣　尊慮奉窺候處　思召茂不被爲在候間左樣御聞置　若殿樣に茂被仰上置候樣存候此段爲可申達如此御座候以上

十月十日

御家老衆中

御中老衆中

再伸此節御先立之面々僅計致着坂居貳百餘之御同勢ニ而　御着京被爲在候事ニ付一躰穩ニ相見前文之唱茂不日ニ相止ミ可申歟と被考申候何樣此後御都合能相運候樣萬々奉禱候以上

藪圖書

十月十日岩倉具視更に答書を長岡護美に致して東幸路次の狀況を報し奥羽平定の功を稱揚す

〔子爵長岡家文書〕

本月七日華翰一通同斷開陽丸以下云々一通同斷九廿仙臺世子以下云々一通御重臣持參十十藤澤驛着拜承巨細御請可申入候所如何ニモ繁多乍意外只一筆御請申入候如命　聖上益御機嫌能被爲渡日々　行幸内外實ニ一事間然するなく御同然奉恐悦候各位彌御清榮夜白御勉勵之趣欣然此事ニ候小生始何レモ無異供奉乍憚御放念可給候奥羽戰爭之次第凡而案外迅速御平定素り出張官軍盡力ニハ候得共一ツハ在府各位之深慮ヲ被用候所と感銘此事ニ候臣等政府安座只々恐悦恥入候而已扨　御着榮も彌來ル十三日之事と恐悦久々拜面と屈指渴望罷在候今夕は殊取紛御請迄早々如此候也

十月十日　　具視

長岡殿

尙々御免可被下巨細御請可申入候所大取込一書御斷申入候萬々可期拜上如此候也

十月十日水野越前守書を長岡護美に贈りて其情願の周旋を乞ふ

〔子爵長岡家文書〕

包紙　長岡左京亮様　御直披

水野越前守

再伸愚臣差登候間委細之義ゝ愚臣より可申上候不一

過日は御繁多中於殿中拜謁難有奉存候其節歎訴仕候一條御模樣如何御座候哉奉伺度實ニ切迫仕飢渴ニ及候一段と相成中候御聲懸之程奉願候昨九日三條公亭へ罷越御同所へも歎訴仕候處模樣不相分當惑仕候何卒急速御沙汰ニ相成候樣御執成奉希候也恐々頓首

十月十日　　越前守

左京亮様

別啓拜陳仕候僕在所之義ニ付見込之を義三條公へ申立置候義ニ付御閑暇之節參上仕度尤朝夕御都合次第ニて宜敷御座候御日合御沙汰奉願候此義ゑ愚臣へも秘密ニ御座候間萬一御傳言等ゑ固御用捨奉願候不一

十日

上野堅五
野田半之助

十月十日本藩上野堅五野田半之助に侍從滋野井公壽東下につき隨行を命す

〔江戸京都來狀扣〕（從慶應二丙寅年正月至明治三年）

以別紙申達候

右者滋野井侍從様今度御東下付而御賴談之筋有之御同方様一同東京に被差越旨昨日及達候此段爲可申達如是御座候以上

十月十一日

御家老衆中
御中老衆中

藪圖書

十月十日舊幕脱走艦船は大鳥圭介の率ゐたる陸兵を乘せ奥州松島を發して折か濱に寄航す

〔述幕末實戰史〕（大鳥圭介述）

海軍の修理も可なり出來上り開陽の舵も假に造り上りたれば、十月十日我軍兵隊と共に開陽に乘り入り、折が濱（前陸國社郡）に廻りたり、其の外軍艦運送船も皆相並びて投錨せり、

十月某日不日龍駕東京に着御あらせらるゝにつき上下益々勵精して維新の宏業を宣揚すへき旨諭達せらる

〔御國往來狀扣〕

（十月十七日在東京田中尾藤より追々の御布告とて報告せしものゝ内なり）

龍駕近々着　御可相成候付而ゑ上下百官銘々自然ニ心得茂可有之候得共猶又一涯勵精シ御宏業を宣揚仕候様深ク可相心懸候萬一等閑ニ相心得諸藩意情風化を容し遂ニ更始之御大政を奉妨候様之儀有之候而ゑ以之外之事に付銘々ゑ勿論附屬家來之者共ニ至迄屹ト申聞一統協力同心して奉職可致旨　御沙汰候事

十月

黄　將　府

（此の書御國往來狀扣には去ル十日大總督府長官溜之間ニ而御布告トある達文の次に列記しあり）

十月某日東京行幸は四海一家東西同視の叡慮に出蒼生の疾苦を綏撫せしめ給ふものなれは各正道を守り不法の所爲なきやうにすへしとの旨を諭達せらる

〔御國往來狀扣〕

（十月十七日在東京尾藤田中より追々の御布告とて報告せしものゝ内去ル十日御布告とある文のつゝきなり）

主上此度　御東幸被爲遊候儀者先般　詔書を以被　仰出候通四海一家東西同視之　思食ニ而未曾有之　御盛典被爲擧候間上下一同厚ク　御趣意を可奉體認儀者勿論之事ニ付假初ゑも非道之威權ケ間敷儀且何事ニ不寄小民を爲腦候様之事決而有之間敷候辱茂蒼生之疾苦を　御按撫被爲遊候　御本意ニ基き奉り下ニも又一涯難有感戴仕其分ニ應し報效可仕儀ニ付諸藩士ハ勿論宮公卿之附屬等ニ至り分而正道を主とし無作法之儀一切無之御盛業を宣揚仕候様主人長官より篤ト可申聞旨　御沙汰候事

十月

鎮　將　府

十月某日着御の節の奉迎拜禮幷に翌日登城の際の服裝を定め且つ公卿諸侯登城の節大手門内從者の數を制限せらる

〔御國往來狀扣〕

（十月十七日在東京尾藤田中より追々の御布告とて報告せしものゝ内前掲のつゝき）

着御之節奉迎拜禮幷翌日登城共狩衣直垂勝手ニ可相用旨相達置候處衣冠着用いたし候而も不苦候間猶相達候事

鎭將府　辨事

辰十月

公卿諸侯登城之節大手御門内之帶刀二人小者三人之外召連候儀不相成候事

鎭將府

辰十月

十月某日長岡護美陛下の東京に親臨あるを機とし大に政教を敦くして關八州平定の基を立てらるへしとの意を建議す

〔一新錄自筆狀〕

東京府今日ノ急務利ヲ興スニアラスシテ害ヲ除クニアリ弊ノ大ナルハ人ノ耳目ニ觸郤而可除ト雖弊ノ小ナルハ不知不識ノ際ニ生シテ容易ニ除クコトヲ得ス此弊ヲ一洗スルハ官吏其人ヲ選フニアリ其人ヲ選フノ後賞罰ノ正明ナルヲ要トス賞罰正明ナラサルヽハ其極又弊ヲ生スルニ至ル可シ卽今東京府ノ緊務此根本ヲ固クスルニアリ根本固則枝葉繁茂ス可シ臣謹而考ルニ東京府ハ府中億兆ノ人民ヲ治ルノ根本ニテ府中ノ人心平定スレハ八州亦自ラ平定ス可シ今般東京ニ御親臨被爲在候ハ　皇國ノ御美事無此上候得ハ　御着輦ノ上ハ大ヒニ政教ヲ敦クシ府中ノ人心　皇恩ノ深キヲ感戴仕各其業其職ヲ安シ候義緊要ノ御義ト奉存候間當分參與ノ中ヨリ一人東京府エ出勤被仰付府中ノ事無大小取捨損益ヲ加政令正キヲ得者衆庶悅服八州平定ノ基本相立可申且府中尤重大ノ事件政令新ニ出ル等ノ事ハ一一議政官ニ決ヲ取候樣有之候者ハ無間然義ト奉存候

左京亮樣御建言御草稿之寫ナリ

〔一新錄自筆狀〕

（十一月七日寺尾七郎右衛門に託兵隊御取起等稜々申向之自筆狀抄略）

一主上茂先月十三日江府　御着輦被爲在其已前若松を始奥羽之藩々都而平定之由重疊奉恐悅候此折柄内外之形勢御比較未曾有之御仁風を被爲敷確乎たる御國體相立候ハヽ上下萬民之幸甚不過之就而者左京亮樣御建言之趣至極奉感戴候若松之降伏者實ニ意外之事ニ而於　朝廷可奉賀筋ニ候得共於彼藩ハ結末之處置何とも難得其意去りとハ可憐次第ニ御座候（以下略）

十一月七日

京都藪　東京米　殿

田殿

尾藤殿

惣連名

（本書は十月十一日に東京を發して十一月朔日熊本に着せし財津民助福田大助の携へたる書狀に答へたるものなり書中に左京亮樣御建言云々とあるを見れは其の建言ありしは十月十一日の前なることを察すへし）

十月十一日着輦の節諸藩士兵隊等は部内にて奉迎すへきこと及ひ横濱病院を廢し東京へ移すことを達せらる

〔御國往來狀扣〕

御使番方之廻狀御留守居方達

別紙貳通　御沙汰候條爲心得此段相達候以上

但病院之儀ゝ藩々ゟ出張先ゝ茂相達可申以後横濱表へ病人等引付候共別紙御達之通ニ付横濱病院ニ而ゝ引合不申候條其段茂出張先ニ御申越可被成且又御刻付無遲滯早々順達留之藩ゟ當局ゝ差出シ可被下事

十月十一日　　御使番

横濱表病院今般廢止東京ゝ移轉相成候條爲心得此段申達候也

十月　　御着輦之節諸藩士兵隊市中ニ於而混同拜禮萬一行違之儀有之候而ゝ甚以不都合候條總而郭内ニ於而拜禮可致候事

十月

十月十一日我藩藪作右衛門澤村脩藏に奉行副役兼公議人助役を命し小橋恒藏に公用人を命す

〔御國往來狀扣〕

以別紙申達候

右者御奉行副役被仰付御役料米並之通被下置公議人助役被仰付作右衛門儀御足米百五拾俵脩藏儀御足高百石被下置旨

右者座席御鐵炮頭第二等之席次座被仰付公用人被仰付御足高百石被增下置御家老之支配被召加旨

右之通今十一日申渡候則御請書一通差進申候此段爲可申達如此御座候以上

十月十一日　　藪作右衛門　澤村脩藏　小橋恒藏　藪圖書

御家老様　御中老様

以別紙申達候藪作右衛門列此度新之御役被仰付候處未御條目或ゝ勤之課目等無之事ニ付其筋相分候上御條目歟誓詞前書堅可被仰付候得共差寄別紙之通及口達置申候此段爲可申達如是御座候以上

十月

御家老衆中　御中老衆中　御達　　藪圖書

其方共儀公議人助役茂被仰付候付而者彌以從來之御誠實徹底いたし候樣被心懸儀者申迄茂無之候得共諸事　朝廷向御不都合無之樣可被相勤候追而勤向之儀御書付御渡茂可有之候得共此段申達候

公用人と諸事無腹臟可申談候以上

十月　　藪作右衛門　澤村脩藏

〔仝書〕

右ゝ東京ゝ御用有之至急ニ被差越旨昨日及達候此段爲可申達如是御座候以上

十月十八日（狀主充名共に無し蓋し藪圖書よ り東京諸重臣への書なるへし）　　澤村脩藏

十月十一日我藩仙臺滯陣の兵士に下賜せられたる酒肴料を配與す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月十一日　　同（同とは米田總帥の前日同樣瓦城下に滯陣せることなり）

一酒四斗六升

一肴料貳兩壹歩壹朱ト錢四百文

右之通昨日御達之御酒肴料會計官より相渡候付夫々御奉行より配當いたし候由之事

但仙臺著陣之御人數迄也

十月十一日仙臺滯陣古閑富次（聽密問根取）仙臺降伏後の狀況を亘在陣我藩總帥米田虎之助に報告す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月十二日

一仙臺表より古閑富次注進左之通り

當時仙府之動靜是迄河田寺鳥之兩參謀諸事處置いたし專寛仁を先立取計候ニ付人心茂稍居合候趣に候處今般堀高橋之兩參謀相違嚴猛之仕懸ニ而　內輪參謀之間茂整不申第一六拾萬石之器械にしては不相當ニ少く銃器等遠方之品は取寄之日合茂可相懸共分は取寄書付を以早々品付相達候樣左茂無之は兵隊を以家中家每ニ點檢探索いたし候段仙臺重臣共ニ申渡一統此元江戸之故轍ニは出間敷哉と少々動搖之體ニ相見申候左候而四條殿ニも嚴重之方ニ御同意之由ニ而河田寺鳥茂昨十日辭職相濟今十一日東京之方ニ引取候樣子之由右之次第ニ而仙藩上下疑惑恐怖之趣ニ御座候

一舊幕臣脫走之者榎本釜次郎列說得被行不申壯者ハ大概開陽回天ニ仙臺額兵隊迄乘せ組弱兵迄石卷ニ相滯居候由（是は船ニ乘り餘り候分ニ而鳥合之者之由）榎本ハ百方手を盡し探索有之候へ共悟り候と相見艦ニ問へば陸と答陸ニ尋ぬれば艦と申シ居所不相分彼策略茂空數相成迚茂說諭ニ而は難被行候間昨十日參謀堀直太郎薩州因州伊州三藩（未タ職爭致不申兵隊之分ナリ）之人數引率石卷之方ニ出張いたし候得共仙臺重臣共之見込殘兵盡ク弱兵迄ニ而戰ニは不相成降伏ニ可相成との噂尤開回兩艦共食料ハ來春迄茂用意いたし居候得共石炭拂底之上器械も揃所有之自在之運用ハ出來不申由

一昨十日津田方一同於伊達藤五郎宅一門並家老遠藤等面會いたし今般參謀入代り是迄諸事寛容之扱俄然嚴重ニ相變候共大體朝廷上之御趣意者始終御狂ヒ無之事ニ付參謀之異同ハ枝葉之事ニ而於仙藩ハ彌恭順之誠實相貫候樣有之度尤家中暴動沸騰之處重臣之手ニ自然相餘り候樣之儀有之候はゝ君上父子之直書ニ而鎭撫之布告等取計候樣萬一輕舉等之所行ニおよひ候而ハ猶一層之罪を被重候道理ニ付重疊鎭靜有之度旨申入候樣弊藩重臣米田虎之助より申付候段百端相述候處一門家老深信用いたし厚志之趣懇謝いたし申候

一後軍進營之儀ハ於督府御廟算茂有之候而之事ニも可有之今少し程見合內懸合にもおよひ候方可然津田方見込ニ御座候事

右之通ニ而石之卷成行之儀ハ追而相分り次第早速可申上候事

古閑富次

十月十一日

右石卷殘兵ハ忽降伏いたし候付大小迄も取揚仙臺城下へ送り來候由之事

十月十二日車駕東行中在國諸侯の名代等每月の天機奉伺日を改めらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（十月十二日石山左兵衛督渡し秋田藩村瀨淸より我藩外六藩へ廻達書付二通の內）

御東幸中在國在邑諸侯每月十五日名代重臣ヲ以　禁中御假建所ニ於て可奉窺　天機旨被仰出有之候處御都合ニより十四日ニ可罷出旨更ニ　御沙汰候事

十　月

十月十二日諸侯の騎從を減し庶民路を讓り互に通行を妨けさるへき旨を達せらる

行　政　官

〔慶應四年王政日新錄〕

（十月十二日石山左兵衛督發し秋田藩村瀨清より廻達書付二通の内）

諸侯供廻り多分召連登大華麗ケ間敷儀ハ昇平之久しき自然と驕侈ニ赴き候幣風ニ付先達而古今之形勢御參考之上簡易ゟ主とし供連定則被仰出候處頃日洛中之往來ニ供人多分召連間々挾箱等爲持或ハ先供之物喝道ニ齊しき擧動有之哉ニ相聞御趣意ヲ不辨次第ニ相當り以之外之事ニ候自今右樣之儀無之御定例通り屹度相心得候樣御沙汰候事

但供廻り之多少ニ依り貴賤ヲ相判候譯ニ無之貴ハ自ラ貴とく賤ハ自ら賤しき道理故道路之往來各自ニ共分ゟ辨へ互ニ相讓り通行妨ケ無之ハ勿論ニ候得共諸列侯へモ右本文之通被仰出候上者庶民末々ニ至迄此旨篤と領會いたし貴人と行逢候節禮義ゟ盡し不敬等決而無之樣可相心得事

右之通被仰出候間府藩縣ニおゐて其支配所之末々之者ニ至迄不洩樣兼而可申諭置候事

行　政　官

十　月

十月十二日車駕親臨につき西城を行宮と稱し群臣の登城を參内と稱すへき旨達せらる

〔御國往來狀扣〕

十月十二日鎭將府辨事より廻狀御留守居より達

今般　御親臨被爲在候付西城を奉稱　行宮群臣登城出仕等　參仕參内と可稱旨被　仰出候事

辰十月

鎭　將　府

〔慶應三年探索書扣〕

三月廿八日（明治二年也）

主上御着輦後時體概略引取書（抄略）

一東京府之事

主上御住居所新規出來ノ筈之處廟堂議論起り天下ノ公議ヲ取ラレス御住居出來ハ宜シカラスト云ニ決シ　御着輦即日ヨリ西ノ丸ニ仮　御住居ト云廟堂ノ議論モ壯ナリト可見還都ノコトヨリ如是賊ト私考

（右の奥書に「朝廷ヱ出シ入ノ話或迫々御聞取リ稜々等摘集シテ記錄大間違等ハ前以テ御斷申置候事四月機密間」と記載しあり）

十月十二日本藩中老藪圖書に公議人を命す

藪　圖　書

〔御國往來狀扣〕

以別紙申達候

右ハ當分之處公議人被仰付旨去ル十二日御直ニ被　仰渡候此段御家老衆へ茂御申達候樣存候以上

京都詰

御　奉　行　中

十　月

御　奉　行　衆　中

十月十二日本藩主詔邦の近侍中村新太郎奥州亘の我藩本陣に至り戰士慰勞の詞を傳達す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月十二日　亘滯陣

一戰士御慰勞として九月十五日比御國許被差立候御使者中村新太郎今日着之事

前月十一日於奥州原蓮戰爭いつれ茂苦戰之趣承之辛勞令察候此末愈無瑕瑾可致勉勵候猶中村新太可申候也

右御意十月十四日一統ニ相傳候事

十月十三日天皇東京行宮に着輦し給ふ

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

十月十七日御供御用人　村上より（節略）

一主上爲御東幸先月廿日京都御發輦去十三日品川驛ゟ夕八時過無御滯東京行宮ニ被遊御着輦奉恐悦候

十月十三日本藩主韶邦參内して天機を奉伺す

〔御在京御在府御在國共御記錄〕

辨事御役所

中將儀明十三日參　内奉窺　天機　御即位之恐悦申上且　大宮御所御機嫌ヲ茂奉伺度此段奉伺候以上

肥後中將内　内山又助

十月十二日

可爲伺之通事

十月十三日亘滯陣の我藩兵一中隊仙臺へ進入すへしとの通達あり

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月十三日

其藩兵隊亘ニ殘居候内一中隊當表ニ早々繰揚可有之候此段相達候以上

仙臺城下宿陣也

十月十三日

參謀

肥後藩

長官中

右之通ニ付本陣手一手繰込之及達候事

但七字整列八字出發之筈ニ候段も相觸候事

十月十四日在京諸侯の參朝天機奉伺日を改定せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

十月十四日

一太守樣今日御參　内之處左之御書付辨事ゟ御渡被遊御一覽候事

從當月中旬者十四日參　朝十五日不及參　朝上旬下旬者是迄之通候事

十月十四日

追而右十四日參朝ニ而十七日伺　天機茂可兼候事

此旨今日不參之輩ニも可申傳之事

但是迄在京之諸侯伺　天氣之御定日中旬者十七日ニ根元御取究之處後ニ十六日ニ相成亦十五日ニ相改居候處尙亦十七日ニ歸前驛之通御治定有之候間則御定日毎月左之通

朔日　五日　十四日　廿五日

十月十四日徵兵巡邏兵等隊伍行進の際宮堂上諸侯等に行逢ひたる時道路の半を讓るへき旨を達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

（十月十四日石山左兵衛督渡し秋田藩村瀬清より我藩外五藩公用人へ廻達書六通の内）

徴兵其他巡邏兵等隊伍行列之規則も可有之候得共往來之節宮堂上諸侯等別而御役有之候方々へ行違候砌ハ道路半を相譲り不失禮節樣　御沙汰候事

十　月　　行　政　官

十月十四日脱藩者復歸の件につき重ねて諭達せらる

（慶應四年王政日新錄）

（十月十四日石山左兵衛督渡之書付秋田藩より廻達六通の内）

浮浪士之儀ニ付今般更ニ被　仰渡候間右取扱方等之儀者軍務官へ委細承り合　御趣意致貫徹候樣精々可取計萬一御趣意行違候儀有之候而者其藩之越度ニ候條其心得可有之候事

十　月　　行　政　官

此御書付者去ル八月被仰出之同文ニ付略ス

近年有志之輩云々（八月四日の條既に記載す）

別紙之通被　仰出候條　御趣意拘奉體認銘々其籍ニ歸シ生活之道ヲ得候樣於其官厚ク處分之　御仁恤之　叡慮貫徹候樣可取計旨更被　仰出候事

十　月　　行　政　官

十月十四日長岡護美參朝拜謁し天盃及ひ御物を賜はる長谷川二右衛門同しく恩賜を拜受す

（御國往來狀扣）

以別紙相達候先月十三日　御着輦ニ付翌十四日　左京亮樣御參　朝　龍顏御拜御懇之　御直勅を以　天盃御頂戴於御

詰間御酒肴並羽二重二疋御印籠一御拜戴被成恐悦奉存候此段爲可相達如是御座候以上

十一月七日　　東　京　御　奉　行　中

（在京藪　圖　書　殿
（在館）長　岡　帶　刀　殿（外老臣略す）

尙々長谷川二右衛門より相達候別紙書付寫二通進覽仕候

長　谷　川　二　右　衛　門

當官を以京都在番被　仰付候事

十　月　　行　政　官

去月十四日於東京城　天顏拜　天盃頂戴御土產として白羽二重壹疋金子千疋被下候事

長　谷　川　二　右　衛　門

十月十四日本藩公議人の氏名を申告す

（慶應四年王政日新錄）

先般被仰出候公議人之儀追々御屆申上置候通於國許任擧相濟此節左之面々ニ申付候

藪　圖　書
助役
藪　作　右　衛　門
澤　村　脩　藏

右之段御屆申上候樣申付候以上

明　治　元　年

十月十四日　肥後中將内　内山又助

辨事

御役所

十月十四日本藩奥州征討軍總帥米田虎之助亙城を發して岩沼に至る

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

十月十四日　霧飛

早朝觸アリ今晝早々食事後御本陣手バカリ岩沼亙ヨリ二里半迄進軍御備組大砲手二組御物頭一組御番頭一組ハ當地ニ滯陣ス

ベシト昨夜半仙臺表總督府ヨリ御達シ來ルト

早晝食終テ亘町御出發（米田總帥）阿武隈川舟渡ノ河原ニテ相馬侯世子ニ御逢世子駕ヨリ下リ是保君ニ御會尺アリ夕七半時

分岩沼驛御着陣

相馬侯ハ一旦賊ニ組シ歸順後格別ノ軍功ニ對シ本領是迄ノ如ク下賜ル旨仙臺ニ於テ四條殿ヨリ御沙汰アリシト聞ク

當地主古内左近之助知行八千石ト云外郭水堀幅廣ク内部土手ハ老杉尤多シ館内及ヒ番所等ハ館林藩兵隊ニテ警衛ス市中ニ

棚倉藩ヨリ落來リ居シ者ノ宿所多シ今日ヨリ老若男女馬駕ニテ打立チ歸路ニ就ク者多シ

十月十四日我藩時勢に處する國是を決定し用人住江甚兵衛に意を含めて今日熊本を發し東西兩京に至り重臣等と協議せしむ

〔御國往來狀扣〕

住江甚兵衛

右者御用人被仰付表御用人兼帶被仰付旨

畢而用意濟次第出京被仰付御用相濟直ニ東京ニ被差越旨

右之通同（九月）廿八日申渡候

十月九日

藪圖書殿　御中老中

米田虎之助殿　御家老中

尾藤金左衛門殿

田中八郎兵衛殿

右者出京被仰付御用相濟東京ニ被差越旨被仰付置候付早打ニ而明日爰許被遊御差立候此段爲可申達如是御座候以上

十月十三日　住江甚兵衛

藪圖（同廿五日ヨリ）書殿　有吉市左衛門

本文甚兵衛儀御用相濟早打ニ而今日爰許被差立候以上

十一月五日　藪圖書

尾藤金左衛門殿

田中八郎兵衛殿　山田十郎

右者住江甚兵衛一同出京被仰付御用相濟東京ニ被差越旨被仰付置候付早打ニ而明日爰許被差立候此段爲可申達如是御

明治元年

座候以上

十月十三日（同廿五日着）　有吉市左衛門

藪圖書殿　藪圖書

本文十郎儀早打ニ而今日爰許被差立候以上

十一月五日

尾藤金左衛門殿

田中八郎兵衛殿

〔一新錄自筆狀〕

明治元年十月十四日住江甚兵衛出京前日御渡ニ相成候書取二通（但朱書入之方住江ニ御渡本書ハ財津源之進ニ御渡之寫也）

近年天下紛擾之本者外國制御之道を被失候處より如此成來（本朱書）ニ脱り更新之際（此八字朱にて消しあり）（消しあり）（朱字にて）候事ニ付「通親互市之際ニ茂」尊攘之大義を缺す確乎タル御國體相立候樣御盡力被爲在度事

右書通

一左京亮樣關東御引拂一ト先御出京左候而御下國と申御運ニ相成候得者無此上も事ニ候得共頓而御親臨茂可被爲在若哉其儀不被爲在候而茂東北之御處置茂不遠御落成ニ差臨候折柄強而被仰立候而者御鎭撫之御職掌而已ならす勤王象而之御誠意ニ茂相叶申間敷現實之御都合次第御進退可有御座候事

一東北事定り候上最前奥州御出兵御遲延等之儀萬一朝廷より御察討茂被爲在候ハヽ矢張有り之儘無御伏藏御辨白有之候而聊御子細有御座間敷御答振大概左之通

勤王之御誠意者于今不始事ニ而往昔關齋樣飽迄王事ニ御力を被盡近畿ニ御所領御内願有之候茂其後御菩提寺に代々官家之御家族御申受且堂上方ト成丈御緣邊御取結茂都而朝廷に之御因を厚被成置度御存念ニ而此節ニ至り候而ハ愈

從來之御誠意を被盡候儀上下一般之國論ニ御座候然處同し勤王之内ニ茂被仰出之御趣意を奉し照々之上ニ御奉公申上候茂有之又御處置之御根元ニ立戻御失體無之樣冥々之内ニ御奉公申上候茂有之御國之義者乍不及御根元ニ立戻此砌恩威被爲幷行候儀者勿論ニ候得共仰願者先恩後威何そ鹽合茂有之候ハヽ一刻茂戰爭を被止内萬民聖德を奉感戴外諸蠻戰栗仕候程之御國體ニ被爲至度依之左京亮樣關東鎭撫被爲蒙仰候即下より今日ニ至迄數度再應御上言茂御座候通ニ候處右之通何そ之鹽合を以戰爭茂被止度と盡力中御征討之人數を被差出候而者言行表裏且士臺之趣意ニ致違却候抔固陋之議論相發中々申諭等手間取不本意及遲延候得共既ニ致出張候上ハ取合之次第等追々御屆仕候通ニ而外ニ何之子細も無御座候不惡御聞取可被下候

十月十四日昨日折が濱を出帆せし舊幕脫走諸艦本日南部領宮古港に至り薪を積載す

〔幕末實戰史（大鳥圭介述）〕

十一日には余も松岡四良次郎、本多幸七郎等と上陸し百姓家にて入浴せり、翌日額兵隊士官共開陽に乘り移れり、

十三日、折か濱を出帆し金華山を左に望み十四日南部領の宮古に着き、薪を諸艦に積み込みたり（略）

〔防長回天史第六編中〕

第一次ノ箱館戰爭（抄略）

十二日艦船七隻開陽回天蟠龍神速長鯨大江鳳凰ヲ率ヰ觸艦相含ミ松島灣ヲ發シテ箱館方面ニ向フ搭乘ノ陸兵ハ彰義隊及ヒ大鳥、土方、古屋等ノ部下ヲ併セ總員三千餘人ト稱ス折ノ濱ニテ仙臺星恂太郎亦額兵隊ノ一部二百餘人ヲ率ヰテ之ニ投セリ

十月十五日東京行宮に於て來十七日より萬機親裁あらせらるゝ旨を達せらる

〔御國往來狀扣〕

明後十七日第十字より出御萬機　御親裁被爲遊候旨被　仰出候付百官諸有司何れ茂無遲滯參仕可有之樣　御沙汰候事

十月十五日　　行政官

別紙之通　御沙汰相成候付爲御心得申入候也

十月十五日　　辨事

長岡左京亮殿

十月十五日米田虎之助岩沼を發して仙臺城下に至る此日朝廷より恩賜の毛布を拜受す

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

十月十五日　霜强シ

早朝岩沼御出發增田驛ヲ過キ中田驛蕎食名取川ヲ渡リタ七時仙臺城下東昌寺エ御着陣

城下入口ヨリ御本陣所迄御物頭横田治部右衛門一組先達テヨリ當地着陣シ居レリ　御先頭ニ行進ス岩沼ヨリ五里半

岩沼邊羅ノ詳リ飛フコト幾千萬ナルヤオドロクバカリナリ（以下略）

朝廷ヨリ毛布下賜ル（官軍各隊帶刀以上の者え）

御達書（十月九日の條既に記載しあれば省略す）

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月十五日

一拂曉整列岩沼發三字仙臺城下着陣之事

先達御達有之候毛布賜ニ付人數書早々可被差出候事

但御品代金等人數丁細取調可差出候事

十月十五日　　御使番

長薩　第三大隊

筑前　肥後　　肥後藩

長官中

右之通ニ付御奉行方取調差出候事

十月十五日仙臺藩臣但木土佐を東京へ送致せらるゝにつき我藩に警衛を命せらる

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

明十六日伊達陸奥家來但木土佐其外重罪之者東京に被差送候付亘より坂本迄警衛候樣御達有之候事

十月十五日

右之趣亘表にハ別途惣督府方達ニ相成候事

十月十六日本藩政府は用人住江甚兵衛出發後更に財津源之進を上京せしめたるを以て其着京まで國是決定書に關する實行を見合すへき旨を在京都重役に通達す

〔一新錄自筆狀〕

別紙を以申達候住江甚兵衛儀出京被仰付夫方東京に被差越筥ニ而一昨十四日致出立右付而御趣意書取を茂相渡候處御目附方言上之趣有之候付甚兵衛致着京候而茂追而財津源之進出京迄者右書取之趣者勿論押置東京に罷越候儀茂被懸留置候樣存候此段爲可申達態と上々早打之飛脚差立候事ニ御座候已上

十月十六日　　速　　名（家老中老）

藪　圖　書　殿

尚々右源之進儀者昨日致出立候已上

十月十六日長岡護美より給與せる防寒衣を我奥州出征軍士に配當す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月十六日

原藍戰爭已來霜露次第ニ相增數度之戰爭難澁之趣　左京亮樣御聽ニ達思召を以帶刀以上下着壹着宛ラシヤノワタ入チヨツキナリ被下置旨東京府詰御奉行より津田山三郎出張之御迄申來候付直ニ配當之及達せ候事

〔佐田家記錄〕戊辰之役奥州御出陣日記〕

十月十六日

東京表左京亮樣ヨリ一統エ原釜戰爭以來霜露次第ニ相增難澁イタスベクト思食ヲ以テ銘々エ下着一着宛被下旨ニテチヨツキ一頂戴仕ル

朝飯後城内ナル參謀局エ御出(米田總帥)アリ

十月十六日在東京本藩演武場目附、教佐及ひ側備二小隊に下總常陸鎭撫として至急出張すへき旨を命す

〔御國往來狀扣〕

以別紙申達候

藤本學之助

右者護衛隊差配被仰付旨六月朝日於甲州鎭撫府申渡有之相勤居候處先月廿五日被免候段相達候

演武場御目附之內

一　人

教佐之內

一　人

御側備之內

二小隊

右者下總常陸鎭撫として至急ニ出張被仰付旨昨日及達候

御家老衆中

御中老衆中

十月十七日　田中八郎兵衛

尾藤金左衛門

（中略）

右之趣爲可申達如是御座候以上

十月十七日十七日を以て武藏國の鎭守とし親祭せしめ給ふ旨

又百官に對し正議直諫して輔佐啓沃すへき旨の勅諚あり

〔御國往來狀扣〕

勅崇神祇重祭祀皇國大典政教基本然中世以降政道漸衰祀典不舉遂馴致綱紀不振朕深慨之方今更始之秋新置東京親臨視政將先興祀典張綱紀以復祭政一致之道也乃以武藏國大宮驛氷川神社爲當國鎭守親幸祭之自今以後歲遣奉幣使以爲永例

明治元年戊辰十月（十七日ナリ）

勅皇國一體東西同視朕今幸東京親聽內外之政汝百官有司同心戮力以翼鴻業凡事之得失可否宜正直議諫啓沃朕心

明治元年戊辰十月（十七日ナリ）

今般　御東幸被爲遊候付而者祭政一致之　思食を以別帋　勅書之通武藏國大宮驛氷川神社以後之鎭守勅祭之社と被爲定當月下旬　行幸　御參拜可被遊旨被　仰出候事

十月

今般非常之　聖斷を以　御東幸既ニ　御着輦ニ相成候處東北略平定　御滿足被　思食候得共前途內外之形勢深ク御懸念被爲在　皇國一體之御成業彌以　御苦慮被爲遊候付別紙　勅書之通日々　臨御萬機　御親裁被　仰付出候就而

者百官有司質素簡易ニ原キ至正公平を旨とし同心戮力益可勵忠勤尤御爲筋存付候儀ハ何事ニよらす不憚忌諱正議直諫可致樣　御沙汰候事

十月　　行政官

〔防長回天史第六編中〕

（明治元年後半ノ大勢抄略）

十七日（十月）天皇始メ朝堂ニ出御シ萬歳ヲ親裁シ文武百官ニ詔シ正議直諫シテ憚スルコトナク以テ皇業ヲ啓沃セシム武藏國氷川神社ヲ勅祭社トナシ此月下旬行幸親祭スヘク自今奉幣使ヲ遣ハスヲ以テ永例トナスヲ布告ス

十月十七日戰死戰傷者人名調、東北征討軍凱旋兵士歸國等の件及ひ軍旗返納に關する令達あり

〔慶應四年王政日新錄〕

以廻狀致啓上候然者今日軍務官より月番三藩御呼出ニ而別紙御書付四通權判官事井田五藏殿を以御渡ニ相成夫々御觸下にも可相達旨被仰渡候ニ付則及順達候條早々御廻達御留り之御方樣より御返却可被下候以上

十月十七日　　秋田村瀨清

肥後樣

（以下八藩略ス）

公用人中樣

春來戰爭ニ付死傷姓名至急取調可差出先般來相達候處未遲延之藩茂有之且報知面人數相違之廉茂有之哉ニ候間尙亦篤と取調別紙雛形之通相認當月中必可差出候事

但取調兼候向者其旨可屆出候事

十月　　軍務官

何月何日何所戰爭　　死名前　死何人

傷名前　傷何人

右合　　右

月日　出兵諸藩　何藩

東北平定追々人數引拂被　仰出候分者都而兵隊直ニ國邑ニ可引取候尤總括或隊長歸途東京ニ罷出候樣申達候事

十月　軍務官

出兵之節　御旗御下渡ニ相成居候藩々歸陣之上早々當官ニ返上可有之候事

十月　軍務官

十月十八日本藩藪作右衛門澤村修藏に公議人を命したる旨を辨事役所に申告す

〔慶應四年王政日新錄〕

左之兩人之者公議人助役申付置候處此節更ニ公議人申付候間此段御屆申上候樣中將申付候

藪作右衛門　澤村修藏

以上

十月十八日　　肥後中將內

辨事御役所　　內山又助

明治元年

十月十八日本藩公議人澤村脩藏を東下せしむへき旨を辨事役所に申告す

〔明治元年御在京御在府御在國共御記錄〕

辨事御役所に

今般　御東幸ニ付諸藩公議人何も茂海陸勝手次第　御着輦前後東京に可罷越旨被仰出候通ニ付澤村脩藏儀用意相整次第不取敢東下仕セ候筈ニ御座候此段御屆申上候樣中將申付候以上

肥後中將内　内山又助

十月十八日

尙待　御沙汰進退可致事

十月十八日東京品川妙解院に於て我藩戰病歿者の法會を行ふ

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

十月廿七日

（東京よりの通信書切死記の内に）

一左京亮樣思召を以奥州於原竈戰死之面々一昨十八日於妙解院招魂祭御法會執行被仰付且又東府並奥州出張向ニおゐて相果候面々添法事をも被仰付戰死親類之族ハ御寺詰被仰付其外知音之面々參詣不苦段御達有之左京亮樣にも御臨祭被爲在候段御奉行迄申來候事

十月十九日本藩軍制改革につき備組統轄次第を改定す

〔明治元年機密間日記〕

覺

御備頭に

御軍制御改革ニ付御備組統轄之次第左之通

藪圖書元組

一番大隊　小坂大八
足輕十二番隊　小堀
同　拾八番隊　野田

四番大隊　神谷矢柄
足輕一番隊　小篠
同　四番隊　安富

十一番大隊　岩間小十郎
足輕七番隊　八木田
同　八番隊　金津

十二番大隊　寺尾九郎左衛門
足輕五番隊　吉田
同拾四番隊　貴田

清水數馬組

二番大隊　落合彌次兵衛
足輕拾九番隊　吉海

同貳拾番隊　山路

六番大隊　奥村軍記
足輕三番隊　水野
同二十三番隊　寺本

九番大隊　大河原次郎九郎
足輕六番隊　中村
同　拾番隊　横田

十番大隊　柏原要人
足輕貳拾貳番隊　松野
同貳拾四番隊　町

木下嘉納組

三番大隊　下津縫殿
足輕拾三番隊　内藤
同　拾五番隊　下河邊

五番大隊　宮村庄之丞
足輕二番隊　魚住
同　九番隊　金守

七番大隊　澤村尉左衛門
足輕拾六番隊　木造

同　拾七番隊　和田
八番大隊　牧　多門助
足輕拾一番隊　飯田
同弐拾一番隊　白木

右之通被仰付候條左様相心得組々ニ茂可被達候以上

十月十九日

（付札）當時出張中之隊ニ編入之面々茂御下知無之内者勿論出張ニ不及候

（同）無役着座大組附等一隊々々ニ分配之儀者追而取あらへ可被相達候

十月十九日舊幕脱走艦蝦夷鷲の木沖北海道渡島に到る

〔大鳥圭介述 幕末實戰史〕

十七日、諸艦宮古港を發し東北に向つて走り十八日南部領尻矢岬を望み、暫時にて針路を西に取り、十九日江山を望み諸人欣然奮躍、本日午後鷲の木沖に着す、長鯨、大江船は先に着し居れり、自餘の船は追々後れて到着せり甲板上に出で四方を望むに積雪山を埋め人家も玲瓏として實に銀世界の景也

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（十一月九日軍務官長於溜之間御布告之寫抄略）

南部表より宮古ニ出帆之舊幕府脱艦七艘之内四艘去十九日朝五時箱館脇亀ヨリ陸地十二丁計隔候鷲木村ニ上陸六千人程ニ御座候

（編者曰、右幕末戰史に長鯨艦は十九日前既に鷲の木に着し居たる如く見ゆれと齋鋒隊戰史には他艦に遅れて二十三日鷲の木に着港すとあり且つ回陽回天其他の諸艦も二十二日に鷲の木に着せし如く記述して幕末實戰史及ひ京都並江戸返達御用狀扣と巷説の點あれは參考の爲め左に附記す）

〔大鳥圭介述 幕末實戰史附錄衝鋒隊戰史〕

衝鋒隊の落武者を乘せたる軍艦長鯨は其翌日卽ち十月九日帆を卷て石の卷港を出帆し敵情偵察旁々沿岸を航行して十二日折が原沖を通過十三日鍬ケ崎に錨泊して糧食薪炭の積込を行ひ十八日の正午再ひ拔錨して二十日北海道砂原沖に達し遙かに回陽艦を望見したるを以て信號を傳へ共に適度の聯絡を保ち宛上陸地點の探索に從ひしに一刷毛撫でたる如き黑雲は俄に羽翼を伸して急ち中天に漲り凜々たる朔風は翻々白雲を飛し怒濤は澎湃として宛然飛瀑の如く巍然山の如き大艦も木葉の如く泛々として漂弄せられ進退の自由殆んと窮りて各艦は不幸にも僚艦を見失ひ單獨にて航行するの止むをきに至りたれば長鯨艦は夜に及んで一時射魔兒沿岸に投錨して天明を待ちしに夜明けに至るも天候は依然として猛惡を極め恢復の見込をきより二十一日亦もや風雪を冒して出帆沿岸を辛うじて航行し翌日漸く畵兎毛港に避難するを得附近の偵察を行ひしに海上行衛を失したる回陽艦を初め回天千代田其他の僚艦は二十二日相前後して鷲の木に到着し已に戰鬪部隊の上陸を終へたりとの情報に接したれば長鯨艦は直ちに茂呂蘭へ回航して茲に貯水其他の用意を整へ二十三日の午後一時を以て再ひ發航の途に就きたるが天候も稍々靜りたるを以て前日來の困難を見す同六時鷲の木に着港翌二十四日の早朝悉く全部の上陸を終へ云々

十月廿日江戸城を以て皇居と爲し東京城と改稱する旨を達せらる

〔王政復古帳〕

十月廿日辨事方之廻狀

御東臨之節以當城　皇居と被定候付以來東京城と可稱事

但過日被　仰出候　行宮之稱被止候事

辰十月

〔防長回天史第六編中〕

（第十六章明治元年後半ノ大勢の内）

十三日東京ニ著御江戸城ヲ以テ皇居トナシ改メテ東京城ト稱シ登城ヲ參朝又ハ參内ト改稱セシム侍臣ヲ病院ニ遣リ士卒ノ創痍ヲ問ヒ菓子ヲ賜フ

十月廿日鎭將府廢止の旨を布告せらる

〔王政復古帳〕

十月廿日總督府溜之間ニおいて御布告之寫

東北未タ平定ニ至さるの折柄一ト先鎭將府被相立候處今般御東臨被爲遊候付而者萬機　宸斷を以て被仰出候御儀ニ付自今鎭將府被廢候事

十月　　行政官

〔防長回天史第六編中〕

（第十六章明治元年後半ノ大勢の内）

十八日鎭將府ヲ廢ス是レヨリ先キ三條實美書ヲ上リ天皇既ニ東京ニ行幸シ萬機親裁アラセラルヽヲ以テ鎭將ノ任ヲ解カンコトヲ請フ之ヲ允シ會計局ヲ改メテ會計官出張所トナシ明日鎭將ニ付所管ヲ行政官ニ移ス

十月廿日長岡護美召に依りて參朝し議定職同樣心得を免し當職を以て東京在勤を命せらる

〔御國往來狀扣〕

左京亮樣去ル廿日依召御參　朝之處關東御用中議定御同樣之御心得を以御勤仕被仰付置候處今度被免御當官を以東京御在勤可被爲在旨被爲蒙仰恐悦奉存候（以下略）

十月廿六日　　田中八郎兵衛

藪圖書殿　　尾藤金左衛門

御家老衆中

御中老衆中

〔三條實美公年譜〕

公（三條實美）岩倉具視木戸準一郎大久保一藏等ト相議シ外國官知事伊達宗城ヲ以テ議定ト爲シ（知事故ノ如シ）刑法官副知事池田章政軍務官副知事長岡護美ノ議定心得ヲ罷メ軍務官判事大村益次郎ヲ以テ軍務官副知事トナシ章政護美及議定蜂須賀茂韶東久世通禧參與大久保一藏等ヲシテ東京ニ駐在セシム

十月廿日本藩永田條之助益田勇鎭將府廢止につき各々其職掌を解かれ秋吉又助徵士會計官出納司知事を命せらる

〔江戸京都來狀扣〕（從慶應二丙寅年正月至明治三年）

（十月廿六日在東京尾藤金左衛門田中八郎兵衛より京都熊本の重役宛報告書の一節）

右者今般鎭守府被廢候付是迄之職務被免旨

右者徵士會計官出納司知事被仰付旨

右之通去ル廿日御達有之候段相達候

永田條之助（鎭將府應接方）

益田勇（鎭將府官掌）

秋吉又助

十月廿日木藩草野豹藏病氣全快に依り先きに提出せし學校御用掛の辭表を取消されむことを請ふ尋て許可せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

十月廿日

一左之御書付傳達所に小橋方持參伊地知右膳致落手候事

草野豹藏儀先般御屈を以學校御用掛被　仰付候處年來之宿痾差重頻に加療養候得共急に快復之期見へ兼候付右御用掛被被免被下候樣奉願跡人躰之儀之於國許選擧仕早々差登候樣申遣置候段最前申上置候通に御座候處同人病氣逐日快方に趣此程全快仕候間折角御人選を以被仰付候儀に付右御用爲相勤申度此段奉伺候樣中將申付候以上

肥後中將内

内山又助

十月廿日

御付紙　辨事御役所

伺之趣聞屈候事

十月

右御伺書十月廿三日公用人御呼出に付小橋方出方之處於非藏人口北大路外記を以御付紙之通被　仰渡候事

十月廿日我藩下總常陸草賊出沒の聞あるを以て更に若干兵を增遣す

〔京都幷江戸返達御用狀扣〕

東京城に

下總常陸鎭撫之儀當藩に被　仰付置候處此程押込火付等之賊徒徘徊士民を惱候段申出候間先日隊長三人兵隊歩卒共四拾貳人差出置候得共場廣之儀に付何分巡邏等屈兼候間猶又今日より左京亮側兵隊之内左之通差出申候尤右兵隊者時々交代爲致候筈に御座候

隊長	一人	喇叭手	二人
司令士	拾三人	大砲付世話役	一人
嚮導	二人	陪卒	一人
神官	八人	歩卒	六人
兵隊	五拾四人	乘馬	一疋
大鼓役	四人		

右之段御屈申上候以上

長岡左京亮内　島田次兵衛

十月廿日

十月廿日本藩奥州出征軍隊此日を以て悉く仙臺城下に入る

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記、御國往來狀扣〕

別紙を以申達候拙者並跡御人數去ル朔日中村發軍之段ハ先便申達置候通に候處同日坂下着三日迄滯陣四日互舘迄進軍十三日迄同所に滯同日一中隊仙臺城下に繰込候樣御達に付十四日本陣手迄發軍岩沼泊陣に而十五日當所着いたし候殘御人數ハ十九日廿日迄兩日に無滯繰込申候

右ハ津輕へ御使者として被差越旨及達去ル朔日出立同十九日罷歸候往反之間聞取書別紙壹冊相達候付則差進申候

右之趣爲可申達如是に御座候以上

鯛瀨小左衛門

明治元年